

葱嶺の白き父なる山

ムスターグ・アタ登頂の記録

日本ヒマラヤ協会

THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN

パミール
葱嶺の白き父なる山

日本ヒマラヤ協会 (HAJ)
1993年ムスターグ・アタ隊





ムズターグ・アタ Muztagh (Mustagh)・Ata

慕士塔格山 ムウシタコオシアン

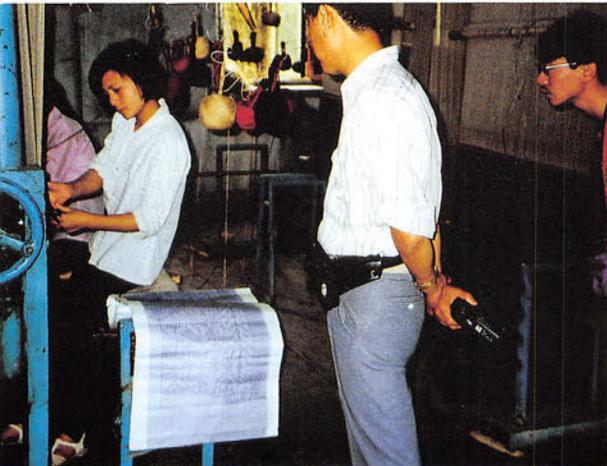
中国・新疆ウイグル自治区。パミール東部。カシュガルの南西約200km。
7,546m。

古くから有名な山で、1894年スウェーデンのS.ヘディンが、1900年イギリスのA.スタインがこの山を目指したが、登頂できなかった。

1956年に中国・ソ連合同登山隊は南稜から31名全員が初登頂。

1981年に川崎市教員隊が主峰の北側にある北峰(7,427m)に北西稜より初登頂。

山名は氷の山の父の意。 [38° 15' N 75° 10' E]



ウルムチの絨毯工場



シュク村のナン売り



カラクリ湖よりのムスターグ・アタ



スバシにて

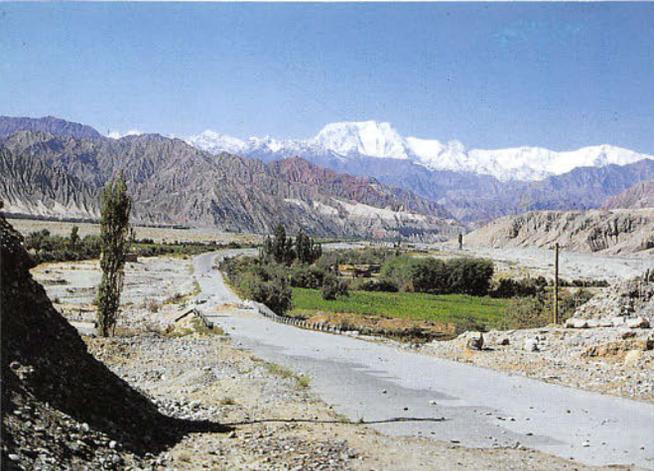
ア プ ロ ー チ

BC への高所順応より下山



BC へ荷上げに向かうラクダ





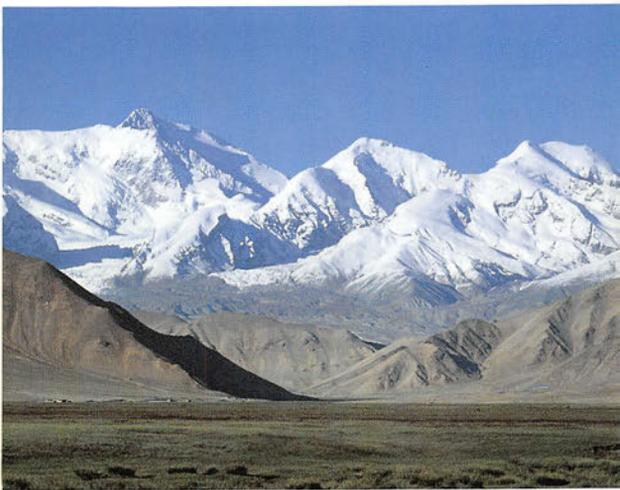
カラコルムハイウェイとコングール



ゲズ河沿いの風景



スバシ周辺の花畑



スバシよりのコングール

ウルムチ～BC

カシュガルの楽士



カシュガルの子供達





ヤンブラク氷河とコンゲール



C1 上部のアイスフォール帯



登頂めざし C2 へと向かう



アタックで休憩を取る A 隊

登 山

アイスフォール帯を見下す



6000m 付近のアイスビルディング





6000m 付近を登る



BC へと下る A 隊



A 隊登頂



B 隊登頂

BC ~ 頂上

C2 付近よりの眺望



C3 よりの眺望





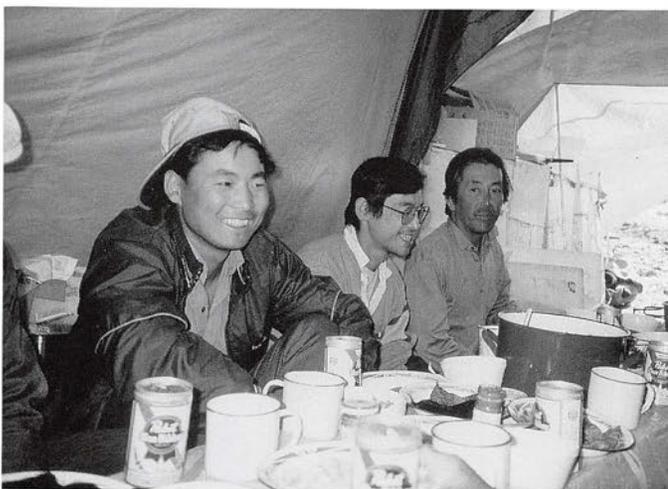
ウルムチの夜を楽しむ



スバシでの幕営準備



BCでのガモウパックの試験



BCでの憩い

スナック

頂上で石を拾うA隊



BCでの餃子作り





高所順応にて



BCでの登山準備



C1での休養



C1での酸素ポンベの試験

隊員の小景

凍りつく流れでの食器洗い



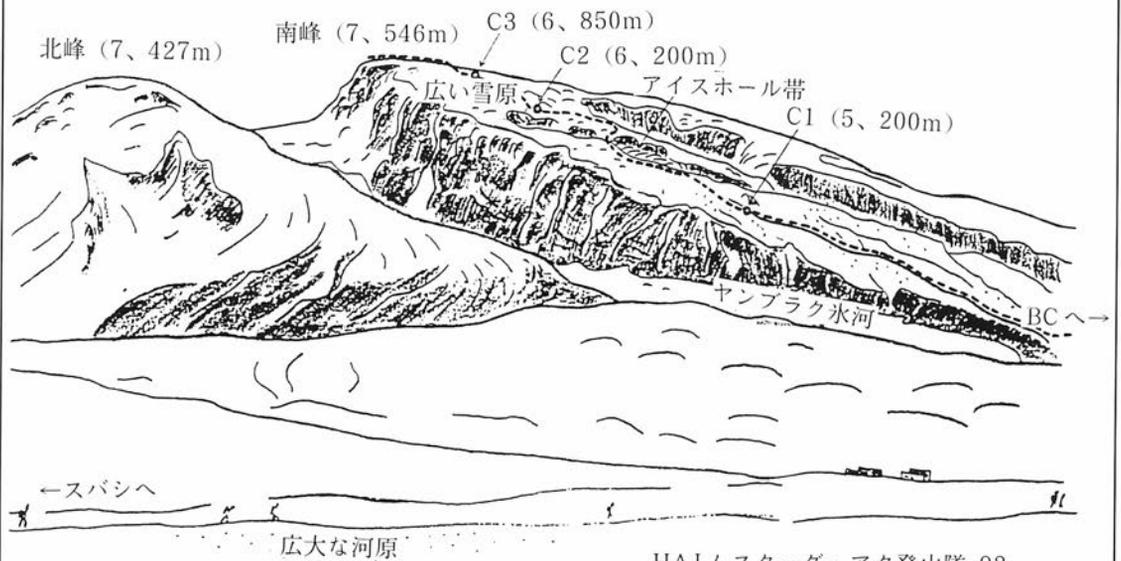
カラクリ湖にて



パミール概念図



ムスターグ・アタ コース概念図



目次

ご挨拶

日本ヒマラヤ協会ムスターグ・アタ登山隊	
隊長 酒井 国光	1

第1部 登山報告

登山隊の概要	5
行動概要	6
行動日誌	
疎勒の国へ	谷田川 武 7
小川流れる草原にて	谷田川 武 10
ラクダは良く荷を担ぐ	樋上 嘉秀 11
氷河を見下ろしながら	谷田川 武 12
氷塔を回り込んで	西嶋鍊太郎 13
寒さと闘いながら	西嶋鍊太郎 16
6000Mの風は冷たく	天城 敏彦 17
アタックを前にして	西嶋鍊太郎 18
登頂への王手	志小田美弘 19
私のC3建設記	高橋 敏雄 20
長きラッセルの果てに	西嶋鍊太郎 21
僕の登頂記	伊藤 英世 24
アタの頂上はこんな所	中島 俊弥 24
白一色の世界での苦戦	天城 敏彦 25
私の登頂記	樋上 嘉秀 27
刈り入れの草原を後に	酒井 国光 28
シルクロードのロマンを胸に	谷田川 武 30
アタ周辺概念図	西嶋鍊太郎 32

第2部 隊員の横顔・随想

隊員の横顔	35
随想	
こんなつまらないことはない	酒井 国光 41
ロバ君の思いで	西嶋鍊太郎 43

ビバークについて	天城 敏彦 44
パミールノットの高峰に立ちて	樋上 嘉秀 46
トイレに寄せる随想、瞑想	谷田川 武 48
カシュガルの町にて	高橋 敏雄 50
西域からの通信	志小田美弘 50
楽しかった夏休み	中島 俊弥 52
93ムスターグ・アタ雑感	伊藤 英世 52
ムスターグ・アタ参考文献	54

第3部 隊務報告・資料

隊務報告	
総括	酒井 国光 57
庶務	谷田川 武 58
登攀	西嶋鍊太郎 58
行動表	60
装備	高橋 敏雄 61
食糧	天城 敏彦 62
現地買い出しリスト	63
医療	樋上 嘉秀 65
医薬品使用状況リスト	67
気象	中島 俊弥 70
気象記録	70
環境	中島 俊弥 71
記録	谷田川 武 71
ムスターグ・アタ登山史への試み	
	酒井 国光 72
ウイグルとカシュガルの概要	谷田川 武 77
7500m峰一覧	79
アタ通信(準備日程に代えて)	80

編集後記

ご挨拶

我国の海外登山熱は、年々高まりを見せており、ヒマラヤ登山の分野でも同様であります。しかし、強い志向があるにもかかわらず、身近に良きアドバイザーが居なかったり、同行の志が得られないなどの理由で、せっかくの夢も実現できないまま眠っている現実も少なくありません。

当日本ヒマラヤ協会では、会員の様々なニーズに応え、休暇の取り易い夏期に、比較的短い期間で登れる山を目標としてサマーキャンプを実施してきました。

過去、7,000m級の山としましては、インドのヌン峰(7,135m)やサトパント峰(7,075m)等を実施してきました。そこでは大きな成果を得ており、そこで育ったヒマラヤニスト達が、その後各地で意欲的な登山を展開している現在です。

今年、会員より要望の高い「夏期に7,500m級の山」の条件を満たす山として、中国の西、東パミール高原に聳え立つ名峰ムスターグ・アタ(7,546m)をサマーキャンプの一環に加えました。

ヒマラヤ協会隊としてムスターグ・アタ峰への登山は、昨年に引き続き2度目です。

92年隊は、ヒマラヤ協会悲願の山「クラウン峰登山隊」の事前高所順応登山として実施したものです。8月10日、C3より頂上にアタックしたものの、荒天のため6,920mで潔い撤退をしました。大事の前の小事というか、高所順応に重点を置いたこの隊にとっては「頂上」にこだわる必要はなかったのです。しかし、それは表向きの理由で、登れるはずの山に登らなかったということは、隊として、協会としてひとつの課題を後に残したことになります。

当然のこととして、この隊はムスターグ・アタ峰登山についての多くのノウハウをもたらしました(『ヒマラヤ』No.257)。それらのノウハウを分析すると、海外登山が初めての者でも、高所順応

隊長 酒井 国光

さえうまくいきさえすれば、登山期間20日間で、7,500m級の山に登頂可能であることが判明しました。

隊長を引き受けた時点で、「全員登頂」という形で昨年の課題を解決したいという秘めた決意を抱いていました。

所定の準備を終え、彼の地に渡った隊でしたが、幸せなことに8月17日5名、8月18日6名と『11名全員登頂』を実現することができました。北京での祝賀会で、中国登山協会の王鳳桐副首席から『1980年我国の山を外国人に開放して以来、7500m以上の山へ10名を越す隊員が全員登頂したのは初めてである』と祝福していただきました。

今再び、ムスターグ・アタ登山の日々を振り返る時、阿斯拉常務副首席はじめカシュガル登山協会の方々、特にBCへ同行いただいた高志堅連絡官、趙海竜通訳の一方ならぬご助力に心から感謝いたします。また、国内でも有形無形のご支援をいただきました皆様方にも、ここで厚くお礼申し上げます。有難うございました。

今後とも変わらぬご指導・ご鞭撻をお願い申し上げます。

1994年1月



第1部

登山報告

- 登山隊の概要
- 行動概要
- 行動日誌



登山隊の概要

1. 登山隊の名称

日本ヒマラヤ協会ムスターグ・アタ登山隊1993年
(英名 HAJ Muztag Ata Expedition 1993)

2. 目標の山

ムスターグ・アタ (中国名: 慕士塔格) 7,546m
- 中国人民共和国 新疆ウイグル自治区 -

3. 登山期間

1993年7月24日~8月28日 (36日)

4. 登山の目的

- 1) 西稜からのムスターグ・アタ峰登頂
- 2) テイクイン・テイクアウト (山岳の自然を汚染しない運動) の徹底実践

5. 派遣団体

日本ヒマラヤ協会
The Himalayan Association of Japan (HAJ)

6. 推進の組織

日本ヒマラヤ協会ムスターグ・アタ登山隊実行委員会

- 会 長 稲田 定重 (HAJ 理事長)
委員 長 山森 欣一 (同 専務理事)
副委員 長 酒井 国光 (同 理事、登山隊長)
事務局 長 尾形 好雄 (同 常務理事)
委 員 八木原 啓明 (同 常務理事)
委 員 登山隊員

7. 事務局 (留守本部を兼ねる)

日本ヒマラヤ協会
〒169 東京都新宿区高田馬場3-23-1
淀橋食糧ビル506号
☎ 03-3367-8521 FAX 03-3367-4509
☎ 03-3680-2280 山森 欣一 (夜間)

現地連絡先

中国新疆喀什市体育路8号
喀什地区登山協会気付け

8. 隊の構成

隊 長	酒井 国光 (54才)	茨城県	総括
副隊長	西嶋 錬太郎 (50才)	石川県	登攀
隊 員	樋上 嘉秀 (49才)	大阪府	医療
"	天城 敏彦 (46才)	東京都	食糧
"	谷田川 武 (39才)	東京都	記録
"	金森 博之 (39才)	神奈川県	食糧
"	高橋 敏雄 (34才)	宮城県	装備
"	志小田 美弘 (34才)	宮城県	装備
"	池上 邦彦 (32才)	福島県	装備
"	中島 俊弥 (28才)	長野県	環境
"	伊藤 英世 (26才)	東京都	食糧

連絡官 高 志堅

通 訳 趙 海竜

行動概要

- 7月24日 成田発15時25分、中華航空926便。北京着18時18分。(天橋賓館)
- 7月25日 北京市内観光。北京発14時05分、新疆航空。ウルムチ着17時50分。(華僑賓館)
- 7月26日 ウルムチ市内観光。ウルムチ発20時20分、新疆航空。カシュガル着22時05分。(チニアケホテル)
- 7月27日 カシュガルにて食糧の一部購入、隊荷の再梱包作業。
- 7月28日 ホテル発10時20分。マイクロバス1台とトラック1台。スバシ着16時半。この日より幕営。
- 7月29日 スバシ滞在、休養。
- 7月30日 高所順応で全員BC往復。
- 7月31日 4名はスバシ滞在。7名は高所順応でBC途中の4000mのピークを登山。
- 8月1日 全員でBC入り、BC(4350m)設営。
- 8月2日 BC滞在、登山準備と休養。
- 8月3日 先発、後発2隊でC1へ、ロバにてC1への荷上げ。C1(5200m)設営後、BC下山。
- 8月4日 BC滞在、休養。
- 8月5日 全員でC1入り。夕方、3名が5350mまで偵察。
- 8月6日 A(ルート工作)・B(荷上げ)の2隊に分れて上部へ。A隊は6000mまで、B隊は5750mまで。
- 8月7日 2隊で上部へ。8名はC2設営(6200m)、3名は6000mまで。
- 8月8日 C1滞在、休養、食糧・装備点検。
- 8月9日 2隊で上部へ。A隊はC2入り・泊。B隊はC2往復・C1泊。
- 8月10日 A隊は6700mまで上部工作の後、C1下山。B隊はC2入り。
- 8月11日 A隊はBC下山。B隊は6300mまで高所順応の後、BC下山。西嶋副隊長の誕生日パーティ。
- 8月12日 BC滞在、休養。
- 8月13日 BC滞在、休養。
- 8月14日 全員でC1入り。
- 8月15日 全員でC2入り。
- 8月16日 A隊は上部へ、C3設営(6850m)。B隊はC2滞在、休養。
- 8月17日 A隊は頂上アタック、5名登頂、C2下山。B隊はC2よりC3入り。
- 8月18日 A隊はC2滞在、休養。B隊は頂上アタック、6名登頂、ホワイトアウトと夕暮れのため7100m付近でビバーク。
- 8月19日 A隊はB隊サポートのためC2滞在。B隊はビバーク地点よりC3へ、C2への下降を目指す、C3泊。
- 8月20日 A隊はC2よりBC下山。B隊はC3よりBC下山。C1よりは一部ロバにより荷下げ。
- 8月21日 BC滞在、下山準備。
- 8月22日 BCよりスバシへ。スバシ発14時半、カシュガル着20時20分。(チニアケホテル)
- 8月23日 カシュガル滞在、隊荷整理。夜、ウイグル料理にて答礼会。
- 8月24日 カシュガル滞在、観光。
- 8月25日 カシュガル観光。カシュガル発22時40分、新疆航空。ウルムチ着0時05分。(華僑賓館)
- 8月26日 ウルムチ発9時10分、新疆航空。北京着12時45分。(天橋賓館)
- 8月27日 8名は万里の長城観光、3名は中国登山協会と会計・市内観光。夜、中国登山協会による夕食会。
- 8月28日 北京発9時20分、中華航空725便。成田着後、解散。

疎勒の国へ

—出発～アプローチ—

7月24日 成田—北京

昨夜、金森・中島を除く9名がヒマラヤ協会事務所に集合、他何名かも交えて遅くまで盛り上がる。その後、若いメンバーはサウナを求めて、夜の高田馬場を彷徨う。朝2名が合流し、スカイライナーで成田へ。11名のため、団体扱いとなり、酒井と谷田川とは地下の事務所へと行く。昼食後、酒好きなメンバーは早速バーでビールを飲む。何名かの見送りを受け、搭乗手続きをする。第2ターミナルが出来たせいも、意外とすいている。機の到着遅れで、15時25分テークオフ、CA926便、上空は雲海が広がる。全員、ほろ酔いのうちに中国時間（日本と1時間の時差）18時18分北京着。中国登山協会の出迎えを受け、バスにて市内へ。空港からの高速道路は大半が完成している。片側3車線の立派なもので、中国風の料金所が目目を引く。道路の両側はオリンピック誘致へ向けての彩りであふれている。建築ラッシュと夕暮れの渋滞の市内を通り、20時30分天橋ホテル着。日本資本による立派なホテルで、昨年雪宝頂隊の時も利用した。隣接する北緯飯店にて夕食を取る。今日から暫く豪華な中華料理を味わえる。中国遠征の楽しみのひとつである。

7月25日 北京—ウルムチ

明け方前より激しい雨、町が雨に煙る。8時40分出発、まずは中国美術館に行く。先に土産物の展示場を見たため、短時間で絵画などを見学する。力強い絵が多く、駆け足で見た割には何枚かが印象深く残る。少し走って中国医学院へと行く。氣功、按摩、触診などの講義を受け、電気療法などの実験を受ける。コードを持った医師を中心に全員手を繋ぐと相当強い電気が走る。具合悪い人はということで、真っ先に手を上げた志小田が首から腰に掛けての電気療法を受ける。最後は日本語のチラシが配られ、薬を買わないかとしきりに勧められる。一瓶1万円前後する。それだけ効用が有

るのだろうか、我々はこれから山に向かうからということで、全員逃れる。11時15分空港へ、近くにて昼食後、搭乗手続きをする。隊荷が100キロオーバーということで一悶着あるが、計量がいい加減なのであり、結局超荷0となる。しかし、搭乗するとダブルブッキング、中国では良くあることとはいえ、いささかうんざりする。機はロシア製で下から入り込む。14時05分テークオフ。15時すぎ、砂漠地帯に入り、黄河を見下ろす。濁流ぶりが良く分かる。その後、ずっと砂漠が続くが、雲が多い。延々と雲が湧き、押し寄せてくる感じだ。下は雨なのだろうか？西嶋と異常気象なんだろうと話す。17時前、右手に雪の山が見え出す。祇連山脈であろうか。左手にも高山が見えるという、崑崙山であろう。その西端に我々の向かうムスターグ・アタは聳えている。写真では見慣れた山であるが、実際はどんなであろうか、胸が高鳴ってくる。17時45分、眼下にウルムチの町が見え出す。流石に大きい。町全体が茶色ぼく、どこか霞んだ感じがする。17時50分（実際是北京と2時間の時差があるが、北京時間が使用されている）ランディング、ウイグル語の表示に西域にやってきたことを思う。榆とポプラの多い町並みを華僑賓館へと入る。途中、火鍋城という大きな看板が目立ち、四川に行ったことのあるメンバーから火鍋の話が出、バスの中が盛り上がる。このことが、下山後、火鍋を求めての彷徨いに繋がる。高層のホテルから見下ろす町は、淡い色彩の建物が多く、飛行機から見た印象と違って美しい。夕食後、隊長以外は町への散策に出る。ホテルが中心街から外れているためか、だいぶ歩いてやや生焼けのシシカババー（羊肉の串焼き）を食する。その後、西嶋・池上・中島を除く6名はホテル近くの食堂へと入り、水餃子などを味合う。その量の多さと安さとに皆びっくりする。それにしても、今回の隊も皆良く飲む。

7月26日 ウルムチ—カシュガル

明け方よりの車と馬車の音に起床、空気が冷たい。10時半出発、まだ朝の渋滞なのか、トラック、殊に石油タンクが多い。ウルムチが重工業基地であることの一部が伺える。まずは絨毯工場を見学する。若い女性が多い。16歳で専門学校に入り、18歳で就職、結婚して退職する人が多いようだ。月給は200~300元という。年齢の割には中国では高給取りであろう。1日3cmしか織れないというから当然であろうか。大物を織り上げるには2年掛かるという。見学後、その大物のひとつを西嶋が時間を掛けて購入する。??万円。次に紅山に登る。夕方、その岩肌が赤く染まることから命名されたウルムチの象徴である。頂部に3層の望楼があり、眺めが良い。雨が降出すが、傘を差している人は少ない。通訳のヌルさんによると、7月は1、2日しか降雨はないという。その雨に、往復路共我々は出くわすこととなる。運が悪いのか、それともやはり異常気象なのか？ホテルでの昼食後、玉の工場へと行く。日本語の旨い妙齢の令嬢が案内してくれる。マンガンを使って研磨している。現在でこそ、和田を初めとして、新疆は玉の産地としてよく知られているが、かつては権力者の象徴、宝器として、その産地は秘密にされ、何人もの命が奪われたという。次は別の絨毯工場へと立ち寄る。ここは年配の人が多く、大柄で織り込んだ糸をその都度切る工法を取っていた。空港へと向かい、20時20分テークオフ。ロシアからの借用機で、北京から来たものが向かうため、カシュガルへは1日1便しかない。昨日と同様雲が多い。22時05分、美しい夕暮れの中、カシュガル着。シルクロードの要衝であり、かつては疎勒と呼ばれた地である。

様々な本に登場し、私にとっては長年の憧れの地である。通訳は趙さん、昨年のクラウン隊についてた人で、日本語は堪能である。ウルムチとは違い、エキゾチックな雰囲気の中をチニアケホテルへと入る。チニアケとはウイグル語で美しい庭園という意味だそう。大勢が民族衣装で出迎えてくれる。全員やや興奮気味の中、3日目の夜を迎える。ホテル周辺はパキスタン人も多く、5年前の遠征を思い出す。

7月27日 カシュガル滞在

7時起床、志小田とホテル前を散策する。数はさほど多くないが、顔を覆った女性が目に留まる。やはり、年配の女性ほど多いようだ。ポプラ並木の向こうにコングールが見える。全容は分からないが、大きいと感じる。10時半、登山協会事務所へと向かう。朝の町は活気に溢れ、走り過ぎる路地には面白そうな風景が続く。帰りのカシュガル滞在が楽しみである。事務所は体育協会事務所と一緒に、住居も併設され、ちょっとしたアパートのようである。2隊に分かれて買い出しとパッキングとを行う。暑い、テントの中に頭を突っ込んだりしているとくらくらとしてくる。ホテルに戻っての昼食を挟み、17時10分終了。大プラパール26、シート1の隊荷が出来、明日のキャラバンに胸が高鳴る。全員でトラックに荷積みし、真っ黒となってホテルに戻る。夕食後、今日の買い出しの会計、B・Cでの食事の件などについて、趙さん、連絡官の高さんと打ち合わせを行う。町に出ていたメンバーも合流し、隊長部屋で盛り上がる。結局、1時過ぎまで花を咲かせる。



▲ロシア製の機に下から乗り込む



▲玉の工場にて

7月28日 カシュガル〜スバシ

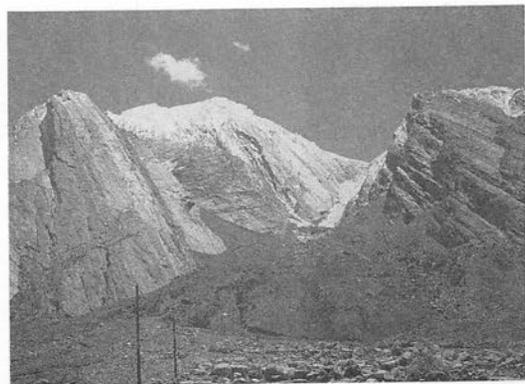
7時起床、今日も上天気。昨夜の飲み過ぎのせい
か、食欲のない者が目立つ。このホテルはサービ
スが良く、気持ちいい。10時20分、ホテルの女性
たちの見送りを受けて出発。右から3番目の娘がい
いなどという声が年配の隊員から上がる。道の両
側、路地の両脇にはポプラが近距離で並び立ち、そ
の緑が美しい。ポプラは乾燥地帯では育つのが早
く、大きな日陰を作るために良く植えられるが、根
が弱いために土地を流出させ、かえって砂漠化の
一因となっている、と友人から聞いた話をふと思
い出す。しかし、真っ青な空にすらっと伸びた緑
は美しく、良いなあ〜と思う。道はパキスタンと
を結ぶ国際道路、有名なカラコラム・ハイウェイ
であるが、それ程交通量は多くない。11時荒涼と
した土地に出る。遠くコングール連山が高い。世
界地図などには只コングールと出ているが、実際
はかなりの長さに及ぶ連山だ。その中でも、本峰
のどっしりとした重量感溢れる台形は一度見たら
忘れられぬ山容だ。緑のシュフ村にてナンを購入、
再び荒涼とした地帯に入り、ゲス川沿いを走る。火
炎山を思わせるような風景が続き、地層が非常に
複雑で、様々な色が混ざりあっている。黒・赤の
層も目立ち、石炭を産するという。所々道が悪く、
バスを降りて歩く。13時15分チェック・ポスト着。
雪山が見えてくる。ここから約1時間緩やかな上り
道が続くが、どこを見ても絵、写真となる雄大な
山岳風景が広がる。コングール、そしてコングール
・チュビエの前衛を巻き込んでいく形となる。上

り切ると、高原状の平地が広がり、池が散在する。
池の周辺には草が茂り、羊や馬が草を食んでいる。
何とも良い。バスは結構のスピードで走っている
ため、失敗覚悟で何枚もシャッターを切る。やが
て正面にどっしりとしたアタが見え出す。思わず
『大きい!!』、『でか〜い』などの声上がる。15
時半、カラクリ湖着。予想通り美しい湖である。コ
ングールとアタとが湖を挟むように聳え立ち、そ
の白い影を水面に映している。ここからだ、コ
ングール本峰からの主氷河も手に取るようだ。購
入してきたナンの昼食、堅いが味はいい。16時半、
スバシ着。気持ちのいい草原にキャンプを設営し、
スバシ開きをする。中島は風邪気味、伊藤もやや
調子悪いようだ。出発より1週間弱、出発前の慌た
だしさも含めて、そろそろ疲れが出てくる頃だ。で
も、明日はホリデー、メステントは遅くまで盛り
上がる。酒豪揃いとあって、皆よく飲む。無類の
酒好きであるが酔うのは早い隊長、飲むと共に饒
舌になる副隊長、何処か少年の面影で悪戯っぽい
目で飲む天城、とにかくにこにこしている樋上、
淡々として酔っているのかいないのか分からない
金森、何故だか時たま溜め息をついて飲む高橋、と
もかく強く底無し志小田、にこっと嬉しそうな
目で飲む池上、そして今日は寝ている若いふたり、
楽しみだが、酒が足りるか先が少し思いやられる。
水量が増えたのか、夜、せせらぎの音が大きくな
る。これは昼間高所の雪が解け、それが流れ集ま
ってくることによる。

(記・谷田川 武)



▲チェック・ポストにて



▲雄大な山岳風景が続く

小川流れる草原にて

—スバシ滞在—

7月29日（晴後雷雨） スバシ滞在

日本出発以来5日間動いてきたので、今日はホリデー、思い思いに起き、思い思いに過ごす。天気も上々。スバシは緑の草原の中を小川が流れ、それ程目立たないが小さな花々も咲き、コングールとアタが大きく美しく見える素晴らしい幕营地だ。のんびりするのには最高だ。何処かの親父が羊の肉を売りにくる。1キロ14元（カシュガルでは12元）。趙さんが死んだ羊の肉と見破り、購入せず。昼より雷雨、一時激しくなる。明日からの登山活動に天候が安定することを願う。夕食時、体調の悪かった若い2名も回復化し、遅くまで盛り上がる。夜、星が綺麗だ。

7月30日（快晴） BC往復

コングールの肩より朝日が上り、アタが朝焼けに美しい。最高の天気だ。10時25分（北京時間を使用しているが、実際の自然時間では北京と3時間のずれがある）、BC目指し全員で出発、小川を渡り、スバシ集落の墓地横を通る。どうも皆同じ方向を向いているようだ（宗教的な理由によるのだろうか）。草原を抜けると、砂漠のような中を行く。最初は全員纏まっていたが、段々とばらばらになってくる。12時半、南峰と北峰のコルがはっきりと見えてくる。だいぶ高度差が有るようだ。13時半、BCより下山してくるドイツ隊と出会う。10名のうち4名が登頂したとのこと。14時前後、8名がBC着。途中、天城は道を間違え、チョトマックの村の方へ行ってしまう。BCは小屋もあり、多くの天幕が張られ、ゴミの散在もやや目立つ所だ。毎年、多くの登山隊とスキー隊が訪れていることを実感させられる。14時40分過ぎ、遅れていた3名が到着し、全員BCの高さを体験する。15時15分BCを後にする。眼下の砂漠地の茶色、スバシの緑、対岸の山の稜線の雪の白と、何ともその色合いが美しい。のんびりと下っていくが、最後の平坦地、スバシの墓地が見えてからが長い。18時、やや疲

れ気味でスバシ着、西瓜が旨い。すぐ側で朝から一人の爺さんが家畜を入れる石の囲いを作っているが、1日で5段程度積み上げているようだ。砂地を掘ってセメント代わりに使っている。砂漠状の山の向こうが素晴らしく夕暮れていく。夜、また大いに盛り上がる。

7月31日（曇） 高所順応とスバシ滞在

やや雲が多い。出発より1週間、疲れが溜まってくる頃であろうか、朝食時、薬を求める者が増加する。隊長と膝を痛めている天城、谷田川、まだ体調のすぐれない中島はスティ、他7名は10時15分高所順応に出掛ける。風が冷たく、アタには雲がかかる。副隊長らはBCへの道の左側にあるピークを目指したが、12時の交信で、4000mまで達したところ、向こう側が切れ落ちているので、カラコルムハイウェイに向けて下っているとのこと。14時40分副隊長らが帰着。その後は小川でのどじょう取り、釣り、乗馬などで思い思いに過ごす。夕食はどじょうの唐揚げがメインディッシュとなる。明日はいよいよBC入りである。夕方、ラクダ工が来る。全員まあまあの体調でまた遅くまで盛り上がる。趙さんはしきりに去年の隊との約束（CDラジカセ）のことを強調する。

（記・谷田川 武）



▲スバシでのどじょうすくい

ラクダは良く荷を担ぐ

—B・C 設営—

8月1日（晴） スバシー B・C

午前8時半に起床。朝食の後はBC入りの為の梱包作業。作業はスムーズに進行して2時間も掛からずに終了。11時15分、隊長以下天城、志小田、高橋、金森、伊藤の各隊員と私の7名が先発してBCへと向かう。西嶋副隊長と谷田川、池上、中島の各隊員はゴミの処理をしてからの出発である。我々は途中何度か休憩しながら大旨7月30日の帰路のコースを辿る。各隊員とも隊長を除いて元氣一杯で、私は一昨日のように行かず付いて行くのが精一杯。別に体調が悪い訳ではないから他のメンバーの調子が上がってきた証拠。

BCには午後2時45分に到着。後発のラクダ隊も程なく到着して荷物は全部届く。ところがテントの設営場所が後発の西嶋副隊長が着いてからも中々決まらず、すったもんだ。結局30分程遅れていた谷田川隊員と池上隊員が到着した頃にやっと決定。漸くラクダから荷物が降ろされテントの設営が始まる。その頃になって1人遅れていた隊長が到着し、全員がBC入りを果たす。作業は重労働でもないのに一寸動く息苦しくて、暫く休んでからでない次の行動に移れない。それに手と顔にむくみがあって完全に高度障害が出たようだ。5時半に作業を終了し、夕食までは自由時間。テントの割り振りは年の順だとかで、私は天城隊員と谷田川隊員と一緒にいる。

8時から夕食。BC開きと言う事で手巻き寿司でのパーティーだ。招待した趙通訳と高連絡官が来た所でビールで乾杯してパーティーが始まる。寿司ねたは天城隊員が各種用意してくれ、久しぶりの日本食が味わえ有り難い。アルコールもビールにウイスキーに日本酒。更に中国酒の白酒（パイチュウ）まで出てきて、楽しい一時を過ごす。趙、高両氏の引き上げた後、漸く10時前にお開きになるが、今夜も隊長テントでの二次会のお誘い。しかし今日は今後の事を考えて我がテントの3人は賑

やかな話し声の子守歌にシュラフの中に潜り込む。

8月2日（快晴） B・C 滞在

ベースキャンプでの最初の朝。9時半になって趙氏の「御飯ですよ！」の声に漸く全員がメス TENT に集合。朝食を昨日と同じお粥で済ます。明日は5300m付近にC1を設営する予定で、そこへ上げる隊荷の梱包作業が今日のメイン作業。隊荷はロバを雇って運び上げるのだ。食後暫くしてから作業が始まる。途中でトイレの事が問題になり、隊独自のトイレを山裾左手の見え難い所に数名で作りに行く。天気は今日も上々で、陽が当たり出すと気温がぐんぐん上がり何時も並の暑さになる。昨夜、酒量を減らしたのが良かったらしく体調は頗る快調。

午後2時になって焼きそばでの昼食を済ませて作業を再開。スムーズな手順で作業は捗り3時前にはすっかり片付いた。ロバで運び上げる隊荷の総重量に余裕が出来て、個装を各自2キロまで隊荷に加える事になったのが有り難い。夕食までが自由時間になり、明日の為に少し高所へ登って見る事にする（隊長に連絡すべきと思った事実は置置き、連絡せずに帰還後西嶋副隊長に注意を受けたのは私のミスであった）。登るルートは頂上へ向かう踏跡を辿り、結局、往復一時間半の行動で、4800m付近まで登って引き返す。

夕食は7時半からで、今夜は久しぶりに昼間買った羊の肉料理。豪勢な食事で全員大喜び。食事の終わり掛けに隊長から明日の行動計画などについて説明と注意があり、それに合わせて昼間の私の無断行動について間接的にはあるが注意を受ける。今日は謹慎して二次会には参加せず、10時にシュラフに潜り込む。

（記・樋上 嘉秀）

氷河を見下ろしながら

—C1 設営—

8月3日（曇） C1 往復・設営

8時起床、空がどんよりとしている。C1への荷上げがやや心配されるが、ロバを使うため、まあ雨が降っても何とかなるだろうと、のんびり構える。昨年のHAJ隊は1kg5元とのことであったが、今年は荷下ろしにも使うということで、1kg4元に値切る。それにしても、ロバの鳴き声は何とも物悲しい。心がやるせなくなってくるが、今日はそんなロバ君達に頑張ってもらおう。9時半、西嶋、天城、志小田、池上のA隊が出発、ロバ工達がかってに荷を下ろさぬようC1適地まで先行するのが任務である。10時15分、残り7名も出発。BCからしっかりとした道が西稜へと伸びているが、けっこう急で、4000mを越えた登りは少し堪える。少し登ると、「左側に主峰と北峰の大鞍部から流れ出たヤンブラク氷河の末端がゴジラの背の剣菱のように崩壊して続いており、その向こうにはコングールが堂々たる胸壁を東西に張っている」（西嶋副隊長のうまい表現）。そんな景色を見ての登山は何ともいえない。右側の浅い沢には何本ものシュプールが残る。スキーだけを目的にやってきている外国隊も多いようだ。

12時の交信で、5000mの上部でロバが立往生しているが、何とかもう少し上へ行きたいとのこと。この後、A隊は5200mで数張分のテントサイトを見付け、更に上部を天城が偵察するが、完全な雪でロバには無理とのこと、ここをC1と決定した。やや雪がついているため、最後は自ら荷を上げたロバ工もいたようだ。我々B隊も到着、A隊に加わってC1を設営する。14時、最後の酒井隊長も到着、テントの傍らで昼食をとる。眼下にはヤンブラク氷河が横たわり、BCが豆粒のようだ。そのBCにはイギリス隊が入ってきていた。夜、羊肉をメインに池上のフィアンセ（造り酒屋の娘）からの名酒『酒屋眼回』が旨い。この名酒のせいか、C1を設営できた安心からか、イギリス隊のテントへ

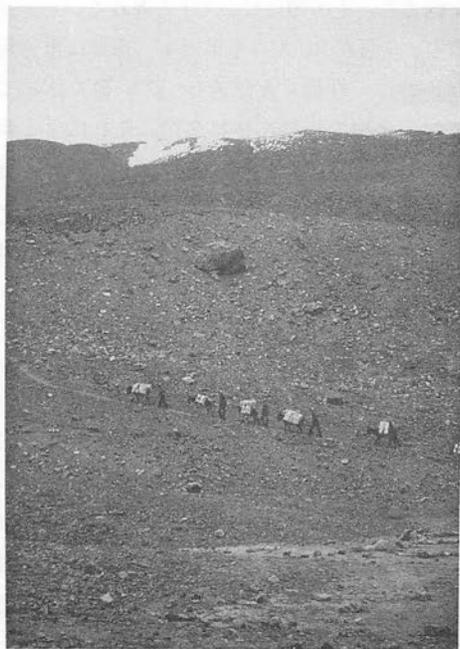
と行った西嶋副隊長はこの夜戻ってこなかった？

（BC→C1 3時間半 C1→BC 1時間）

8月4日（曇後晴） BC 滞在

今日は休養日となる。昨夜降った雪で、BC周辺は鹿の子斑となる。周囲の4000m級の山々も新雪に美しい。雪のせいか、タルバカンの動きが目立つ。午前は思い思いに過ごす。今日で今遠征の3分の1の日程が過ぎた。多少の風邪などがあったが、全員元気でここまで来ている。しかし、本格的な登山活動はいよいよこれからだ。午後、チョトマックの子供と娘らがテントを覗きにくる。娘らは幾つもの耳飾りと指輪をし、服もカラフルでなかなかのお洒落だ。ゲートル風の裾が特徴的だ。夜、小雪がちらつき始めた中、また酒盛り、明日から暫くは飲めないとあって、皆よく飲む。下痢のひどい志小田もがんと飲む。皆、頼もしい限りだ。

（記・谷田川 武）



▲荷上げに向かうロバ達

氷塔を回り込んで

—C2 建設—

8月5日（小雪）BC—C1

2日続きの雪で今朝もBCは鹿の子斑になっている。小雪のちらつく中、各自、シュラフ等個人装備一式背負って出発。11人全員早い遅いはあっても快調。案じていたとおり5000mを越えると一面の新雪。重い登山靴をC1にデポしてきた何人かの足元はスニーカーで、西嶋などは綿の靴下にビニールの小袋をかぶせガムテープで押さえて穴の開いたぼろスニーカーを履く。それでも冷たい（アハハ、当たり前か）。その冷たさに“アたいなめたらあかんぜよ”とアタが警告してくれたのかなんと反省猿になって横着者数名、凍傷とおっかけこの最後はゴボゴボの新雪の走りラッセルで息も絶え絶えの羽目になる。お陰で20キロ近くの重荷にもかかわらず14時50分、3時間半でC1に。一休みして登山靴に履き替え西嶋、志小田、高橋の3人で上部の偵察に出る。20分のラッセルで92年HAJ隊C1、1時間で5350m、計画案でのC1予定地に着く。横に長い広い台地で、北京大學隊のテントが半ば雪に埋もれていた。多分上が上がって何日も留守のままなのだろう。以後、この台地を北京大C1と名付ける（鶴岡隊概念図ではスペイン隊のプラトー）。台地の真上は巨大なアイスフォールの氷塔群でルートとして適当でなく、左端から少し斜上、小尾根を越え回り込んで直上する方が良さそうで、北京大のものらしい赤旗もその方向についている。

《BC→C1 3時間30分 C1→北京大C1 1時間
北京大C1→C1 20分》

8月6日（小雪）C1—6000m—C1

5200mでの最初の夜、夜来の雷とテントを叩きつける雪粒の音と薄い空気、寝苦しかった。自律呼吸がうまくゆかず突然酸欠で苦しくなりハーハーハー、今度は過呼吸で息をしなくて良くなり、無呼吸となりちょっとするとまたハーハーハー、チェーンストーク呼吸と言うらしいが

つらい。となりの酒井隊長、実に気持ちよさそうに寝ていて、いつものことながら感心、うらやましく思い、自分の方はこれで上部を目指せるのか登攀隊長の任が果たせるのかと不安になる。何時間も寝付かれなくてもじっと横になって目をつむおれば人間けっこう元気なものである。今朝も全員調子がよい。C2へのルート工作のA隊は西嶋、志小田、高橋の3人、荷上げのB隊は天城、樋上、谷田川、金森、池上、伊藤、中島、酒井の8人として10時50分出発。北京大C1に学生たちが戻って来ていた。今朝C2から降りて来たらしく、まだハーネスを着けたままである。C2まで6時間かかるが、途中のクレバスはまたげる程度のものだとのこと。

下山して来たばかりの北京大のトレール、強風で早くも埋まりわずかに痕跡をとどめるのみ。その痕跡と彼らの赤旗を頼りに登る。ルートは前日偵察した通り北京大C1の左を高度差にして約100mほど斜上、回り込んで少し急な大斜面を直上する。大斜面はクレバスがありそうだが、アンザイレンせず、足探りしながらゆっくりと登り、危険そうなところにはいていねいに赤旗を立てて通過する。約2時間ほどで北京大C1氷塔群真上の谷の源頭5750m地点に出る。源頭は適当な窪地で一休みするにはもってこいの所である。C1に向かってすぐ下にクレバスが口を開けその拡大で中空に張り渡したようになってしまった古いフィックスザイルが見える。谷右岸の雪の斜面に美しいクレバスのひび割れ模様、左岸にはピラミダルの氷塔がそびえて目を楽しませてくれる。谷あいには北京大C1の黄色のテントが点になって見え、全登山コース中、随一的美観であった。ルートは窪地上方に取りれそうだが、左岸雪壁を斜上する北京大のトレールが残っていたのでそれをたどる。急な雪壁を乗り越えると再び大斜面。振り返るとB隊の天城、金森、池上の姿が見える。彼らに先立ってC2予定地

▼ C1 上部のアイスフォール帯



にたどり着きテント場を探さねばと膝まで沈む重い雪をあえぎあえぎ登る。ブリザードで呼吸も抑えられ足も鉛のように重い交互にラッセルしガンバリ続ける。5900mの斜面右端に小さなテラス(後にカラスのテラスと名付ける)があり片側がスパッと切れ落ちているところから更に100mほど高度を稼ぐ。風雪も強まり、振り返れど振り返れどB隊はただの一人も豆粒ほどにも見えない。午後4時、酒井隊長と交信。B隊全員5750m窪地に荷物をデポ(以下その地点をデポ点と命名)し下山にかかっているとのこと。ガクッとすく。荷上げのB隊のためと思ってつけて来たトレールもこの風雪では明日には埋まってしまうだろうし、今日のA隊の頑張りは何だったんだろうと思う。我々も赤旗、PPロープ等を最終地点にデポしてただちに下山にかかる。トレールはもう痕跡をとどめるのみに埋まり始めていた。

結局、B隊はA隊と差がつき過ぎてトレールが埋まってわからなくなりまた新たにラッセルを強いられる状態で、やむを得ず窪地でデポしたとのこと。明日からの行動を考えるとイヤな予感がする。果てしないラッセルのやり直しを強いられるのだろうか。

【C1→カラスのテラス 5時間 カラスのテラス→C1 1時間30分】

【B隊の記録】C1→5750m→C1

昨夜来の風雪もおさまり、天気は回復基調。先発隊を見送って30分後、10時50分に出発。標高差100mほどで小プラトーにつく。先発隊が左手の斜面を回り込んでいくのが見える。ここで小休止。消えかけたトレールを追い、緩斜面を膝下くらいのラッセルで登りつめると小さなアップダウンがある。セラック帯を縫うように、小さなやせ尾根を行くと正面のやや傾斜を増した雪面の端を先発隊が登って行くのが見える。15時、約5750m。メンバーの足取りは軽くはない。500mほど高度を稼いだことだし、今日はここまでとして、荷をデポする。16時、下山を開始、18時すぎC1着。(B隊の記録は天城)

8月7日(晴のち曇り) C2建設

本日こそC2をつくらねばとA隊西嶋、高橋、志小田、金森、伊藤、B隊天城、樋上、谷田川、池上、

中島、酒井の2隊に分かれてやはり全員行動。日本で立てた計画案では順応不十分者のためのC隊もつくる予定だったが、高所初めての隊員が何人もいるのにここまで誰一人脱落なくうれしい誤算。スバシでのどじょうすくいの日々が結果として順化を促進したのではないかと思えるほどで全員登頂が見えてくる。本日はA隊も装備を持つ。肩にズシリと思い。快晴、10時20分C1発。トレールは埋まっているのだが、50分で北京大C1へ、そこからデポ点へ1時間30分、快調にノンストップで到着。

景色を見ながらゆっくりと昼食をとる。昼食といってもビスケット類に紅茶、チューブのコンデンスミルクであり喜びはない。

雪壁斜上ルートに志小田、高橋組でスノーバーを支点にPPロープ1本固定してもらう。無くてもすみそうな所だが疲労しての下山時の保険である。雪壁を越えると後は頂上に続く広大な尾根をひたすら登るだけである。昨日立てた赤旗をたどって埋まったトレールをひろおうとするのだが、時折、はずしてズボズボの重いラッセル。少し力むと酸欠で時々おもらししそうな不快な衝動も襲ってきてそのたびに、ハーフハーフと腹式呼吸で息を強く吐き出して調子を整える。やっとカラスのテラスにたどり着いて、そこをC2にという意見も出たが吹きさらしでうっかりして崖へ転落する心配もあるので頑張って上部の氷河の丘の下にあると思える平地を目指す。

昨日の最高到達点を越えると傾斜は落ちるのだが飛騨沢から槍を目指すにて見えていて果てしなく遠い。Bの中島君が追いついてAのラッセルに加わってくれる。昭如山岳会にあって8000m峰のサミッターでもある彼、日本出発直前まで連日夜遅くまで仕事をせざるをえず、その疲労で体調を崩しBCまで青い顔をしていたが、自重のかいあってついに回復、本来の力強さを取り戻したようである。

3時50分、6100mC2点に着く。北京大C2もあった。C1同様の申し分の無い広さで、雪崩の通り道になりそうな所を避ければどこでもテント場になる。ただちに整地、テント2張とツエルトを張り終えたところにB隊の天城、樋上が疲れ切って登って来る。谷田川、池上、酒井隊長の3人はカラスのテラスで引き返したらしい。やはりC1～C2の高度差1000mは大きすぎるのだろうか。晴天から一転たちまち吹雪、北陸の冬と同じ目まぐるしさの山である。

《C1→デポ点 2時間20分 デポ点→C2 2時間20分 C2→C1 2時間30分》

【B隊の記録】

今日はなんとかC2に届きたいし荷上げの見通しも付けたい。10時50分発。A隊のトレールを追う。13時すぎ、デポ地でA隊に追いつく。

ラッセルと重荷で苦勞しているようだ。力が余っている様子の中島はA隊に合流してもらう。隊長と谷田川は遅れているので、樋上、池上と2人で

▼C2にて



登る。池上はカラスのテラスで隊長と谷田川と合流し、3人で下ってもらうことにする。ここまで高度を稼いでおれば、次はC2入りできるだろう。16時45分C2着。C2はほぼ完成していた。

8月8日（晴）C1で休養

今朝もテントをたたき雪粒の音で目が覚める。本日は全員C1で休養。天候が良かった午後、外で紅茶を飲みながらのんびりとミーティング。明日以降もA、B2隊に分けて全員行動で日を前後してC2泊を体験、その後C3までルートを開いて、8月11日、BCに下って2日間休養することになる。

休養の日は食事が楽しみ。夕食は散らし寿司、海草サラダ、身欠きニシンの甘酢あえ、プリンに紅茶。圧力釜を使うのでご飯がうまかついお代わりしてしまう。BCの趙さんとの無線で北京大がテントに吊るしておいた羊肉を犬に食われてしまったことを知る。予想どおりである、我々は中国人の食堂に預けておいてよかった。

夕方のC1は不思議なほど静かでテントのブルーの布地を通して射し込む落日が涅槃寂靜の世界もかくやと思わせる雰囲気をつくる。暑くも寒くもない光の世界。金森、西嶋は芸術写真をものにしようと暗くなるまで外で頑張る。

（記・西嶋 鍊太郎）



▲ C1～C2間を登る隊員

寒さと闘いながら

—C3 ルート工作—

8月9日(晴)

A 隊西嶋、樋上、志小田、高橋、中島

B 隊天城、谷田川、金森、池上、伊藤、酒井

《A 隊の記録》C1→C2

Aはシュラフなど個装中心に、Bは団装と食料をかついで10時20分出発。射し込む朝日の眩しさに逆らって登る。昨日スキーで上がったニュージーランド隊3人が下りてきた。ピーカンの天気のお陰でデポ点まで1時間で行く。速くなったものだ。そこからはトレールは完全に埋まっています。天城はデポ点で引き返す。赤旗から赤旗へと足さぐりで進むのだがすぐはずれて苦しい。途中でB隊も追いついて一緒になってラッセル。5900mテラスに池上たちがデポした食糧がくちばしの黄色いカラス(キバシガラス)に食い散らされている。こんなところまでと驚き、ここをカラスのテラスと名づける。午後3時30分C2着。C2は段丘状の台地なので、下からはなかなかテントを見ることができず心理的に苦しいが、景観はますます雄大である。B隊はお茶を飲んで下山。C2のA隊5人の夜食はカラスのつついたカレー7人分。圧力釜を上げたことは正解でアルファ米がうまい。夜、外は満点の星ではるか眼下カラコルムハイウェーに車の明かりが見える。

《C1→デポ点 1時間 デポ点→C2 4時間》

8月10日(小雪のち風雪)

《A 隊の記録》C2→6700m→C1

朝食を作りながら時折テントの外をのぞくが小雪模様の灰白色で何も見えぬ。登山靴を履いたまま、少しでも晴れたら何時でも出られる態勢でテントの中でスタンバイ。今日は何としてもC3へのルート確認、トレールを付けないと今後の計画に支障を来す。日程の短い隊は1日1日を無駄に出来ず、そこがづらい。BCの趙さんとの通信で昨日はスバシまで雪で、本当に今年は天気が悪いと伝え

て来る。技術的に難しい山でないだけに天気のせいで登れなかったとは言いたくない。11時30分、ほんの少し良くなったので思い切って出発。テントのすぐ後ろの丘をラッセル。体感温度で-15度を越えている。丘を登れ切ると傾斜も落ち、長い長い緩斜面が続く。再び丘となり傾斜も強まるどころを我慢して直登するとまた長い長い緩斜面、次の傾斜が強くなる丘の上に小ぶりの台形の氷河の断面が見える。多分あの上か下あたりがC3適地で、そこまではと思うが、午後2時、赤旗もなくなり、時間的限界も来たので下山することにする。6700m地点に園芸用の1mのポールを立てる。身体芯まで凍りそうなブリザードの中でツェルトを被って休憩、軽く食べてC2へ下る。B隊とBCでの休養を終えた北京大隊が前後しながら上がって来るのが見える。C2でB隊とエールを交わしA隊はそのままC1に下る。

《C2→6700m 2時間30分 6700m→C1 2時間30分》

8月11日(晴) 全員BCへ

A隊はC1からBCへ、B隊は天気が悪いのでC2から30分ほど上部へ順化行動しただけでBCへ下る。BCは晴。今日は西嶋の誕生日、それを口実に夕方からもう酒盛りになる。趙さん、高さんが皮を作り、隊員が具を詰め込んだ水ギョウザ、羊のシチューなどがふんだんに出、酒の方もビール、日本酒、天城吟醸銘酒アタと豊富。通訳の趙さん、高所であることも忘れて白酒をがぶ飲み、連絡官の高さんもウィスキーの飲み過ぎでメロメロでひどいことになり、誕生パーティどころでなくなる。それに比べて我が隊員は強い。彼らを介抱したあと隊長テントで2次会。酒井、西嶋、樋上、天城の50歳前後のおじさんたちにいたっては明け方4時まで飲み続ける。

(記・西嶋 鍊太郎)

6000Mの風は冷たく

—C2 荷上げ—

8月9日（晴）

《B隊の記録》C2への荷上げ

10時15分発。昨日1日休養をとったのに、私はえらく調子が悪い。あえきながらデポ地まで登り、申し訳ないがここで戻らせてもらった。これまで調子が良かったのに、まだ順化が完全でないのだろうか。明日からのことが不安になってくる。他のメンバーは順当に行動したようで、15時35分C2着、17時50分C1帰着。

夕食後酸素を15分間吸わせてもらったら楽になった。風が強い。

8月10日（小雪のち風雪）

《B隊の記録》C1→C2

雪が降っている。A隊との交信は通じず、上の様子が気になるが、11時すぎ雪が止んだので出発。13時30分、デポ地点。A隊も上へ動いているようだ。休憩中にアタックへ向かう北京大隊が追い越していく。カラスのテラスを過ぎるとA隊がC2へ下ってくるのが見えた。17時、C2着。ほどなくA隊もC2へ。握手で迎える。上部は風がつよく、寒気もきついという。共同使用にした残置のシュラフで暖かく眠る（当たり外れがあった）。



▲ C1～C2間の造形

8月11日（晴）

《B隊の記録》C2→BC

次のC3入りのための順化行動として、6500mくらいを目標に、10時40分、空身で上部をめざす。しかしすさまじい寒風のため30分ほど行動したところでリタイア、C2へ逃げかえる。金森らは11時半ごろ、身仕度を整えなおして再挑戦をしてくる。予定の行動はできなかったが今日の収穫は全員C2でも元気に動けたことと、寒気と烈風を体験したことによりアタック時の対策がとれるようになったことだろう。

13時15分発、C1着14時20分。ヤキソバを食べて、16時30分BC着。

（記・天城 敏彦）



▲ C2にてA隊を迎える

アタックを前にして

—BC 休養—

8月12日(晴) BCで休養

朝、趙さんがきて「すみません」と昨夜の酒乱をあやまり、隊長に「高さんの調子悪い。カラクリ湖において休養したいと言っていますが、いいですか」と許可を求めてきた。酒の飲み過ぎだろう、「いいですよ」と答える。仕事とはいえBC暮して彼等も随分とストレスが溜まることだろう。

夕食は天城シェフが助手の伊藤と、趙さん、高さんでは出せぬ日本人向けの味付けの料理を作ってくれて、また12時ごろまで宴会。隊長など有志(?)は午前2時ごろまで飲んでた。

夜、トイレに立つと満点の星、天の川が本当に乳白色の濃さのミルクウェイとなって流れ、下界にない明るさのヴェガに夏の大三角や白鳥座を教えられる。BCにはいつの間にか登山隊が増え北京大、ニュージーランド隊の他、フランス、イタリア、スペイン隊のテントが涸沢テント村みたい立つが、どれも星明かりの闇に黒いシルエットとなって沈み、ただ我隊の大食堂テントのみ立ち昇る酒気を照して煌々と明るかった。

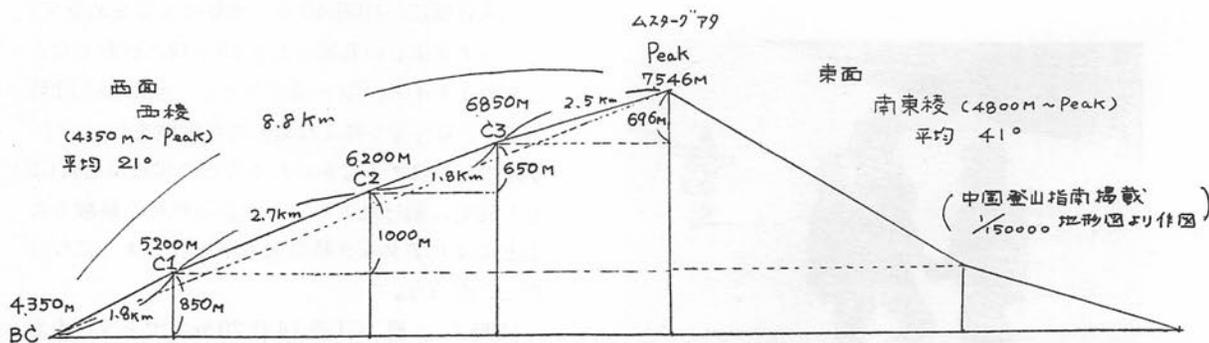
8月13日(晴) BCで休養

ラジオ日本短波放送で東北が今日、梅雨明けしたと報じていた。BCはだんだん寒くなり小川も凍りついている。酒井隊長、西嶋、天城の3人で今後のタクティクスを相談、全員に伝える。

〈全員そろって明日C1、明後日C2に入る。翌8月16日、A隊はC3を建設し泊って17日頂上アタック、C2に下ってB隊をサポートするため待機。B隊は8月16日はC2で休養、8月17日C3に入りアタック中のA隊をサポート、C3に泊り翌18日頂上に立った後、C3撤去、C2のA隊と合流してC1に下る。ABのメンバーは各人の調子を考えてC2で決める。〉

夕方8時、北京大隊の1人がフラフラになりながら下山してきた。第1次アタック隊5人が頂上近くにC4を出して成功。今日、第2次隊5人が頂上にむかっているとのことであった。

(記・西嶋 鍊太郎)



登頂への王手

—C3 設営—

8月14日（晴） BC—C1

11時40分、C3建設そしてアタックのために、朝にはもう小川の凍り付くようになったBCを発ち、C1に入る。長い深雪のラッセルと登山期間の制約のためのタクティクスの変更であった。途中1名が不調になるが、全員早い時間でC1に達する。北京大の荷下げ隊がBCに上がってきた。2次隊も成功、計10名が登頂したらしい。我々も頑張りそうと思う。

8月15日（晴） C1—C2

9時前起床、天気がいいが、アタの影で日が当たっていないため、寒い。11時半出発、もうこの登りのラッセルも最後だと思いながらC2に入った。C1のテントを担いでいることもあり、少々バテ気味で16時すぎC2に到着する。C1から上げたテント1張を足して3張とする。酒井隊長がひどく遅れているので中島さんがむかえに下りる。他にも体調を崩している人がいるが、皆食欲があるので、大丈夫だろうと思う。夕食後、アタック隊のメンバー構成が発表された。A隊は西嶋副隊長をリーダーに志小田、高橋、中島、伊藤の5名、B隊は天城をリーダーに樋上、谷田川、金森、池上、そして酒井隊長となった。

8月16日（晴後風雪） C2—C3

8時半起床、まだまだ寒気鋭い時間である。いよいよハイライトも近い、C3建設の日である。「よし、行くぞ」という気持ちで外を覗くが、昨夜からの降雪があり、重荷でのラッセルを考えると少々うんざりもする。軽い地吹雪の中を出発する。個装に食料、天幕用具類の入ったザックが足取りを重くする。B隊の天城さん、金森さん、池上さんが2時間位トップを交代でラッセルしてサポートしてくれ、大変ありがたい。

小さなセラック状の突起の陰にニュージーランド隊のものと思われる潰れかけたテントを見付ける。ここからが長かった。傾斜が次第に強まる中、赤布を打ちながら、あえぎあえぎ登る。ザックの重さがボディープローのようにじわじわと効いてくる。7000m近い高度でのラッセルの何としんどいことか。膝上くらいのラッセルであるがつらい。地吹雪が次第に強まる中、トップはザックを捨ててラッセルし、トップ交代の後、自分のザックを回収して追い付くというパターンをただただ繰り返す。心の中で「くそ、何だってこんな山なんだ!」という罵声を雪面にぶつけながら、胸の中で歩数を決めて、それをノルマにして足を運ぶ。



▲ C3 建設めざし C2 を後にする

西嶋さんをはじめ、皆頑張るし、強い。頼もしいメンバーだ。ルートの状態、そして長さを考えれば、予定した高度にC3を建設しなければ登頂はおぼつかないことを皆良く知っている。

地吹雪の中、バテバテで北京大隊のC3跡と思われる場所に到達した。高度およそ6800m地点である。もう少し高度を稼ぎたいとも思ったが、風雪の強まる中、ピッケルで整地し、テントを設営する。あたふたとテントの中にもぐりこみ、お茶を飲んで人心地ついた。アタック体制が整ったという気負いよりも、今日の我々A隊のノルマを果たせたことと重いザックとラッセルから解放されたことでほっとした。

明日の行動に影響するような疲労感には自覚していないが、食欲はあまりない。軽い頭痛も感じる。今回の初の獲得高度での滞在の影響だし、やはり疲れもあるのだろう。

簡単な食事の後、明日のアタックについて、ルートの検討、赤布を含めた装備の確認、時間についての打合せを行い、C2のB隊と交信する。登頂のポイントは、ルートと天候もあるが、ラッセルの状態と長さ、それに付随する時間的・体力的な問題に集約されるであろうことは5人の一致するところだった。ここにきて、いよいよ決勝戦だという思いが強くなった。日本も含めて、下から押し上げ、積み上げてきたものは総て明日のためのものなんだという気持ちを強くした。

腹一杯のお茶を飲んで、寒気の中、シュラフに入る。夜、ひどい頭痛で目が覚める。横になると頭痛と不快感がひどく、何度も起きる。上体を起こすと少し楽になる。口をすぼめて、肺に圧力をかけるような深呼吸を繰り返す。横になるとまた頭痛と何ともいえぬ不快感が襲ってくる。横になると体を起こすと、その繰り返しを続ける。寝たのか、起きていたのか、定かではないような一夜を過ごして夜が明けた。非常に寒い。氷点下20度の辺りを寒暖計は指している。上で吹かれれば、体感温度は相当なものになるだろう。テルモスにお茶を詰め、装備をまとめた。長い1日になるはずだ。登頂への王手である。

《C2→C3 4時間半》

(記・志小田 美弘)



私のキャンプ3建設記

先行しラッセルしてくれている金森・池上・天城隊員のトレースが雪煙の中で輝いている。A隊5名はC3の家財道具一式を持ち先行パーティーの後を追う。このトレースがとても有り難い。ただ歩く、ともかく歩く、ただそれだけの行為だが徐々に辛くなってくる。途中、先行してくれた天城さんらと挨拶を交わし別れた後はただひたすら高度を稼ぐことに専念する。雪原の丘を越えるとまた真っ白な丘が現れる、さらに越えるとまた白い丘が行く手に・・・何て広く長い稜線だ。じわりじわり重荷が身体を蝕んでいくようだ、辛い。振り返ると足跡が白い1本の線として伸びている。しかし、感動すら湧いてこない。ただ重労働から解放されたい思いで一杯であった。次の山を越えさえすればと思い、ふと足元から遠方に目をやると頂点に小さな赤布が2つ3つ見えるではないか。もう少しだ。しかし、ザックが重く苦しい。3呼吸に1歩しか足が前に出ない。C3の赤い標識が目前に迫っているのに体が高度を稼ぐのに抵抗している。見た目より傾斜が急に感じラッセルの交代もできず、ただ後ろからついていだけで精一杯、極限に疲労が達しているようだ。ああ苦しい、本当に苦しい。先行者のトレースだけしか目に入らない。自分の荒い息づかいだけが聞え酸素が体内に回り切らないうちに吐き出している。ふらつきながらやっとの思いでC3に這い上がる。吹き溜まりの窪地にエスペースを設営し長い1日は終わった。明日は頂上にぜひ立ちたい。

(記・高橋 敏雄)

長きラッセルの果てに

—A 隊登頂—

8月17日（晴のち風雪）C3→頂上→C2

絶好のアタック日和で5人全員花丸の元気。残る高度は746m。オーバーシューズにアイゼンを付けて10時40分出発。C3の窪地の右をあがってすぐにクレバスが縦に走っている。片足がズボッと沈む。アンザイレンすべきところかもしれない。いっそうヒドンクレバスに気をつけ赤旗をていねいに立てて進む。赤旗はガスの中、遠くからでも見えるよう蛍光繊維の小布で50cmの竹棒に付けたもので、トレールが埋まってもラッセルの仕直しをしなくてすむよう、クレバスにはまらぬよう、ホワイトアウトになっても行動出来るよう小まめに立てるつもりで300本以上用意した。一丘越えてまた一丘、ゆるい斜面をただ登り続ける。午後3時頃より風雪が強まり天と地の区別もつかぬホワイトアウト。普通なら行動中止だろう。それはC3への引き返しか、ツェルトビバークしての明日の頂上を意味する。B隊は我々の成功を信じて第2次アタックのためC3に向けて行動を開始している。C3に戻ってのA隊の再アタックはB隊のことを考えれば難しいし、ツェルトビバークなぞ考えたくもない。それにA隊がルートを付けなければB隊の登頂も困難だろう。頂上は真東にあるはずである。西嶋、高橋がコンパスをウォッチし続け、白闇の中に立てた赤旗が確実に見えるか振り返り振り返り登り続ける。アタのこの大斜面でのホワイトアウトを予想して蛍光繊維にしたのだがよく見えてなかなか効果的である。傾斜がぐっと落ちてやたらだだっ広い雪原が現れてきた。ラッセルは足首までとなり楽になったが向かい風のブリザードが強く苦しさは相変わらずである。伊藤がそろそろ限界なのかちょっとフラフラしだす。18時、サッカーが出来そうな広々として平坦な地形になりドイツ隊か北京大のものらしい赤旗が何本かはためいて頂上を思わせるところに着く。C3出発から7時間20分、強風を避けるためツェルトを張って本

日3回目の休憩を取る。

「高度は？」「7350m」「あと200mも残っているの？でもそんなに高い所がこれから先あるように見えないな」「相模労山隊の報告でも北京大隊の話でも小高い所があったと言っている。とにかくまだ東の方に雪面が続いている。安易に頂上を決めずにもう少し進もう」

ツェルトをたたんで再び前進。午後6時30分、もうこれ以上先は断崖絶壁という露岩の小丘の、先人の赤旗がガスの中にはためいているところに来る。少し離れた左手にも同じような高さの小丘が見えるがやはり先は落ちている。西嶋が状況を確認してもう先に進む必要はない「ここが頂上である」と宣言、1本だけ持ってきた園芸ボールの赤旗を立てる。

高度計は7400mに達していないが下での合わせ方が間違っていたのかもしれない。7546mに合わせる。互いに握手、記念写真を撮り頂上の石をそれぞれいくつかひらう。頂上からカラコルムの峰々を望むことを楽しみにしていたのに何も見えず「感動も中くらいなりムスターグ」であるが仕方が無い。何度か無線を入れてみるが相変わらずガーガーの雑音だけ。一方的に「18時30分、5人全員登頂、元気で下山中」と伝えて19時下山開始。

2次アタックのB隊が迷ったらいけないと赤旗を打ち足しながら大急ぎで下る。濃霧はますますひどく、小雪まじりの強風にトレールも半ば埋まってきたが丁寧に立ててきた蛍光赤布のお陰で迷うことが無い。

寒気が一段と増しブリザードに目も口も鼻も凍り、風上側の左の頬が切れるように痛い。20時20分、C3着。B隊全員上がってきていた。抱擁、握手で喜び合い紅茶をいただいてC2へと下る。さすがに疲れ切って、足がカクンカクンしながらの21時30分C2着。

《A 隊 C3→頂上 7時間50分 頂上30分滞在

▼A隊アタックに出発



頂上→C3 1時間30分 C3→C2 1時間)

[登頂者] 西嶋、志小田、高橋、中島、伊藤

8月18日(風雪) A隊C2ステイ

12時、B隊から6900mを通過、A隊のトレールが埋まってつらいとの連絡が入ったきりその後何度やっても無線機は沈黙のまま。所在無く、無線機を傍らにC2まで持ちあげた本を一冊読み上げてしまう。気が付いたらテントの中は夕日で黄金色に染まる。昨年、アタに来てその後クラウン峰で亡くなった二俣君がテントの布地に書いた名前と落書きが妙に心に引っ掛かる。B隊とはとうとう深夜になっても連絡が取れず「まさか……」と思う。

8月19日(風雪) A隊C2ステイ

朝、テントの外に出て見るとC2は踏み固めたところでも膝までぬかるむ雪。なお風雪強くB隊から何の連絡もなし。BCからなら入るかと思い、趙さんにB隊へのコールを依頼。

「コチラ超海竜デス。酒井サン酒井サン聞コエスカ」「……」

C2、BC双方から何度も何度も呼びかける。

頂上へ再び向かわねばならぬかとも思い、食糧、燃料のチェックと無駄使いしないようにとの指示を出す。中国登山協会との面倒なやり取り、帰国後のイヤなことなどがチラッとよぎり、あわてて頭を振る。

高橋がテントの外に出て、移動しながら交信を試みる。その彼の無線機には何も入らないで、テントの西嶋の無線機に10時30分ごろ突然、天城

の声が飛び込む。直ちに応答すると「やっと捕まえられた。昨日から何度も西嶋さんと呼んでいた」

「みんな元気ですか」

「元気。もう2〜3分で全員C3に着きます」

「ビバークしたのですか」

「そうです。頂上から下山中、暗くなってルートが分からなくなったので」

「登頂したのですね。みんな手足は大丈夫？」

「多分大丈夫だと思います」

「じゃあ、一落ち着きしてあと30分ほどして天城さんの方からコールして下さい。こちらはオープンしておきます」

ひとまず打ち切ってC2全員で「よかった、よかった」と互いに握手しあう。

30分後、酒井隊長から「ご心配かけました」と元気な声が届く。下山中7100mのあたりで暗くなり10時頃ビバークを決意したとのこと。

B隊は午後C3を撤収、予定のC1でなくC2に泊まることにして、A隊もサポートのためC2にもう一泊することになる。BCの趙さんにB隊全員登頂、無事C3に戻ったこと、明日、BCに下るのでC1まで荷さげのロバを午後3時に上げてくれるよう連絡する。連絡してから全員登頂かどうか聞きもらったのにそう思い込んでしまっていたことに気がついた。そんなことよりも無事かどうかということまで心が一杯になっていたのだ。

A隊全員で雪に埋もれたテントを持ち上げて、床面の凹凸の補修を行い(これがひどく息切れのする仕事)、B隊を待つ。

午後4時40分、酒井隊長より「下山を開始しましたが、荷物が重く雪が深く風雪も強く、みんな寝ていないので疲れていてとても下りられれそうもないので、少し下ったところでまた引き返し、今、C3のテントを張り直しているところです」との連絡。

「わかりました。今後の予定は」

「明朝下山、一気にBCまで下りたい」

「6800mを越えての3泊では、劣化で体調を崩す人も出るのではありませんか」

「O2パックをみんなで少しづつ吸います」

「頑張ってください。よほどのことでないとC2からサポートに上がることは難しいと思います」

▼C3でA隊の登頂を喜び合う



外に出るとC3の空は黒灰色。C2も小雪が流れていたが、夕方から回復、気温がどんどん下がり始め、あっという間に-20度を割って異様な程の冷え方になる。92年隊から寒い山と聞かされていたが本当にその通りで、西嶋の左頬も頂上から下山時の風雪のため凍傷で三日月形に黒くなってしまった。

[B隊登頂者] 天城、樋上、谷田川、金森、池上、酒井

8月20日(快晴) 全員BC下山

C2の朝は昨日と打って変わって青空。凜として寒い。B隊より11時に全員元気で下山開始との連絡を受け、万々に備えて3張りのテントのうち1張りを残してC2を撤収する。西嶋、伊藤が残り、志小田、高橋、中島の3人が山のような荷をかついで下山。彼ら3人、特に志小田、高橋の馬力の東北コンビの始めから終わりまでの頑張りで成功したのだと思う。彼らを見送って頂上の方を振り返ると雪の丘に1人お地蔵さんのように座り込んでいる。トップなら疲れを知らぬ天城さん? と思って見ていたらやっぱりそうだった。彼にしてこんなにひどく疲れているのだから他の人はさぞかしと思う。続いて池上、金森、樋上の順。この丘のわずかの斜面でさえ一気に下ってC2にたどり着くものは誰もいない。みんなボロボロに消耗しているのだろう。足を痛めていたが最後まで頑張り通した池上、B隊の機関車役が期待されそれに応えた金森、真摯に酒を飲み隊の和を高めてくれた樋上、彼らほとんどヒマラヤ初体験に近い3人、よく頂上を極めてその上7000mを越えたビバークをし、更にC3でもう1泊するなど無事であったことが不思議なくらいである。酒井隊長、谷田川の2人、かなり遅れて丘の上に姿を見せる。2人とも少し下ってはペタンと座り込んでしまい見ている方がつらくなるくらい下りてくるのに時間がかかる。日本を出る前から足を痛めていて6000mが目標だった谷田川、中国側との面倒な折衝などで疲れがたまりアタックのためのC2入りはよれよれだった酒井隊長、根性の登頂だ。

A隊だけではとても処理仕切れない膨大なC2の荷下げをB隊にも手伝ってもらうつもりだったが、誰にもその余力が無い。樋上さんにコッヘルを持

ってもらいがとてもそれだけではおっつかない。何とか西嶋、伊藤に残っているものをつかつかC2生活での全ゴミが残る。今回の遠征の成否のポイントの一つにテイクインテイクアウト、ゴミ持ち帰りがある。小柄な伊藤君、後ろから見るとザックで身体が隠れて見えにくいくらいでもうこれ以上かつがせるに忍びない。やむを得ず西嶋が大きなゴミ袋を手にさげ引きずりながらの下山。急斜面のトラバースではゴミに引きずられて転落しそうでなかなかつらい。ようやくC1。デポ点のデポ品もC1のテントも先行の者で撤収され、趙さんに頼んで上がってもらっていたロバの背で全てBCに降ろされていた。何も無くなったC1で11人全員集合、最後のアタを惜しみながらガレ場を休み休みBCに下る。待ち構えていた高さん、趙さんと固い握手、久々に暖かくゆったりしたBCテントでくつろぐ。靴下を脱いだ酒井隊長の足の親指のかすかな紫変が気になるが大したことも無さそうである。

その晩は、当然の大宴会。ドイツ隊付きの本物のコック、玉さんが腕を振った料理に酒、酒、酒。C1以上は飲まないと誓って飲まなかった飲ん兵衛11人良く飲んだ。

《C3→C2 2時間 C2→BC 3時間》

(記・西嶋 鍊太郎)

僕の登頂記

—A隊登頂—

昨日のボッカで腰と肩が少し痛むが、自分にしては珍しく良く眠れた。頭痛が殆ど無く行動できるなどと思った。それに天気も良い。朝食は焼きソバ4袋分を5人で食べた。ヤッケの下に羽绒服を着て、手にはオーバーミトン、足にはオーバーシューズと、かなりの防寒をして、頂上目指して10時40分出発。自分はC3上にあるクレバス付近で少し潜ったが、ピッケルを雪面に刺して潜りそうもない所を見付けて進んだ。昨日と同じく、なだらかな丘を交代しながらラッセルする。トップを終りピッケルに額を付け「ゼーゼーハーハー」と休んでいると短い時間だが眠ってしまう(酸欠状態)。目を開くと目の前が暗くなっている。

オレンジの蛍光布を付けた竹竿を細かく立てていった。特徴のない地形になっているので唯一の目印になる。午前中は晴れていたが、午後から吹雪いてきて視界が悪くなってきた。その頃から自分は空腹が原因で急にパワーが無くなってしまった。千鳥足に加え腰砕け状態となる。ラッセルする時間が短くなり、中島さんに励まされ、皆さんの後ろにくっついていく。3度目のツェルト休憩で、高橋さんにお茶を貰い、行動食干しブドウなどを多目に胃に放り込んだら気分が良くなり、何とかもり返した。西嶋さんの指示で東の方向に進んできたが、高度計を見ると7300m、残り高度差200m。志小田さんにツェルトの外に出て周囲を見てもらうが、「そんなに高い所があるように見えない」とのこと。一体あとどれくらい掛かるのだろうと不安の内に歩き出す。しかし不安はすぐに消えた。急にガスの中から小丘のガラ場が現れた(12日に登頂した北京大の学生の言っていた通りで頂部に間違いはないだろう)。

ピークに近付くにつれ、僕にも登れたんだという気持ちで胸が熱くなってきた。18時半、皆と固い握手をし、記念撮影し、石を拾う。あっという間に30分程過ぎて下山する。下り始めると寒気は

厳しくなり、顔面凍傷に気を付ける。すでにトレールは埋まり出し、FLAGを探しながら、また付け足しながら下りていく。

20時半、C3到着。C3入りしていたB隊が寒い中出迎えてくれ、祝福を受ける。隊員に中には登頂を喜んで抱き締めてくれる方もいる程だった。今まで張り詰めていた緊張感がプツンと切れて、安堵感で一杯になった。紅茶を飲んだ後、C2へと下った。C2着は暗くなりかけた21時半だった。

(記・伊藤 英世)

アタの頂上はこんな所

8月17日午後6時、そろそろ頂上のはずだがが激しい地吹雪で視界が効かない。それでも磁石を頼りに東へと進む。ほとんど傾斜がなくなった雪原に中国隊のものらしい赤布を発見し、最後の力を振り絞ってそこまで歩いた。しかし、いくら目を凝らして見ても中国隊員の言う『ロックトップ』らしきものは見当たらない。交信のついでに高度計を見たらまだ7340m、頂上まであと200mもある。仕方なくまた歩き出すと、少し色の違う赤布が斜めに並んでそれが続いていた。ちょうど細い通りが大通りに斜めに合流する様な感じで、やや右に進路を変え、平坦な雪原を進んだ。やがて前方にかすかに岩のコブが見えてきて、その上に幾つかのケルンや赤布があった。午後6時半、皆でそのコブに登り下を見るとスッパリと切れ落ちた断崖絶壁、これこそが『ロックトップ』なのだ確認した。高度計はまだ低い数値を示しているが、頂上であることは間違いはない。頂上雪原は平坦でとても広く、テニスコートの2~3面は十分とれるだろう。視界不良のためまわりの景色は見えなかったが、風が強く吹きつけていたのを考えれば、遮るものは何もないはずである。パノラマ写真が撮れなかったのが残念でならない。

(記・中島 俊弥)

白一色の世界での苦戦

—B 隊登頂—

8月17日（晴後風雪） C2 - C3

眼下に雲海が広がり、すばらしい景観を見せてくれる。11時10分発。A隊もほぼ同時刻に出発したらしい。絶好のアタック日和であろう。無事の登頂を祈るのみ。

われわれは空身に近く、きのうのA隊に比べれば楽なはずだけれども苦しい。15時頃からガスがかかりはじめる。16時の交信でA隊は7200mで苦闘中とのこと。16時50分～17時30分、よれよれとC3に辿り着く。

18時の交信は不通、気掛かりだったが19時15分西嶋副隊長の弾んだ声が飛び込んできて、全員登頂し下降中という。にわかにも色めき立ち、お茶をわかつて迎えの準備をする。20時15分、中島を先頭に皆元気で下ってくる。感動の握手と抱擁。私はここで高橋から羽毛のオーバー手袋を借りる。小休止の後、A隊はC2へと元気に下っていた。

《C2→C3 5時間半～6時間》

8月18日（風雪） C3 - 頂上 - C3

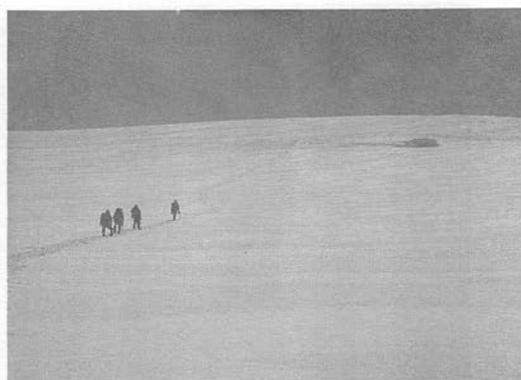
8時45分起床、青空が見える。まずはアタック日和というところか。朝食はヤキソバ。C2との交信で西嶋副隊長から再度ルート上のポイントがつかえられる。A隊が昨日山頂であわせた高度によると、ここは6850m、標高差は約700m。全身体調はいいようだ。11時出発。昨日5人が付けたはずのトレールは完全に消えているが、約40mおきに打ってくれた赤旗がルートをおしえてくれる。まずクレバスにそって北上し、小尾根を越えたところで右折すると、後は緩傾斜の広大な雪面をひたすら登り続ける。12時、約7000m、1時間で約150mのペースだ。昨日A隊は8時間で登っている。単純計算をすれば1時間88m程のペース。ラッセルの状態は変わらないものの、A隊は16時の交信でホワイトアウトのためツェルトをかぶって休憩中といていた。どのくらいの時間停滞していたのかは確かめていないが、今日はそれがなさ

そうだ。スピードの差を差し引いたとしても、われわれも18時前後には登頂できるだろうと踏んでいた。

14時の交信も通じず、時々南西方面から雲が飛んできて視界をさえぎるが、それが行き過ぎるとまた青空が広がる。まったく単調な登りを交替でラッセルしながら行く。右手の雪面が切れ落ちていくようにも見受けられ、尾根がだんだん狭まってきたようだ。

15時すぎ、再度ガスに覆われ、このガスもやがて行き過ぎてくれることを祈るが、これはついに晴れてくれなかった。後は乳白色のなかをひたすら赤布を追う。18時、約7400m、ツェルトを被って小休止。あまり疲労は感じていないがペースはおちているようだ。ガスも濃くなりルートもみつけにくくなってきた。当初の予定時間にもなっていて、どうするか少々迷ったが、ここまでできていることだしと、みんなの意志を確認して山頂をめざすことにする。

やがて傾斜もなくなり山頂に近いことを窺わせるが、ここからも長かった。赤布はまだ続いているし、A隊は「山頂は岩が露出してそこに長いポールを打ってきた」と言っていた。そんなことでも



▲白一色無限の世界を行く

なければ、私は時間も時間だし適当に「ここが山頂だ」と決めて帰ってきたかった。やがて露岩と長めのポールが見える。19時5分、樋上、谷田川、金森、池上とともに山頂に立つ。握手をし、写真を撮る。19時半まで隊長を待ち、様子を見に下りかけたところに姿を現す。これで11人全員登頂となった。あとは下りを急がねば。19時45分、山頂をあとにする。なぜか遠目のよく効く樋上が赤旗を見付けてくれる。さきほど通ったばかりだということにトレールは風でかき消されている。隊長が目が見えにくいといって立ち止まる。眼鏡に氷が付着したらしい。池上にサポートをたのみ必死になって赤布を探しながらさきを急ぐ。ガスも濃くなり夕闇も迫る。21時45分、約7100m、下りはじめて2時間。なんとかあと5、6本見付けることはできるかもしれないがC3には行き着けないだろう。ぎりぎりの状態になる前にと、ビバークを決意する。池上が慣れた手つきで斜面を削りツェルトをだしている。皆も落ち着いているようだ。交信は通じず。2組に別れて不安な一夜を過ごす。私は何度かまどろんだが、一睡もできなかったメンバーもいたようだ。皆どんな気持ちでいたのだろうか。2つのツェルトの条件も違っていたことだし、もっとこまめに気配りすべきだったといまにして思う。

《C3→頂上 8時間 頂上→7100m 2時間》

8月19日（風雪） 7100m - C3

あいかわらずガスは晴れない。だれも凍傷の症状はないようで一安心。7000mを越えたビバークなのだから消耗していないはずはないが、元気そ

うだった。心身ともにタフなメンバーに感謝する。9時15分、磁石を握りしめて下山を開始する。実は昨日は、はじめのうちは赤布が見えていたためか視覚に頼っていて、一度も磁石をださなかった。ルートは東西にほぼ一直線なのだから磁石を使えばもう少し楽だっただろうけれど、それに気付かなかった。今日はおもしろいようにルートを見付けられる。駆けるように下り、やがて見覚えのあるクレバスに行きあたる。もう少しだ。

10時15分C3着。ようやくC2と交信がつく、心配していて上へあがる態勢をとっていたところだという。

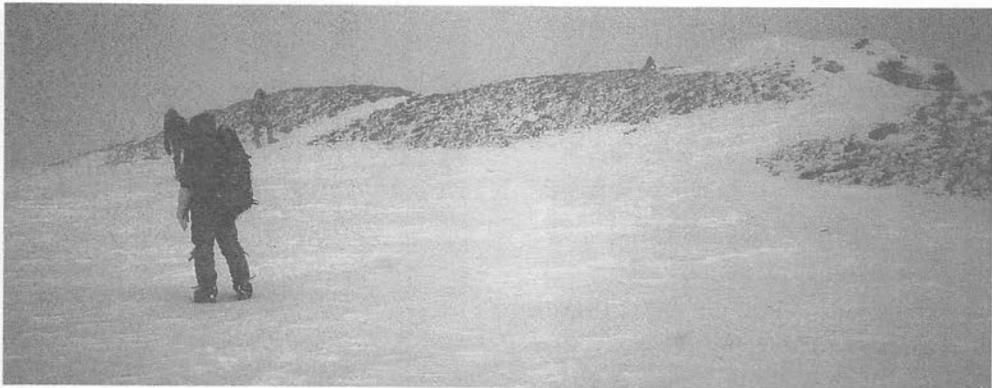
しばし休息ののちテントを撤収し、16時下山仕掛けるが、悪天と不調者もいたため下山中止の声がかかり、テントを張りなおしてもう1日C3泊りとなる。

《7100m→C3 1時間》

8月20日（快晴） C3 - BC

昨日までの風雪が嘘のような好天。最後の食料となったモチを煮て食べる。A隊が残っていた気温計によると-26度だという。旧ソ連のパミールの山々から遥か南方には一群の純白な高峰が見える。ヒンドゥークシカ西部カラコルムだろうか。12時下山開始。1時~1時45分C2着。西嶋、伊藤の出迎えを浮け、暖かいお茶をふるまわれる。順次荷を作り直して下山を急ぐ。疲れ切った体と重荷に長い下りであった。

（記・天城 敏彦）



▲長いラッセルの果て頂部にたどりつく

私の登頂記

—B 隊登頂—

18日、晴れ後ガスの為ホワイトアウト

8時45分に起床。軽い朝食の後、出発準備。昨日のA隊の登頂成功を受けて、B隊も絶対登頂するのだとの意気込みがありあり。

11時に天城隊員を登攀リーダーにピークへ向かっての ATTACK を開始する。夜が明けて昨夜来の荒天は収まり良い天気になって呉れたが、その降雪と風とで昨日のA隊のトレースは殆ど埋まってしまう、新たなるラッセルが待っていた。それでも頼りの赤布から離れずに登れば比較的埋まり具合も少なく、それだけでも体力的には随分助かる。少し遅れ気味の隊長と谷田川隊員以外の4人でラッセルを交代しながら一步一步登って行く。勾配に強弱は有るものの、殆ど緩斜面ばかりなのに何と疲れる事か。その内に雲の塊が次々とピーク付近を襲い始め、その雲の中に我々は何度も包まれる。そして最後に遣って来た雲の塊は頂上一帯に張り着いて動かなくなり、我々はその中に閉じ込められたのである。ただ風や雲も殆ど無く一にホワイトアウトの状態だけで登るには大した支障が無く、全員唯ひたすらにピークを目指し続ける。既にトレースは分からぬ状態で赤布だけが頼りの登行。聞いていた通りの緩い斜面の登りは何時までも続き、疲れは増す一方。雲が益々厚みを増してホワイトアウト状態は一層強まり、赤布を探すのも思うに任せない。時間は刻々と過ぎ、残り時間が次第に少なくなって気は焦るばかり。それでも赤布と高み、そして東に向かって体を動かして行く。漸く傾斜が殆ど無いような雪原が霧の向こうに広がり始めると、程なくその上に長い棒に括られた布が幾つも棚引く黒い肌をした岩場が目に入る。間違いなくピークだろうと最後の気力を振り絞ってその岩場へと近づく。そしてA隊の立てたポールが目に入って頂上に着いた事を知る。暫くは岩場の下で誰も動かず、赤布の立つ岩場の上には登らない。否、登ろうと思っても疲れて登れないのだ。

漸く息遣いが少し楽になって岩場の上に立つが、展望の利かない状態では登頂したという実感は一向に湧かない。他のメンバーも同じ気持ちのような感じ。間も無く最後の隊長が登頂し、ここに11人全員の登頂が実現する。登頂時間を7時3分で統一し、HAJの旗を広げて登頂記念の撮影を済ませ、直に下山に掛かる。残された時間は少ないのだ。天城リーダーを先頭に登って来たトレースを拾い下る。しかし、ホワイトアウトの状態は益々酷くなる。それにトレースすらも埋め消され始め、頼るのは赤布のみである。加えて隊長の様子が変わり、谷田川隊員がエスコートして下って行く。日暮が近づいている事で視界は更に悪くなり、一つ先の赤布を探すのも難しい。他の者より目が利く私が必死に赤布を探しながら下っていたが、とある斜面を下り切った先の平坦な雪原を前にして到頭、その先の赤布を探し得ない状態に追い込まれる。時間は9時30分を過ぎ、日没まで後僅かしか残っていない。こうなればここでフォーストビバークするしか道はないと、2枚のツェルトを出して張る。高度は7100m付近。ツェルトには3人づつに分かれて入り、私は谷田川隊員と金森隊員と一緒に。ところが張り方が悪かったのと小さかったのとで収まりが悪く、一晩中隙間から吹き付ける風と雪を顔に真面に受け続ける。ビバークの途中で金森隊員が広い方のツェルトに移って呉れたが状態は殆ど変わらず、全く眠れぬ長い長い夜を過ごす羽目になった。そんな悪条件下でのビバークで私は左手薬指に少し痺れる軽い凍傷を負ったが、隊長が両足の指殆どが青黒く変色する凍傷になった事に比べればラッキーだったようだ。兎に角も7546mの登頂と共に7100mでのフォーストビバークと、私には初めて尽くしの大変な経験をしたようである。

(記・樋上 嘉秀)

刈り入れの草原を後に

—BC～カシュガル—

8月21日（晴）BC滞在

昨日までの頂上アタックと昨晚（いや、今朝がたまで）の祝賀会との疲れで、起床は自由だ。腹のへった者からごそごそと起き出した。

今日の予定は荷物の整理だ。午前中は個人装備の整理、ゴミの焼却などのんびりと過ごす。午後には共同装備を、ラクダ用に、大プラパールへ30kgに詰め直す作業だ。ただ、メステントや隊員のテントが張ったままなので、本格的な作業は明日にしなければならない。

夕食前、全員で記念撮影をする。どの隊員の顔もまさに「使用後」という面構えだ。

「ああ、これで今年の遠征も終わりだ。全員登れて良かった。」

ベースキャンプにはすでに秋の気配が漂っている。

最後の晩も、現地購入のアルコールで乾杯だ。

8月22日（晴）BC—カシュガル

なるべく早く荷隊を整理してスバシへ下りたいというものの、朝は寒く、荷物は多い。ラクダは昨日から集まりだし、9時頃には全て集合した。

「初めは30kg入りのプラパールを」

などと考えて作業をしていたが、そのうち

「とにかく形になりさえすれば・・・」

という気になり、とにかく、大プラパール20個、その他小物いろいろをラクダにくくり付ける。

凍傷を負っている隊長は馬に乗れということになり、こわごわ乗ると、馬は勝手に動き出してしまった（11時50分）。

この頃、谷田川、中島、伊藤の3隊員をゴミ処理のために残し、他の隊員も下山を開始した。

私に乗せた馬は、BC付近を大きく一回りして、私の勇姿（ならず恐る恐るしがみついている姿）を多くのギャラリーに見せた後、

「待て、待て」

という隊長命令を無視して、

「行くぞ」

ともいわずにスバシへの道をトコトコ下り始めた。

それにしても、馬の背からの景色は、ほんの1mばかりしか差がないのに、まるで違うものだ。（こんな所を登りに通ったか）と不安になることしきりだ。特に、急な下りになると『奈落の底を覗き込む』感じがするものだ。

始めは、（馬が躓いたら・・・）などと心配していたが、そんなやくざな馬はいない。実にうまくバランスを取りながらひたすらスバシへ向かった。

だんだん慣れるにしたがい、こちらは

「そこ急だからゆっくり行ってよ」

「おお、なかなかいいバランスだね」

「そこに綺麗な花が咲いてるよ。何という花」

「疲れないかい。ご苦労さんだね」

などと、話しかける。

馬は何にも返事はしてくれないが、誉めると気分良くなるようだ。歩き方が違ってくる。（この馬、日本語が分かるのか……）という気分になってしまうものだ。

スバシ近くなるとさすがに馬公道草を食いだした。やたらそっちの草、あっちの草と止まりだした。さらに、スバシ手前で冬のための牧草を刈り取る人の辺りに来ると、まったくいうことを聞か



▲テイクインテイクアウトでゴミは全て焼却

なくなってしまった。スバシまで2~300mなのだが、てこでも動かない。

迎えに来ていた登山協会の人に手綱を引かれてスバシ着（13時50分）。

協会の人は、その馬にまたがり、走って、小さく見え出した後続の隊員を迎えに行った。しばらくすると、天城さんがその馬を軽快に走らせて帰って来る……。

全ての隊員、隊荷が到着し、トラックに荷を移して出発。

カラクリ湖では、アクト登山協会が「HAJは昨年今年もきて、また来年もくるから」ということで昼食を御馳走してくれる。（もっとも、どこまでが正式な理由か不明なのがこの世界だ。我々隊の残りの食糧などの分配が多少関係しているように聞いたが・・）。

16時30分、カラクリ湖を出発、ゲス川ぞいの荒涼たる風景の中を走る。カシュガルが近付くにつれ、日曜バザールからの帰りの馬車が多くなる。喧騒の中、20時20分、カシュガル着。久し振りのシャワーを浴び、山の疲れを落とした。

（記・酒井 国光）

BCの高さは従来4300mないし4350mと言われており我々は4350mとして計画表を作り、現地でも高度計をそのように合わせた。しかし、この報告書作成段階で入手した「中国登山指南」（1993・10刊行）では4500mと表示されていた。

もしも4500mであれば頂上で見た高度計の表示がおおよそ150m低い7400m台であったこともうなずける。しかしこの報告書の高度表示は修正せず全てBCを4350mのままとして書いた。今後の登山の参考にされる方は150mプラスして読まれた方が実際的のように思える。

なお、同書では北峰は逆に7427mが7184mと243mも低く表示されていた。そこまでの差があるかどうかは分からないが見た目では納得のいく訂正である。

その他、ヤンブラク氷河がケマツレーグ氷河、カルトマカ氷河がカラクン氷河となっていた。今後の隊は同書の表示に従うのがよいかもしれない。

（西嶋）



▲BCで全員集合

シルクロードのロマンを胸に

—カシュガル～帰国—

8月23日 カシュガル滞在

10時出発、事務所へ行き、隊荷整理を行う。暑い。氷点下20°Cという世界から真夏の世界に戻ってきたせいか、体の動きが緩慢である。ホテルでの昼食、休憩を挟み、17時過ぎ終了。日本からのファックス待ちなどの間、何名かは事務所前のモスクを見学する。玉素甫哈孜・哈吉甫の墓で、「幸福の智慧」で知られるウイグルの詩人である。工事中ながら紫色のタイルが美しかった。その細かい作業に感心させられる。20時、ホテル裏の貸切レストランにて答礼会を開き、アスラ副首席などを招く。羊の丸焼きをメインに、ウイグル料理に舌鼓を打つ。席上で、趙氏の妹が大学を落第したが、教授への賄賂で進級できるとの話が出、皆色めきだつ。賄賂で入学もできるとのこと。豪華な料理に満腹、満足。ところが、せっかくの御馳走を残してはならじと、羊の頭、果物などを部屋に持ち帰り、何人かは西嶋副隊長の部屋でまた盛り上がる。それにしても、皆凄い体力と食欲だ。

8月24日 カシュガル滞在

昨夜の美食と酒に、1時間遅れの朝食でも流石に皆食が進まない。このホテルの食堂も顔馴染みになってきたが、なかなかのサービスだ。中島などはひとりのウェイトレスをすっかり気に入ってしまう。11時観光に出発、まず阿巴克霍加墓を訪れる。17世紀、カシュガルの実権を握ったホージャ一族（マホメットの子孫と称した）の墓で、清の乾隆帝に召された香妃墓としても知られる。香妃は、尊重ホジ＝ハンの妃で、生まれながらにして体に異香を有したのでこの名が付いたという。美貌の噂を聞いた乾隆帝は、ヤルカンド征服の際、妃を掴まえ、北京に帰ったが、彼女は常に白刀を携え、帝の命に従わず、操を守り通したという。怒った太后によって死を命じられた彼女は、年若くして自害したという。悲しい話の残る墓の外部には一族を慕い、あやかりうとした民衆の墓が所狭

しと建てられていた。

香妃墓を出た後、玉の店に寄って、果樹園へ。登山協会の招待で、屋外での昼食、微風にほろ酔い気分となる。ホテルでの休憩後、酒井隊長、天城を残し、エイティガール寺院横からバザールを歩く。「カシュガルを知るにはまずバザールへ」の言葉通り、ありとあらゆる物に溢れている。人懐っこく子供や家族連れが声を掛けてくる。その顔はシルクロード、そして民族の十字路を感じさせる。思い思いにとぼとぼ歩いて、工芸庁へ行き、絨毯などの土産物を購入する。ホテルに戻り、火鍋の夕食。ウルムチで看板を見て以来、四川に行ったメンバーが「火鍋、火鍋」と騒いだため、特別注文で出してもらおう。しかし、本場ものとは大部違う。味足りないため、大半はロバ車に乗り、重慶火鍋店を求め彷徨う。が、火鍋といったにも拘らず、全然関係ない場所に連れて行かれてしまう。仕方なく、歩いてとぼとぼホテルに戻る。

8月25日 カシュガルーウルムチ

10時三仙洞に向かう。中国西域最古の仏跡である。乾燥した河壁に遠く小さな3つの洞窟を見る。もう少し大きく見えるものと思っていたので、少し残念だ。かの井上靖がここを訪れた際、洞窟内を見るため、消防梯子車を利用したそうだ。我々



▲果樹園にて

にはそんなことはできないので、せめて厳しい環境の中で厳しい修業をしていた僧の姿を豆粒のように思い描いてみる。市内に戻り、昨日とは違うバザールへ。路地に入ると、ひと昔前の世界が広がる。幼稚園へ行き、民族舞踊を鑑賞する。ホテルにて昼食後、休憩。谷田川、中島はエイティガール寺院を見学する。中に入ると、広い庭（野外礼拝場）があり、その奥に礼拝堂がある。数多くの緑色の柱が印象的であった。夕食後、空港へ、22時40分テークオフ、26日0時5分小雨降るウルムチ空港にテークオン、行きと同じ華僑賓館に入る。隊長、副隊長、谷田川は2時過ぎまで新疆登山協会の人と会計する。

8月26日 ウルムチー北京

6時半の朝食後、すぐに出発。肌寒い、そして眠い。空港は凄い人だ。荷物が多いからか、人数が多いからか、搭乗手続きに長時間待たされ、結局は最後になってしまう。ひとり事務所へと行った谷田川は思わず怒鳴ってしまう。我々だけのバスに乗り機へ。9時10分、25分遅れでテークオフ。皆ただただ眠る。北京着、夕暮れの町を走り、行きと同じ天橋ホテル泊。夕食後、何人かは町に出

る。

8月27日 北京滞在

7時起床、副隊長らは長城観光へ。隊長、天城、谷田川は中国登山協会と会計、昼食後友誼商店へ。その後、天城、谷田川は瑠璃廠と陶然公園へ。18時全員合流、有名な全聚徳烤鴨店にて北京ダックを味わう。最後、中国登山協会王副首席より登頂証明書を一ひとりずつ頂く。ただひとりあまり顔の焼けていない中島は本当に登頂したのかとからかわれる。11名全員登頂ということの重みを改めて感じる。ホテルに戻った後、何人かは火鍋に出掛ける。

8月28日 北京ー成田

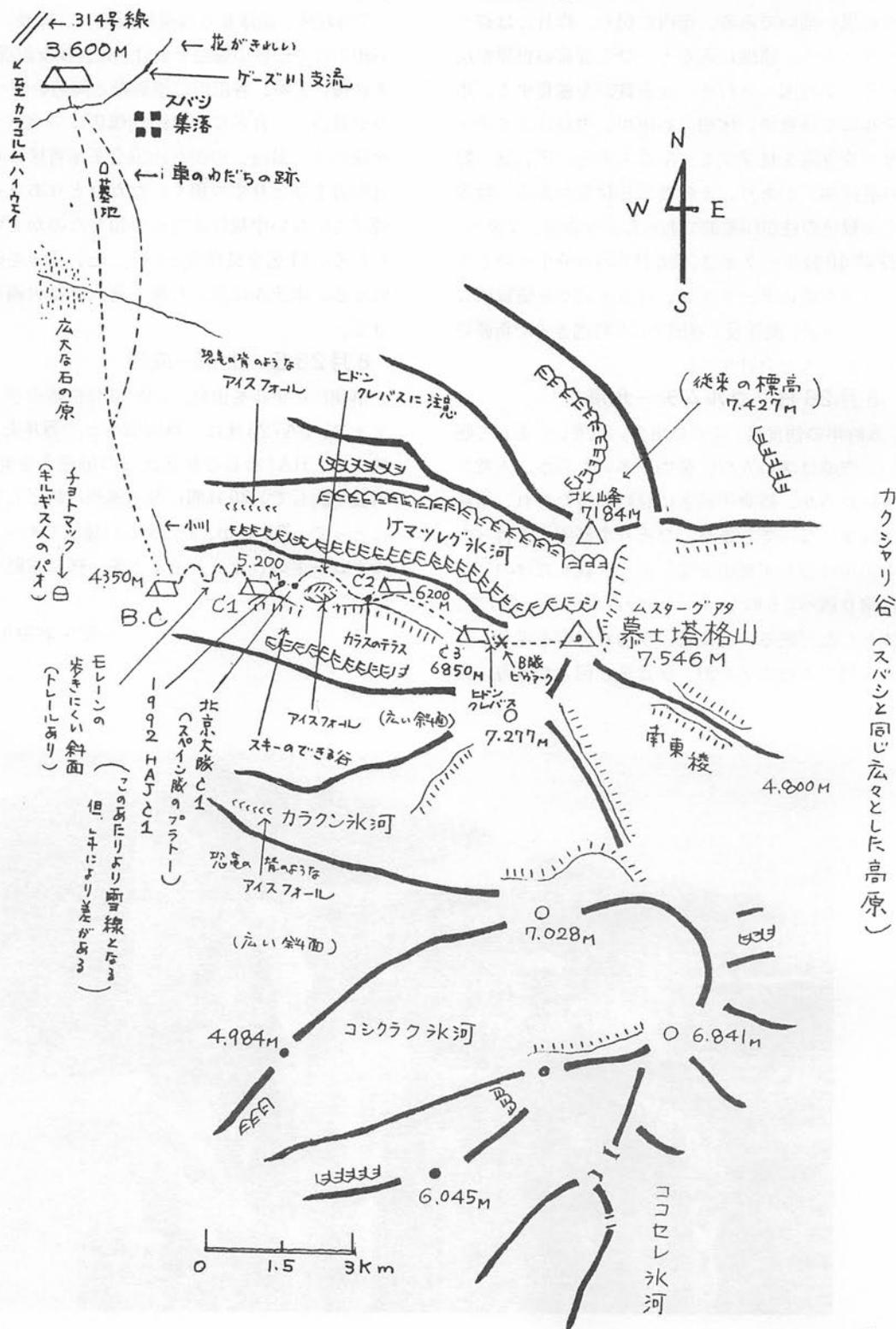
早朝にホテルを出発。9時20分快晴の空へテークオフ、CA725便は一路成田へと。酒井夫人、天城夫人、HAJ会員の松館氏らの出迎えを受ける。再会を約して、36日間に及ぶ遠征は終了した。私にとって、苦しいが、また楽しい遠征であった。シルクロードのロマンと土産とを一杯に家路を急いだ。

(記・谷田川 武)



▲万里の長城にて

アタ周辺概念図



作図・西嶋

第2部

隊員の横顔 随想



隊員の横顔

隊長：酒井 国光 (Kunimitsu Sakai)

1939年4月 (54歳)

1. 〒300 茨城県筑波郡伊奈町

2. 聖徳大学付属小学校

3. 昭和山岳会

4. 1976 アメリカ マッキンリー (6,194m)
隊長

1979 ヨーロッパ アルプス数座、隊長

1980 " " 隊長

1983 パキスタン ビルチャール・ドバニ
(6,139m) 隊長

1984 中国 アムネマチンII
(6,268m) 副隊長、登頂

5. 総括、渉外

1. 住所
2. 勤務先
3. 所属団体
4. 海外遠征歴
5. 隊務 (以上は93年当時)



1986 アメリカ ドラム (3,662m) 隊長、登頂

1988 パキスタン ブロード・ピーク (8,047m)
隊長、登頂

1989 中国 シャラリ (6,032m) 隊長代行

1991 " シュエ・バオディン (5,588m)
隊長、登頂

1992 " ダークーニャン (5,025m) 隊長、
登頂

不思議な人である。山に入るとあまり食べない。なのにたんたん歩く。本人はその源は酒にあるといっているが、長年黒部を中心として厳しい山行を続け、現在でも山岳会の若手メンバーと冬の黒部を歩き続けているところに本当の源はある。今遠征では大部まいていたようであるが、3年連続のサミッターとなった。アタック後、BCが近付くにつれ、「久しぶりに酒が飲めるぞ」と足が速くなったのは流石である。宴席ではいつも大声で「良し」といって、隊のムードを盛り上げること大である。アタック後のビバークで凍傷を負い、BCからは苦しい旅となった。基本をしっかりと厳しく押さえ、楽しむことも第一に行う素敵な隊長、ご苦労さまでした。留守番役の奥さんといつかは一緒に。

連絡官：高 志堅

中国新疆喀什登山協会連絡官

1. 喀什市体育路8号

☎ 22957



通訳：趙 海竜

中国新疆喀什登山協会通訳

1. 喀什市体育路8号

☎ 23660



副隊長：西嶋 鍊太郎 (Rentaro Nishijima)

1942年8月 (50歳)

1. 〒921 石川県金沢市

2. 石川県立金沢錦高等学校

3. デンデン虫倶楽部

4. 1974 ネパール クーンブ トレッキング
1978 パキスタン イストル・オ・ナール
(7,403m) 登攀隊長、登頂

1980 ヨーロッパ マッターホルン
(4,478m) 登頂

1982 ペルー ピスコ (5,760m) 登頂

1988 タンザニア キリマンジャロ (5,895m)

5. 登攀



1989 中国 シャラリ (6,032m)

1991 旧ソ連 天山

副隊長、A隊リーダーとして常に隊をリードした。石川県の山学会のまとめをしているだけあって、全ての面で年齢を感じさせない。山ばかりでなく、毎年、世界の辺境へと出掛け、その体験をいくつかの著作にもしている。そうした長い間の体験が身に付き、一緒にいるだけで頼もしさを感じさせる。周囲の者を見守る目的確である。大の絨毯好きで、ウルムチでは？十萬円の絨毯を購入するため、長時間皆を待たせ、ビールを奢ることとなった。関西圏特有の物言いで、前のシャラリ遠征の時には“オブラート風”と評されたが、今回もその物言いで皆を良くまとめた。酒が入ると共に、饒舌になり、宴席でも最後まで隊を盛り上げた。全ての面で頼りになる副隊長、ご苦労さまでした。

隊員：樋上 嘉秀 (Yoshihide Higami)

1944年6月 (49歳)

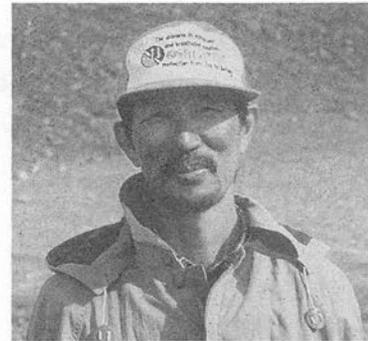
1. 〒537 大阪市東成区

2. 交楽荘薬店

3. 大阪わらじの会

4. 無

5. 医療



出発前にまむしに噛まれ、参加が危ぶまれたが、初めてのヒマラヤ、しかも7500m峰でほぼ順調に過ぎた。その力の秘訣はということで、隊ではまむしパワーということが話題となった。いつもニコニコとし、特に酒の席では何とも幸せそうな顔をする。その顔が何故だか皆も幸せにした。不思議な魅力をもった人である。その顔はというと、どじょう髭を生やしたら、中国にぴったりとする面立ちである。医療係として皆の体調を優しくチェックしていた。今遠征に味を占め、その後玉珠峰を登頂し、また酒井隊長と共にヌンに出掛ける。何処か怪しげな雰囲気に残る主人であるが、なかなかの読書家で博識である。しっかり者の奥さんが留守を守る。続く遠征に、店が経営難にならんことを。

隊員：天城 敏彦 (Takahiko Amagi)

1947年5月 (46歳)

1. 〒169 東京都新宿区
2. (株)有斐閣
3. 同人パイネニアンブ
4. 1983 インド ヌン (7,135m)
1986 中国 シュエ・バオディン (5,588m)
初登頂
1988 " ゲニ (6,204m) 初登頂
1990 インド サトパント (7,075m) 登頂



5. 食料

何処か子供ぼさの残る万年好青年である。膝の古傷を抱えながらも、いつも隊の先頭に立ち、B隊リーダーとしてもB隊を登頂に導いた。食担としても大活躍、料理もさることながら、BCで仕込んだ天城製どぶろくは大評判であった。常にまめに動き回るその姿には本当に頭が下がる。酒豪でもあるが、ヘビースモーカーでもあり、最後僅かになったタバコを吸う時の幸せそうな顔は何ともいえなかった。仕事柄博識であると共に、様々なことに長じ、スバシでは乗馬と釣りとを楽しんでいた。愛妻家であり、奥さんの合唱テープを持参、BCで嬉しそうに聞いていた。帰国後、成田空港で二人抱き合っていた姿が忘れられない。今度は、8000m 峰へ？是非、あのバイタリティーで頑張ってください。

隊員：谷田川 武 (Takeshi Yatagawa)

1953年9月 (39歳)

1. 〒178 東京都練馬区
2. 東京都立久留米西高等学校
3. 白嶺山の会、白い峰
4. 1981 メキシコ ポポカテペトル (5,452m)
1988 パキスタン ファラク・サール
(5,918m) 隊長
1989 中国 シャラリ (6,032m)
1992 " ダクーニャン (5,025m) 登頂



5. 記録・庶務

長年に亘る父の看病で、体を痛め、苦しい登頂となり、皆に迷惑を掛けた。高度の影響も受け、顔も大部膨らんだ。それでも良く食べ、良く飲み、良く寝た。C2以上でも頭痛などを感じる事が殆どなく、ぐっすり眠れたことが登頂に繋がったのかもしれない。庶務として隊の雑務を行い、空港などでは片言の言葉に悪戦苦闘していた。写真好きで、記録係ということもあり、一番多くの写真を撮影した。特に、カシュガルは長年の憧れの地であり、朝から晩まで写真を撮りまくった。また、へたな俳句をいくつか作って、ひとり悦に入っていた。スバシの色彩が気に入り、帰国後、絵にも取り組んでいる。暫く、というよりず〜と放浪癖は無くなりそうにもない。“困ったもんだ”とは、母の溜め息。

隊員：金森 博之 (Hiroyuki Kanamori)

1954年7月 (39歳)

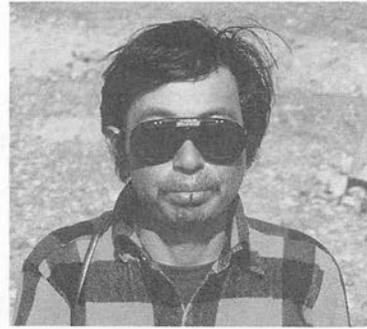
1. 〒214 川崎市麻生区

2. 川崎市役所土木管理課

3. 川崎市役所山岳会

4. 1982 インド ガルワール、トレッキング

5. 食料



ポツリと物を語り、マイペースで何ごとにも一生懸命取り組む、いわば不言実行の人である。天城リーダーと共に、B隊の機関車役として頑張り通し、B隊登頂の原動力となった。淡々としていて、それ程目立つという存在ではないが、何故か存在感が強く、側にいると安心させられた。思いやりの気持ちも強く、自分も苦しいのに弱っている隊員を黙って助けた。また、食担としても、天城氏を助けこまめに動き回っていた。写真にこり、朝夕多くのシャッターを切っていたが、その出来は如何に。釣り好きでもあり、釣竿を持参、スバシでは挑戦していた。市役所職員ということで、帰国後は多忙な日々を送っているようであるが、是非また機会を見付け出掛けて欲しいと思う。

隊員：高橋 敏雄 (Toshio Takahashi)

1958年10月 (34歳)

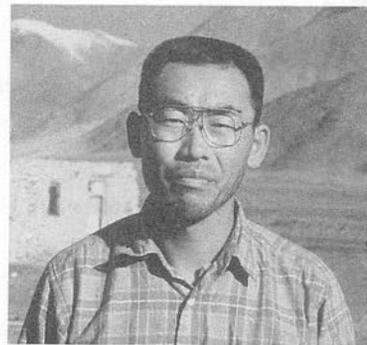
1. 〒982 仙台市青葉区

2. 南光学園 東北高等学校泉キャンパス

3. 仙台山岳会

4. 1986 中国 チョーアウイ (7,354m) 初登頂

5. 装備



やや不調な時もあったが、副隊長、同大山岳部OBの志小田氏と共にルートをリードした。装備係として、手を真っ黒にして不調なホエブスを修理していた姿が忘れられない。ふかふかの豪華すぎるシュラフを持参、交代でそのシュラフに当たった人はあまりの幸せに寝付かれなかったとか。大きな声でポツリポツリと話す話し方には味がある。酒の席ではその声が一段と大きくなる。豪傑かと思うと、繊細なところもあり、まめで、気遣いも良くし、東北人の純朴さを感じさせる。帰国に際し、山のような土産物を買って帰っていた。帰国後、しっかりものの奥さんにふたり目の愛児が生まれた。本人は続けて何処かに出掛けたいようであるが、暫くは子育てですかね。

隊員：志小田 美弘 (Yoshihiro Shikoda)

1959年1月 (34歳)

1. 〒986 宮城県石巻市
2. 石巻市立門脇中学校
3. 東北学院大学山岳会
4. 中国 チョーアウイ (7,354m) 初登頂
5. 装 備

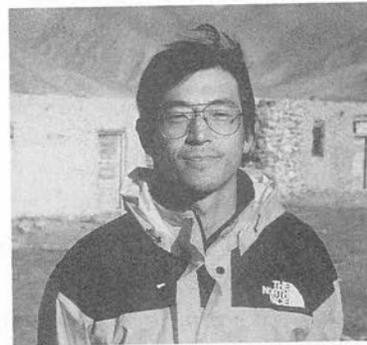


ともかく飲ん兵衛である。谷川岳の合宿の際、本人がいないのに、酒が減ると志小田だ〜との声が上がった。何のことはない、彼に事寄せて皆飲ん兵衛なのだ。でも彼が一番の飲ん兵衛であることに間違いはない。BCでは凄く下痢にも拘らず、ぐいぐいと飲み、町では一通り飲んだ後に、ハードリキュールと入って夜遅くまで徘徊していた。山では常にトップに立ち、大学山岳部OBの力量を発揮した。中学校で野球部の顧問をしていることもスタミナの源であろうか。なかなかの読書家でもあり、BCでは食い入るように良く本を読んでいた。私は、長門勇に似ているように思うのだが、本人は嫌がっていた。帰国後、C1での話から、カヌーを購入し、楽しんでいるようだ。奥さんとふたりの娘さんに囲まれている。

隊員：池上 邦彦 (Kunihiko Ikegami)

1961年2月 (32歳)

1. 〒965 福島県会津若松市
2. 福島県立会津工業高等学校
3. 会津山岳会
4. 無
5. 装 備



酒好きの好青年で、宴席ではいかにも嬉しそうににこにこ飲む。そんなことが長じて？、会津の造り酒屋の娘さんと婚約しての出発となった。BCでは、そのフィアンセからの差し入れの名酒に明るい花が何度かメステントに咲いた。フィアンセも遠征の経験のある山好きである。出発前、山での事故で膝を痛めていたが、最後まで頑張り通し、勤務先および県で高校山岳部の指導をしている力量を発揮した。特に、ビバークの際には慣れた手つきで手際良く準備をし、流石雪国会津ということを実感させられた。少し照れたような笑い方と朴訥と話す話し方が何ともいえない。帰国後の翌春、フィアンセとゴールインした。今度はふたりでヒマラヤに足跡を残しそうだ。

隊員：中島 俊弥 (Toshiya Nakajima)

1964年12月 (28歳)

1. 〒399 長野県塩尻市

2. 武蔵工業大学付属信州工業高等学校

3. 昭和山岳会

4. 1986 アメリカ ドラム (3,663m) 登頂

1991 ネパール ダウラギリ1 (8,167m) 登頂

1992 アメリカ ハンター (4,421m)

5. 環境、気象



飄々としていて、爽やかな山の風を感じさせる好青年である。出発前までの慌ただしさからか、BC入りまでは体調を崩していたが、その後回復、ダウラギリ登頂者の力量を発揮した。自分の場をよく弁えており、前面に出ることはないが、常に冷静な判断力で動いていた。アプローチのウルムチなどでも、他の隊員が屋台のシカバブーを食したのに、先を思い手を付けなかった。現在は長野県の教壇に立ち、サッカー部の顧問をする傍ら、地の利を生かし、北アルプスを中心に多くの山行を重ねているようだ。特に、隊長と同じ山岳会に所属し、冬の黒部に多くの足跡を残している。今遠征でも、色々な面で隊長を助けた。会20周年記念で、エベレストに出掛ける予定である。その前段として、ヌンに出掛ける。

隊員：伊藤 英世 (Hideo Ito)

1967年1月 (26歳)

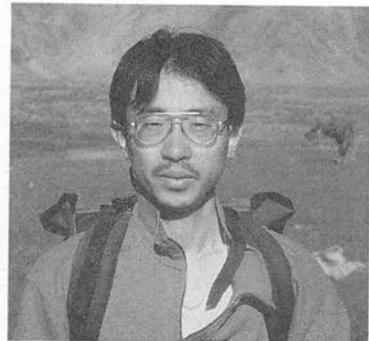
1. 〒177 東京都練馬区

2. (株) 東邦企画

3. 東京氷河山岳会

4. インド ヌン (7,135m)

5. 食料



隊の最年少ということで、皆から可愛がられていたが、その主因は彼が目上を重んじ、一生懸命に働くからであろう。食担として、天城氏についてこまめに動き回っていたため、「天城ジュニア」と呼ばれた。スパシ入りの後、やや体調を崩していたが、その後若さで頑張り、A隊として登頂した。自問自答する癖があり、特に調子のあまり良くない時は、何やらぶつぶつと呟いていた。自分なりに納得するための癖なのであろう。名古屋人の故か、やや早口でぶっきらぼうなところがあるが、彼また、憎めない好青年である。カジュアルでは、ナイフをはじめ、土産物買いに精力的に走り回っていたのと共に、隊員の中でも特に若い女の子に目を輝かせていた。これからが期待できる。今度は是非8000mへ。

こんなつまらないことはない

酒井国光

昨年度の海外登山の報告書『美しき谷の姉妹峰』で、「閑中忙有」なる随想を書いた。

—無性に本が読みたくて、仕事なんかでんで手につかないことがある。(いっそ病気にでもなって、1か月も入院出来ないか。思いっきり読書ができるかも知れない……)と、考えてしまう。無い物ねだりというか、病気の人には申し訳ないことである。—

「何を戯けたことを言ってるのか…」

「その付けを今年の海外登山で払われた」と、言わなければならないようだ。

生まれて初めて、一週間の入院生活を体験した。

その経緯を以下にまとめ、自分への戒めとしたい。

*

8月18日、風雪。B隊6名ムスターグ・アタ登頂。しかし、帰路ルートを見失い7100m付近にてビバークを余儀無くされた。

雪面を削り、腰をかけツェルトを被る。着の身着の俣だ。寒い、長い夜だったが、(朝の来ない夜はない)と思っている。凍傷の心配をしないわけではなかったが、なんら異常は感じなかった。

19日、風雪。1時間程でC3に下り、4時間程休憩。靴下をぬいで足を温めたが、なんら異常はなかった。テントを撤収してC2へ下り始めたが、再び、C3泊り。

20日、快晴。9時間程かけてBCへ下る。体が暖まってくると、両足の指先にジーンとした痺れを感じ出した。しかし、「凍傷なのかな…」位にしか考えていなかった。

21日、両足の親指を中心に何本かの指が、全体的にうっすらとした黒色になってきた。「やはり凍傷だったんだ…」

念のためお湯で暖める。また、中島から血管拡張剤(カコナール)の錠剤をもらって飲み始める。

22日、歩行になんら支障はないが、BCからスバ

シまで馬で下った。

23日、町へ下って気が緩んだのか、凍傷が痛みだした。と言っても、凍傷の部分(指先)が痛いのではない。足を下にすると、指先の毛細血管が詰まって血液がストップされるのか、鬱血してその部分(指先からくるぶし位まで)がやたらと痛いのだ。足を横にしていると痛くも痒くもないのだ。

隊荷の整理中も、足を投げ出してボケーッとしていた。

24~27日、カシュガルでの観光、ウルムチへの移動、北京への移動、北京での観光、等々いろいろ忙しかったが、とにかく痛かった。人間の体が、こんなにも微妙なものかと改めて認識させられた次第だ。努めて足を横にすることを考えていた。隊員に多大の迷惑をかけてしまった。

この間、2種類の血管拡張剤(カコナールとアルコール)は定期的、かつ積極的に飲み続けた。大事に至らなかったのは、この効果が大きいと信じている。

27日、北京より自宅に電話を入れ、東横病院の予約をしてもらう。

28日、帰国。

30日、聖マリアンナ東横病院へ診察のつもりで行ったら、即入院ということになっていた。ここから、件の病院生活が始まったのだ。



第1日目(30日)

金田先生が文部省登山研修所へ出張のため、先生の指示(?)に従い、朝夕2回の点滴のみ。たぶん、中島俊弥の紹介という予約であったため、もっとひどい症状と考えられていたようだ。

点滴をし始めると、指先がポーッと暖かくなりだすからうれしい。

病室は、4人部屋だが、他の3人は怪我ではなく、自分の意志を看護婦にやっと伝えられる程度の病人だ。話をする状態ではない。カーテンに仕切られたベッドで一人横になり読書をするのみ。

あまり横になってばかりもいられず、夜は、病院入り口の待合室に行って過ごす。

第2日目(31日)

終日横になって過ごす。点滴2回。読書。日記の整理。2日目になって、病院の生活もあまりいいものじゃないなと感じ出す。

夕方になると、誰か話相手が来ないかなと心待ちです。

第3日目(9月1日)

決まった時間に起き、食事をして、点滴を受けて、読書をして、昼食を取って、…、2回目の点滴、夕食、…

読書は、愛読書、池波正太郎の仕掛人・藤枝梅安シリーズの7冊。このシリーズはこれで何回目か。文を書く前には必ず読むと言ってよい程読む。文章のリズムがすばらしく良い。私のバイブルだ。

次は、大島亮吉全集の第2巻。これも何回読んだことか。山への憧れを喚起してくれるバイブルだ。本にも書き込みがいっぱいしてあるし、気に入った文を手帳に書き出して楽しんでいる。今回は、書簡の187~8ページからの一節を書き出した。秋になったら、どこの山頂でビバークしてやろうか、そのための装備はこれこれだ、と楽しい思いにひとときを紛らわした。

夕方、橋本康弘君が見舞いにくる。絶対に病院で酒を飲むなと忠告を受ける。過去に大々的に酒盛りをして、壺盛を買った豪傑がいたとか。

第4日目(2日)

金田先生が文登研から帰り、初めて診察を受ける。たいしたことはないとのことだから、点滴は1回となる。指の皮が剥けだす。

そろそろ読書にも飽き、横にばかりなっているので、体も痛くなってきた。

天城敏彦さんが見舞いに来る。ついこの間まで一緒に行っていたのに、久しぶりに会うような懐かしさを感じてしまうのは、こういう特殊な状況下に置かれているからか。

第5日目(3日)

終日ゴロゴロ。病院生活も苦痛なものだな。

夕方、学校の若い女の先生3人が見舞いにくる。望月の研修会の帰りに、地酒持参でだ。もう今日で5日目の禁酒状態で、禁断症状も出初めている時、ありがたいと言うか何と言うか。ぐっと堪えて、橋本の忠告を守った。

第6日目(4日)

台風の接近で、外は暴風雨だ。

9時過ぎに診察に来た金田先生が、「もう大丈夫だ。来週から週1回、4週位通えばいいな」

と、言われた。

「えー、じゃあ、今日退院していいんですか」

と、つい口に出してしまった。まさか先生も今日退院してもいいなんて考えてもいなかっただろう。今日は土曜日だし、あと1日居て、月曜日に退院というのが常識的だ。しかし、たったの1週間もしないうちにあきあきしていた自分には、来週から通院という言葉は、今週つまり今日退院と聞こえたのだ。

しばらく考えていた先生が、しかたないと思ったのか、勝手にしろと思ったのか、

「いいよ」

と、言ってくれた。



さあそれからが大変。病院には急遽退院の手続きをしてもらうやら、家に電話して迎えにくるよう手配するやら、とにかく午後1時までには全てを完了しなければならないんだ。…

何とかやっと間に合い、めでたく(?)退院をし、東横病院前の蕎麦屋で乾杯の美酒を飲んだ。外は台風の余波が残っている時だった。

ああこの時、神ならず誰がこの3日後の9月7日夜、半年以上もかかる怪我をすることになると考

えることができたであろうか。

でもこの怪我は、凍傷とは何の関係もないことを明記しておきたい。

*

病院生活なんて、まったくつまらないものだ。健康で、元気に山登りできること、そして、適度にお酒も飲めることが一番だと実感している現在である。

(HAJ 山で酒を飲む会会長)

ロバ君の思い出

西 嶋 錬太郎

初めてロバを見たのは何処だったろうか。パキスタン、スペイン、いやアフガニスタンだったかも知れない。何処へ行ってもロバがいた。しかしロバと風景が結び合わさって鮮烈な思い出のあるところは南米ペルーとムスターグである。

アンデスに登ろうとペルーのリマ空港に降りると機内預けにした山道具がザックごと蒸発していた。あきらめ切れず現地調達でいつごろこの登山隊が使ったものか分からぬテントなどをようやく手に入れ一人が入ったブランカ山郡ヤングマコ谷。そのテントのガラスのポールが劣化していて夜半風もないのにへたへたと折れ半分潰れ寝ている顔にのしかかる。みじめな気持ちでテントから

はい出すと暗闇に何やらたずんでいる。ジャガー?まさかと思って瞳をこらすとロバだった。昨日、重い荷を背に4000mの峠を越えて来たやつだ。朝になってロバ方と話していてロバは命令に従順で人が気をつけないと倒れて死ぬまで働き続けるものだと言われた。そして、登山を断念、そのロバとともに下山した。

ロバは学名をイクウス=アシナス、英語ではドンキー、アンデスではブーロと呼びアフリカで野生ロバを家畜化したものが世界各地に広がったらしく、馬とは全然違う種に属するものである。小柄な割に力があり頑健で働き手で柔順で粗食に耐え繁殖力も高く、人間にとって理想的な役畜である。にもかかわらず、いやだからこそ馬と比べて軽蔑的に扱われ子どもにさえ棒で叩かれたりする割りの合わない存在である。

ムスターグアタのBC。朝まだき、“ヴヒャヴヒャ”と世にも悲しげな鳴き声をするので何ごとならんとテントからのぞいて見るとロバである。C1への荷上げのためチョトマックから上がって来たもので、薄暗かりにじっとたずんでいる姿にあのアンデスのロバを思い出してしまった。標高5000mを越すC1へのガレた道を我々の隊を詰めたプラパールを運ぶロバたち。ついに足を痛めて崩れるように座り込み空しくもがいていた



1頭のロバ。あの傷ついたロバは今どうなっているのだろうか。

登山を終えてスバシへ下る日、勧められて私はロバに乗って下ることにした。さっそうの白馬童子のつもりだったが、所詮ロバはロバ、誰の目にもサンチョパンサに見えたらしい。みんなから笑われる。何とか格好良く見せようと思うのだがロバの鞍にはアブミがついていないので急な崖の下り道、落とされないように脚で胴を締めつけるのだが何となくへっぴり腰。我慢できないのはこのロバのろさである。私を馬鹿にしているのか、老いぼれて速く歩けないのか我が隊の徒歩のメンバーより遅い。たまりかね身体を半身にねじり手にした棒でロバの尻を思いっきり叩いたら、バランスを崩しめじめな落驢馬。みんな見ている。意

地になって「はいよーシルバー」とわけのわからんことを口走りながらなおなお尻を連続してカツンポカンベタン叩き続けるが、ロバは無表情にトコトコトコ。みんな先にスバシに着いていて私の打撃ぶりは遠くからすっかり見られており同情は挙げてロバに集まっていた。お詫びに西瓜の皮を与えたが余り喜んでもらえなかったようである。

カシュガルで目を見張るものにおびたしいロバ車の行き交いがある。ゆったりと時が流れる世界では金もかからず故障もないロバ車は最高の乗り物であろう。火鍋食堂を求めて暗がりのカシュガルの街をみんな一台のロバタクシーにこぼれんばかりに乗り込みさまよったことが懐かしい。あのロバも重かったろう。ロバ君達よありがとう。

ビバークについて

天城 敬彦

今回の遠征は、26歳から54歳まで、高所登山の経験の豊かな人も初めての人も、11人が全員7546mの山頂を踏み、無事に帰ってこられたのだからこんなにいいことはない。また、その成果にふさわしく、チームワークにおいてもコミュニケーションにおいても、おそらく誰もいやな思いをしていないと思う。

そんな山行のなかで、私を含めたB隊はアタック後C3に帰り着けずビバークを余儀なくされ、A隊のメンバーや中国側スタッフには心配をかけた。結果的には何人が軽い凍傷を負ったが、指を落としたりせずに済み、今となれば困難を克服できたという充実感のほうが強く残っているかもしれない。

しかし結果がよかったとはいえ、われわれ6人がピンチをむかえたことは事実であり、それには原因があり初歩的ともいえるミスもあった。当日の行動リーダーの責任として、私なりに検証してみたい。

当日のAB両隊の行動を再度確認してみる。



11時C3(6850m)発、15時前後からガス、19時05分～30分登頂、19時45分下山、21時45分ホワイトアウトと夕暮のためルートが分からず約7100mでビバーク

(1) 時間について

①出発時間 西面を登っているため朝日があたりはじめるのが遅い。したがってとりわけC2以上では日があたる11時(時差があるので現地の自然時間は8時)前の行動は猛烈に寒い。その代わりに夕方は日が長く22時すぎまで行動できる。92年の

HAIJ隊の報告でもアタックの出発時間が早すぎたと言っていたし、2度にわたるC2からの行動でも早朝の寒気を体験し「朝の行動は11時」と確認した。

しかし、これを機械的に当てはめるのは、やはり誤り。11時にした理由が朝の寒気なのだから、その日の気象条件によって当然異なるし、その日の行動計画によっても変わってくる。事実ビバークの翌朝は9時過ぎに行動を起こしたけれど、猛烈に寒かったとは思わなかった。

②A隊の行動時間 実「ヒマラヤ」266号の西嶋氏の記録を読んで初めて気付いたのだが、8月17日のA隊の行動時間について、私はまったく誤った把握をしていた。これはトランシーバーの交信状態が悪かったことにもよるのだろうが、A隊が10時40分に出発していたことを知らなかった。たぶん聞いていなかったと思う。にもかかわらず11時出発と思い込んでいたのは、前述の確認を無前提に信じていたからだろう。登頂時間についてもA隊は「18時30分登頂、30分山頂にいて下山開始」と報告してきたのを私は「30分山頂にいて18時30分下山開始」と聞き誤ったらしい。だから当日私はA隊は7時間で登ったという前提で、われわれの行動を組み立てていた。19日朝の交信で西嶋氏からルート上の細かい説明を受けていたにもかかわらず、時間については確認をしていない。

(2) 赤旗について

標識の赤旗は短め(約40cm)の物をA隊がたくさん打つこととなっていた。実際に丁寧に打たれていて、C3までの行動で、多少ガスっていてもルートはよく分かったし、アタック中もよく見えていた。しかし山頂直前ではガスが濃くなってきて見えにくいこともあった。たいした重さではないのだから、われわれも何本かは持ち、不安なところでは増強するぐらいの準備はしておくべきだったろう。

ただこのことが、われわれのビバークの原因だとは思えない。われわれが迷った辺りは行きは天気もよくルートはよく見えていたのだから、たとえ旗を持っていたとしても増強していたとは思えないからだ。

むしろやるべきは、打ってある旗を多少引き上

げるか打ち直すべきだったことだろう。時間が経てば旗はそれだけ埋まり、実際、赤布の部分は隠れてしまっていて、かろうじて竹の先だけが雪面に出ているものもあった。もう少し条件が悪ければ、完全に埋まっていただろう。竹の長さを含めて、反省すべき点であろう。なおこの赤布は蛍光塗料のもので、93年ガッシュブルム2峰隊から分けていただき、たいへん有効だった。この場を借りて御礼申し上げます。

(3) 磁石については行動記録に書いたので繰り返さない。高所にいけば注意力が散漫になることの見本みたいなものだ。

(4) A隊は7時間50分で登り、B隊は8時間30分で登っている。たいした違いではない。A隊は1時間30分でC3まで下り、さらにC2まで下った。B隊は2時間かけて7100mまでしか下れず、翌朝さらに1時間かけてようやくC3に辿り着いた。要するに下りに時間がかかりすぎているのだ。これはルートを見付けるのに手間取ったこともあるが、やはり疲労によってスピードが上がらなかったからだと思う。そして気象条件も前日よりずっと悪かった。

(5) 本当は7400m位の地点で「やばいかな」と思ったときに戻るべきだったのかも知れない。しかしそのときは、私自身は十分余力があると思ったし、みんなも大丈夫だと判断した。また、時間的にもまだなんとかかなと思っていて。なにしろ前日A隊はC2まで下っているのだから。そしてここまでできているのだから、なんとか登りたいという思いがやはり強かった。総じて、前日の「余裕の勝利」をみて、楽観的に考えすぎたといえる。

以上が私が思いつく要因なのだが、もしたとえあと30分早く出発し、われわれも旗を持ち、磁石を使って下山していてもビバークは避けられなかったかもしれない。ただ最善のことをしていなかったことだけは確かであろう。隊長からは過分のお言葉を頂いたけれど、まだまだ私も未熟であった。

下山中、風が強かったという人もいたが、私はあまりそういう記憶がない。ビバーク中も風は弱く、ただただ乳白色の世界にいたという気がする。そのため放射冷却が押さえられ、気温があまり下がらず、ラッキーだったと思っている。

パミールノットの高峰に立ちて

樋上嘉秀

「最初から頂上アタックに加えられないと言われるのなら参加しませんが、登らせて貰えるのですか?」。これは私が酒井隊長に初めて電話した時に先ず尋ねた言葉である。その時、隊長は私の質問をどう取られただろうか。私の殆ど無い冬山経験の話聞きながらも返ってきた返事は、「普通にアイゼンワークが出来れば参加希望者全員にアタックのチャンスは与えるつもりです」の言葉であった。

以来、出発までの約8ヶ月間、隊員合宿の度に隊長からこの私との電話の遣り取りが何度か披露され、随分照れ臭い思いをした。しかしそれは隊長の全員登らせたいという情熱の迸りに私との会話がかげられたのであって、多分その時点では私が登頂出来るとは思われていなかったと思う。

それ程に私の冬山経験は皆無に近い。暖かい時期を含めて、その年の正月に富士山の9号目近くに、そして6月の終わりに漸く頂上へ登るまでは国内の3000m以上の山へ登った事が無く、ましてや海外の山となれば無縁の身であった。だから傍目には私がそんな遠征に加わる事は随分身のほど知らずの行動に見えた事だろう。その上、5月のゴールデンウィークの谷川岳での合宿ではメンバーに合流出来なかったり、更には出発の近付いた6月始めには山行中にマムシに噛まれるアクシデントに見舞われ、折角西嶋副隊長が計画してくれた富士山登山にも参加出来ずと、何かこの遠征には縁がないのではと思われる事態が続く。マムシに噛まれた傷も全治まで3ヶ月、元の体に完全に戻るまで半年位掛かるのではと言われ、経過を見る為にと半強制的に入院させられた。8日間退院したが知己の医者も医者も遠征は中止するだろうと思っていたらしいし、母親も強く参加を慰留した。連絡を聞いた遠征メンバーも参加しないかも考えた事だろう。それでも私は行く事をためらわなかった。自慢にはならないが親不孝人生の真骨頂と

言えるかも知れない。それは妻や子供たちが全く反対しなかった事もあるが私には高度障害もマムシの後遺症も克服出来る密かな自信があったからである。

私は岩登りやフリークライミングの技量は持ち合わせていないし、これから体を張ってそれを取って来る年齢でもないし、それを志向するつもりもない。“山はただ黙々と登るもの”というのが私の山登りのポリシー。だから決して難しい高山を目指したのではなく、苦しくてもひたすら高みを目指す気力さえあれば私でも登れるという信念で遠征に加わった。それはHAJの会員であり、私の所属する山の会の先輩の平川宏子氏から高所順応さえ巧くいき、天候に邪魔されなければ大概の者は登れるとアドバイスされた事が大きな支えになっていた。

確かに日本を出発して北京に着いた当初はマムシの後遺症でか体調は芳しくなかった。しかし中国の食事や空気が体に合っていたのか体調は何時のか良くなり、シルクロードの町ウルムチ、カシュガルと移動する程に絶好調になる。その後マイクロバスで高度3600mの草原の町スバシに移動した時には作業するのに息切れの連続で緩慢な動きしか出来なかったが、これは空気が薄い為で私一人の事ではなく、二日後にはどじょう掬いをする志小田隊員と高橋隊員の二人の間を箆を持って走り回る事さえ出来る程になった。更に最初の4300m付近のベースキャンプ入りの時には気が付いたら一番乗りしていて、メンバーから「マムシパワー」という迷誉?な渾名を頂戴、勢い余って2度目のベースキャンプ入りの翌日には一人で4800m付近まで登ってしまい、後で隊長にお叱りを受けてしまったりもした。それ程に私の高度順応は全てに順調にいったのである。とは言っても殆どのメンバーがBC、C I、C IIと高度を上げる度に高度障害(特に頭痛)に悩まされる中で高高

度の経験の全くない私が軽い浮腫と頭痛が一度づつあっただけで頂上に立つ事が出来たのは偶々今回調子が良かった為か、特異な体質が成さしめたものかは次回の遠征で分かるとしても、その事を除くと他のメンバーに助けられてのラッキーな登頂であったのも事実である。それは高度障害の取れた他のメンバーの馬力は流石に物凄く、天城リーダー以下のメンバーの先導無くしては登り得なかったからである。

8月17日の第1次隊5名の登頂成功を受けて翌18日、酒井隊長以下第2次隊の我々6名は快晴に近いCⅢ(6900m付近)を午前11時に頂上目指して出発した。前夜の吹雪で1次隊のトレースは僅かに残るだけで1次隊の立てた赤旗を頼りに交代で新たなラッセルを続ける。登る程に西の方から雲の塊が次々と遣って来ては周りを何度も包み隠す。ラッセルは厳しいもので私など200歩程を10分進むのが精一杯で、大休止を含め何度も何度も休まねば進めない。やがて雲はすっぽりと独立山塊であるアタの頂上付近を包み込み、前方の赤旗がやっと見える程の視界になる。それでも吹雪かないのが幸いと頂上へのアタックは続く。ダラダラした登りが続くだけで悪場で緊張する訳で無く、さりとて雲の中では展望に驚嘆の声を上げる訳でも無く、ただ黙々と高みを目指しただけである。そして午後7時3分、夕闇の様な雰囲気の中に登り着く。そこだけが風に雪が吹き払われるのだろう、平坦な雪原の中に岩場が剥き出した僅かの高台に昨日の1次隊や1週間程前に登頂した北京大隊の立てた旗が何本も棚引いている。雪原から僅かに高い岩場の上に立つのも億劫な程に疲れていて、登頂出来たら泣き出すだろうとの思いとは裏腹にこんな所に長居をしていたら死んでしまいそうに思われ、一刻も早く下りたくて最後の隊長が登り着くのが随分長く感じられた。それ程感慨に乏しい登頂の後に、今回の遠征で最も苦しかった試練が待っていた。それは登頂成功後の下山時にガスによる悪天と日没とで7100mでフォーストビークとなり、ツェルトの中で殆ど一睡も出来ない程に雪と風の直撃を受けながら辛い10数時間を過ごし、その疲労からか風邪症状を引き起こす。空気の薄さと殆ど食事を丸々1日以上取っていない事で

体力が消耗したのも原因の一つだろう。その為に夜が明けてからの下山では動くのがやっとで、CⅢの撤収で荷物をザックに詰めたものの立ち上がる事の出来ない状態になる(この日も天候悪く何とかCⅢに帰り着いて一旦テントを撤収して下山し掛けたが無理と判断、再度テントを張り直して停滞したので私の状態が直接の停滞理由にはならなかったが)。天候の回復した翌日の一気のBCへの下山も足を前へ出すのがやっとの状態、途中何度ザックを放り出そうと思った事か。そんな状態での苦しい下山だったが、天城隊員や高橋隊員に荷を負担して貰ったりしたお陰で、指に後遺症の残らない程度の軽い凍傷を負っただけでBCへ帰還、今回の初遠征を登頂で飾る事が出来たのである。

36日間のエクスペディションを終え、今その事を振り返る時、53歳の酒井隊長から26歳の伊藤隊員までの幅広い年代の十人もの良き山の友を得られた事が登頂出来た事と共に私の大きな宝物になった。だから、これからも可能な限り海外の山へ遠征したいと願う今日この頃である。



トイレに寄せる随想、瞑想

谷田川 武

ウイグル語で美しい庭園という名のホテルを出ると、窓を一杯に開けてみる。まずは夕暮れの賑わいというのにはあまりにも騒々しいすぎる喧騒が飛び込んでくる。車のクラクション、物売りの大声、行き交う人々のざわめき、そして悲しげなロバの鳴声（それにしても、本当に悲しげに鳴く）。次に飛び込んでくるのは、走馬灯のように目に映っては走り去っていく風景。波のような自転車の群れ、原色の服とその上の美しい顔、色鮮やかな看板、そして緑濃きポプラ並木。強まった風に目をつぶってみる。ポプラの木の香、カバプーを焼く匂い、様々な生活の匂い……。暫くの瞑想の後、目を開けてみると、車はもう飛行場への道を曲がろうとしていた。ふと出発までの慌ただしい日々と帰国後の忙しさが頭をもたげてくる。そのことを遠くへ追いやるように思い切り窓を閉める。

B・Cでの何日か……

中島さんと最初に作ったきじ場は、テントから少し遠いが、快適であった。ふんわりとした草と積み上げた石の上とに足を置くと、目の下には小さな花が咲いていた。ゆったりと腰を下ろすと、岩稜の向こうにはどこまでも深く青い空が広がり、その下に砂漠を思わせるような山々が連なっていた。色彩の変化がないようだが、良く見ると、微妙な変化があり、その変化が美しく、「茶色」といった一言ではとても括れない。下を見て、便がしっかりしていると、今日は調子がいいぞと安心した。休養日の朝は暫く腰を下ろしたまま、のんびりと周囲の景色を楽しむ。さて、この色彩を何と表現したらいいのか、色々と考えてみる。心地好い風が尻をさっと撫でていく。一番贅沢なトイレでの一番贅沢な一時かもしれない。「非日常」という匂きがポツリと出てくる。立ち上がり、振り返ると、氷河末端の氷塔が谷あいに見えている。その氷塔を

目指して小さな沢を登っていくと、色とりどりの花々が短い夏を燃焼するかのようには咲いていた。すぐそこに見える氷塔までは意外と遠かった。改めて山の大きさを感じる。誰だろうか、用足しに来た隊員が豆粒のように見える。人間なんて小さな物だ、とつくづくそう思う。何故だか、山頭火の「分け入っても分け入っても」の句がふと浮かんでくる。

アタック前の一日、樋上さんと話した。

「忘れ得ぬ風景とどれだけ出会うことができるか、それが幸福な人生のひとつの価値判断ではないですかね」

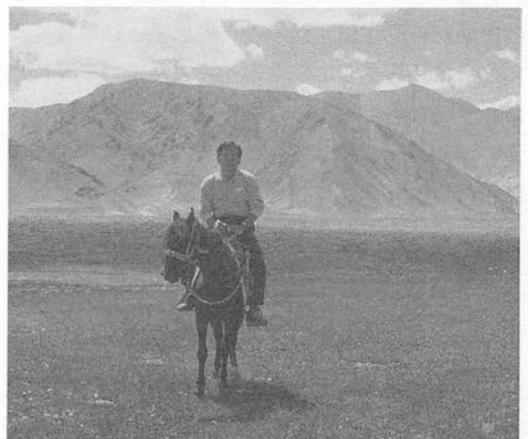
「そうですね」

人は、日常の生活の中で、新鮮さを感じる風景に出会うことは少ない。というより、新鮮さを見出だすことに疎くなる。こうした遠征などでは様々な新鮮な風景に、そして忘れ得ぬ風景に数多く出会うことができるが、それは特別なかもしれない。

「最近の僕はこうした風景に出会いたくて、日常の大半を送っているところがありますね」

「でも、それだと日常の中での風景がつまらないでしょう」

確かにそうだと思った。でも、と拘る気持ちは



何だったのか。

高橋さんと志小田さんがふたつ目に作ったきじ場は、テントに近すぎたが、少し高台にあり、オープンでそれはそれなりに良かった。誰かが座り込んでいると、お、頑張っているなと思ひ、自分が座り込むと、テントや小屋を少し下に見下ろし、何だか気分良かった。

ある夜、月明かりを便りに座り込んでいると、近くでガサッと音がした。どうやらラクダらしい。月を見上げながら、シャラリ遠征の白揚平のトイレを思い出した。夏村の村外れの傾斜地の高台に竹で作られたトイレは、見るからに涼しく、目の前には雄大な風景が広がり、下には汚物を処理する豚が近すぎない距離で飼われていた。何とも気持ちよかった。朝の清々しい空気の中で、本当にゆったりと美しい谷と山々を見ながら、用を足すことができた。

トイレというと、一般には忌み嫌われるが、本来は人間生活の基本となるものであり、もっといえば、文化の基本となるものといつていいと思う。何回か中国などを旅行して、オープンなトイレに接していると、狭い部屋でカギを気にしながら用を足す日本のトイレ、日本の文化などはせせこましく感じられてくる。

今遠征、父の看病疲れなどで体調の良くなかった僕は、あまりお腹の調子も良くなかった。アタックの日も、どうしても我慢できなくなって、7000m弱付近で用を足した。寒さを感じるかと思ったが、それよりも真っ白で広大な雪面の中での用足しは気分爽快であった。その時、こんなことも思った。僕の汚物は直ぐに雪に埋もれ、圧縮され、雪の一部となり、7000mに残る。そう考えると、何だか楽しくなった。そして、可能性は少ないと思うが、いつか8000mの稜線で、下の氷河を見下ろしながら用を足してみたいと思った。こんなことを考える奴は妙な奴と思われるかもしれないが、高さのせいで、多少頭が変になっていたのかもしれない。やはり、7000mの壁は厚かった。そして、それからが辛く、長かった。白一色の世界の中で、先を行く蝶の如き色彩を追いながら、それが見えなくなることはないように、ただただ足を前に運んだ。やがて、やや激しくなった風雨に、

時間も空間も錯誤しそうな世界に身を任せた。しかし、何故だか、頭の芯だけは冴えていた。

アタックを終え、ベースに下った翌日、夕暮れが美しかった。その夕暮れを見ながら、時の流れをしばし止めたいと思った。苦しかったが、明日山を下るかと思うと、もう少しここにいたいと思った。日本で見るのと大差ない夕暮れなのに、どうしてこうも美しいのだろう。

ところで、今遠征も楽しい酒飲みに恵まれて、楽しい登山ができた。ベースを流れる小川も朝には凍り付き、周囲の風景もすっかり秋の風だ。短い夏、このベースを多くの人影が通り過ぎていった。我々もその一翼にすぎない。そして、もう暫くすると、深い雪にその影もベースと共に埋もれていくことだろう。しかし、1993年夏、このベースで毎夜遅くまで飲み騒ぎながらも、11人全員登頂した日本隊がいたことを、何処かしらに刻み込んでいるに違いない。さあ、今日も宴会だ。山での最後の夜、大いに盛り上がるだろう。

いつしか車は空港のゲートを潜った。これで、カシュガルともお別れである。急にバザールの雑踏が胸に迫ってくる。シルクロードの要衝、そして民族の十字路・・・ウイグル、キルギス、ウズベク、タジク、ハザック、回、漢族、様々な顔が浮かんでくる。かって疏勒と呼ばれた国、またいつか訪れ、今度はイリ、ヤルカンド、ホータン、チェルチェン、コルラなどと、シルクロードの町々を巡ってみたいと思う。暗くなった中、ロシア製の機はウルムチに向けて静かに飛び立った。再来できるのはいつの日であろうか。

今遠征でもいくつかの句を作ったが、気に入っているのは、

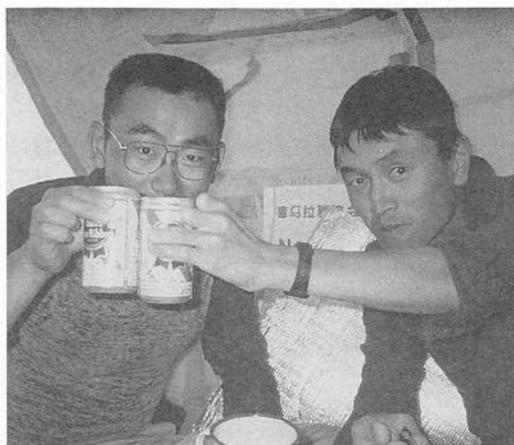
南風若き岳人の働けり
大陸の万年雪に尿放つ
のふたつである

4000mを越えてのトイレ作りは決して楽な仕事ではないけれども、またいつか、何処かしらに素敵なメンバーと素敵なトイレを作りに行きたいと思う。環境をこわさないように十分に気をつけて。

カシュガルの町にて

高橋 敏 雄

カシューホテル前の通りには商店街が軒を連ね、シルクロードの要所オアシス国家も近代的な町並みを形成し、東西の商人が往来している。無宗教のアタ隊員は中国系の商店から冷えたビーチュー（ビール）を買い、隣のイスラム清真食堂からシシカパブーをつまむという、二律背反する宗教の掟を良いように解釈し、昼間から上機嫌でアルコールをたしなんでいた。ホテルの部屋に姿が見えないときは必ず清真食堂に見慣れた顔が入り浸っている訳で、アルコールタブーのイスラム教徒の呆れた視線も意に介せず消耗しきったガス欠の胃袋はブラックホールのように吸収し体力回復に励んでいた。山から下りた我々にとって、つぶしたばかりの羊の串焼きの誘惑は耐え難く匂いに誘われるまま足が向いていた。香辛料と岩塩の微妙なバランスは日本の焼き鳥のような味を醸し出している。市内の中心にエイティガール寺院がありコーランが一日数回ながれるとメッカに向かい一斉に祈っている人々は中国の一部というより中近東の国々のようである。中年のご婦人は茶色のチャドルを頭からかぶり素顔を見せてはくれないが若い美しい女性は金銀蛍光色の派手な衣装を身にまとい闊歩している。また、左右の眉を横一直線に結んでいる婦人もいて興味深い、まさしくここはウイグル族の町である。寺院と解放路をはさんだ向かいの細い路地にはバザールがあり道端に数々の日用品や毛皮、香辛料、民族帽子、上から吊された羊の肉、生地屋、ナン（堅パン）、スイカ、ハミ



ウリなどの果物があふれ、人々の生活がある。職人街に入るとブリキ加工品店、例えばバケツなどを作っている店や衣装箱を作る店、宝石の加工品、楽器屋などプロの職人が腕を競っている。のぞき見をして歩くと時間経つのも忘れてしまう。市内中心から1、2km離れると鬱蒼としたポプラ並木が通りを囲み砂漠の町を緑で覆っている。ウルムチに戻るまでの数日間はホージャ墳（香妃墓）観光を始め、絨毯のお土産や民族楽器購入など各人思いで多い時を過ごした。我々と目と目が合うたびビーチューをあいそよく出してくれた清真食堂の婆さんは今でも日本の観光客にビールを売っているだろうか。いつの日かまた訪ねてみたいものだ、通訳の趙海龍さん大変お世話になりました。謝々々・・・

西域からの通信

志小田 美 弘

褐色に広がる砂漠。ポプラ並木の続くオアシス。

氷河からせりあがるパミールの高峰。そして「ユー

ロシア大陸のど真ん中」を実感させたスバシの草原。自分がこの世に存在する遥か以前からこうであったであろうと納得せざるを得ない風景の中で過ごした日々は素晴らしかった。

そんな風景の中にいた遠征隊の仲間もなかなか素晴らしい面々だった。全国区の隊員とあって多少の不安もあったのだが、持参の酒が減ることにそれは氷解していった。反面、果たしてこの遠征中、酒はもつのだろうかという、実に恐ろしい不安は震える程増大していったが。

「うわばみ」は、数匹以上いたと私は確信している。

隊長をはじめ、隊の仲間から学ぶことも多かった。実に楽しく、自然体で山に登る人たちであったし、自分の「登山」を持っている大人だったと思う。酒井隊長と西嶋副隊長の年齢も私を大いに勇気づけた。

数年前のチベットでの遠征の時に考えたことを今回も感じ、考えさせられた。思えば、ここしばらくそんなことを考えている。チベタンや遊牧のキルギス人たちをみると「人間の暮らしの中の幸福って何なのだろう」とつくづく思われる。いわゆる我々の価値観でみるならば、あきらかに貧しい彼等の暮らしである。決してきれいとは言えない粗末なものを着、最低限のものをささやかに食べ、質素な住居で暮らしている。

むろん彼等にも欲望はあろうが、我々のそれと

比べてずっと穏やかで慎ましいものだ。太陽の運行に逆らわず、自然の振り子の中で彼等は暮らしている。

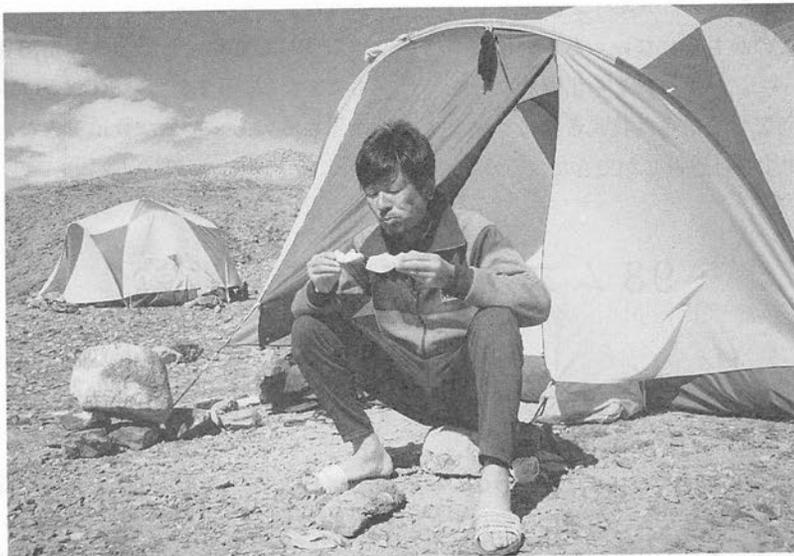
たいして必要でもないものに関心を奪われて、無意味なエネルギーを消費したり、ストレスを感じているような自分が、妙に想起されてしょうがなかった。

現代社会という、混沌と秩序が渦巻くような中で暮らしている我々が、求めるが故に感じるストレスの類いは「生きる為に必要か？」と問われたらほとんど否と答えるようなものを欲する時に生起し始めるのではないだろうか。

私に彼等の真似はできないし、住んでいる世界も違う。今は既に、半ば強制的に、現実の暮らしに戻っている。しかし、我々にとっては非日常の世界だったパミールでの日々、そして登山活動の日々は、自分の日常を顧みる機会としても、とても貴重なものだった。

荷下ろしの時に、キルギス人のラクダ工が使い古しのペットボトルに入れた、無論自家製のヨーグルトを飲めと勧めてくれた。ラクダの毛が沢山浮かんでいる代物だ。一口ご馳走になったがおかわりをする気にはなれなかった。

北京に戻り、ホテルの日本料理屋で私と高橋君はメニューに納豆があるのを見つけて狂喜し、日本酒でイカ納豆を食べて乱舞したのであった。

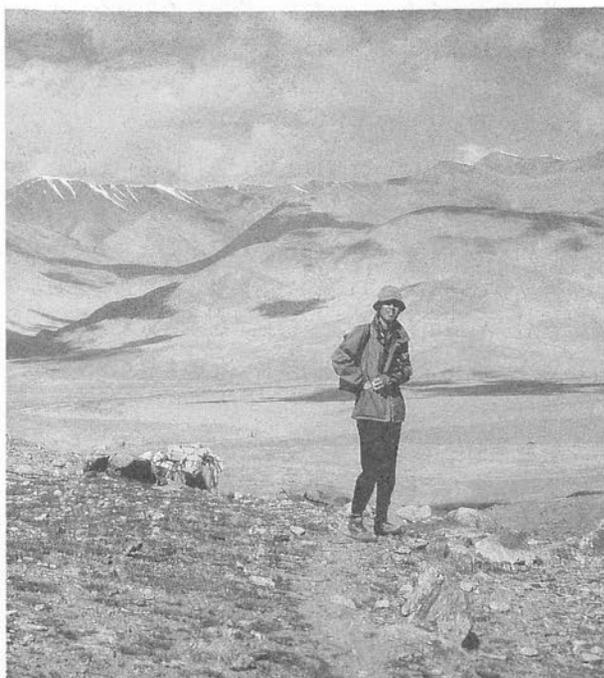


楽しかった夏休み

中島俊弥

「昭和の若いのはヒマラヤ協会の登山には連れていかない」と言っていた筈の酒井隊長の口からアタの話聞き出したのが登山前年の暮れ、会の正月合宿でのことだ。鹿島槍の冷池小屋で、「中国に行くとうまいものが食えるし、頂上まで登れば立派な登頂証明書がもらえるんだゾ」という話に、すっかりその気になった。“会の山行を大切にしろ”という意味で冒頭の様な言葉になったのだと思うが（これは僕の憶測）、こっちはうまい話のほうに飛び付いてしまった。

総勢11人、まだ全員の顔と名前が一致しないまま成田を出発。北京・ウルムチ・カシュガル、行く先々で予想通りうまいものにありつけた。もしも日本にいたら、夏休みとはいえ、炎天下でのサッカー部の練習を見た後、一人アパートでビールを飲むくらいしか楽しみはない。砂漠の上の飛行機の移動も、とてもリッチな気分させてくれた。しかし、良いことばかりは続かない。さあここからは自分の足で歩こうという時になって、熱を出して倒れてしまった。初めての参加であることを言い訳に、国内での準備を全部先輩方にやってもらった。今思えば、そのツケがスパシで39°Cの熱になって現れたのかもしれない。あるいは食べ過ぎの罰なのか……。いずれにしろ出遅れた分を取り戻そうと、回復してからは我武者羅にラッセルをした。あれで少しは恩返しできただろうか。



無事登山を終えてからはさらに食欲旺盛になった。山から下りた直後は誰でもそうなるらしく、お腹が不調になったのは今度は僕だけではなかったようだ。

こうして終わった夏休み、全国各地に山の仲間もできたし、うまい思い出ばかりだった。でも、そう思えるのも、全員が登頂できたからかもしれない。

93 ムスターグ・アタ雑感

伊藤英世

雨のウルムチから2時間のフライトで夕焼け広がるカシュガルの空港に降りたら、内陸性の気候である熱気に包まれて、やっとシルクロードにきた

と実感した。登山以外にも、街の様子に興味があり歩いてみると、ヒゲをたくわえ帽子（ドッパ）をかぶった男達と色鮮やかな民族衣装を身にまとい

た女達のウイグル人が行き交う。

インドを歩いていたら、「マネーチェンジ」と、しつこく両替商が、「どこへ行く、乗れ乗れ」とオートリキシャの運ちゃんがハエのようによってくるが、せいぜいここではホテルの前ぐらいで、兌換券(来年から廃止)を1.3倍の人民元にチェンジしようとするが、あまりしつこくなく、断るのに楽である。

シシカバブーを食べてみるが、塩加減がいい、ツクネにしたものもあり、これもいける。1本25角。荷車に積んで売っていたハミウリは、一切れ3角でとても甘い。反対に美味しなかったのは肉まん(中に羊の肉が入っている)で、店先に山のように積んであり冷たくなっていたからだろう。今回、羊の肉が美味しかった。インドではギーを使っている為、生臭さがあるのが、ここでは使われてなく、いくらでも口に入る。

バスはポプラ並木の通りをスピードを上げ、幾つものロバ車を追い越していく。カラコルムハイウェイは、何か所かダートになっているものの、ほとんど舗装されていて快適にバスは走行する。

風の浸蝕で荒涼としているゲズ渓谷を見ているうちに、2年前の絶不調だった遠征を思い出す。終始下痢で苦しめられ、満足のいかない内容になってしまったのだ。次の年に8000m峰の誘いがあり、すぐにも飛びつきたかったが、今の自分には無理だと判断した。そして、もう一度7000mをやるんだと決め、アタに参加したのだ。

登山終了後、振り返ると風邪で寝込んだ時もあったが、すぐ回復し重い高所障害にならず行動でき、全員登頂することができて良かったと思う。

今回、隊員の皆さんから学んだことは多く、収穫があったことも付け加えておき、会の先輩、HAJ事務局、隊員の皆さんに感謝、御礼申し上げます。



▲ 6000m 付近を登る金森



▲ C1での池上

ムスタグ・アタ参考文献

Seven Hedin : Through Asia, vol. I Methuen, 1898

M. Aurel Stein : Sand - buried Ruins of Khotan, Fisher Unwin, 1903

-- : Mountain Panoramas from the Pamirs and Kwen Lun, The Royal Geographical Society, 1908

Eric Shipton : Mountains of Tartary, Hodder & Stoughton, 1949

Diana Shipton : The Autique Land, Hodder & Stoughton, 1950

H.W. Tilmán : Two Mountains and a River, Cambridge University Press, 1949

Yang Ke - Hsien : The Ascent of The Mustagh A - ta, Foreign Languages Press, Pekin, 1959

Anonymous : Conquering th Father of the Icy Mountains, no, date.

Gerald Morgan : Ney Elias : explorer and envoy extraordinary in High Asia, G. Allen & Unwin, Lomdon, 1971

カシュガルの7000メートル級 ベルショフ著
袋一平訳述 (山と溪谷1958年8月号)

ムスタグ・アタ登頂 史占春著 本田勝一訳 (岳人125号 1958年)

中国男女混合ムスタグ・アタ登山隊「ムスタグ・アタをふたたび征服」(中国画報1959年8月20日号)

ムスタグ・アタ登頂記 王鳳桐／楊克現共著
佐藤剛弘訳 (世界山岳全集11巻) 朋文堂 1960年

-以上は深田久弥著「ヒマラヤの高峰」掲出-

1. 地図の空白部 シプトン著 諏訪多栄蔵訳 あかね書房 1967年6月15日 1,000円

2. 未踏の山河 シプトン著大賀二郎／倉知敬共訳 茗溪堂 昭和47年2月10日 1,900円

3. カラコルムを越えて ヤングハズバンド著 石一郎訳 白水社 1966年7月10日

4. カラコルム探険史(上) ヘディン著 水野勉訳

白水社 1979年12月10日 3,800円

5. カラコルム探険史(下) ヘディン著 雁部貞夫訳 白水社 1980年1月24日 3,800円

6. カラコルムからパミールへ ティルマン著 薬師義美訳 白水社 1975年6月10日 1,600円

7. 高い山遥かな海 探検家ティルマンの生涯 J.R. L. アンダーソン著 水野勉訳 山と溪谷社 1982年11月1日 3,800円

8. 幻の探険家ネイ・イライアス モーガン著 吉沢一郎／斎藤明子共訳 白水社 1976年4月10日 2,400円

9. シルクロード探険 大谷探検隊 白水社 1978年6月20日 1,600円

10. 中央アジア探険史 深田久弥著 白水社 1971年8月25日 2,000円

11. アジアの砂漠を越えて(下) ヘディン著 横川文雄訳 白水社 700円

12. ヒマラヤの高峰 深田久弥著 白水社 1973年6月25日 4,800円

13. サリコール地方およびカシュガルへのルートについて スタイン著 井手マヤ訳 山書研究No.28 日本山書の会 昭和59年3月31日

14. 知られざる祈り「中国の民族問題」加久美光行著 新評論 1992年3月31日 3,600円

15. ダットンの山 シプトン著 水野勉 白水社 1975年5月10日 1,600円

16. CROWNING THE DRAGON - Adventures in the chinese KarKoram. (Hugh McManners)

17. 東トルキスタン探険史 ダブス著 水野勉訳 山書研究No.8 日本山書の会 昭和42年月

18. 古代から1800年までの東トルキスタン旅行 ダブス著 水野勉訳 日本山書の会 昭和58年3月31日発行

19. 西域列伝(シルクロードの山と人) 金子民雄著 岳書房 1982年4月1日 2,000円

20. 中央アジアに入った日本人 金子民雄著 新人物往来記 昭和48年11月10日 980円

※クラウン報告書より

第3部

隊務報告 資料



隊 務 報 告

1. 総 括

—私記的に—

『富士山には 月見草が よくにあう』

という、太宰治の句碑に出会ったのは、35年位前、御坂峠付近であったと記憶する。これが、妙に頭にこびりついてきたのか、海外登山をするようになってから、

『(海外) 登山には 登頂の字が よくにあう』

と、思い続けてきた。休暇、金銭、職場や家庭の同意の問題等々の障害を乗り越えて行う海外登山、ましてや未知・未踏の山ならまだしも、すでに人口の膾炙した山、何で登らずにおくものか。

今回も「全員登頂だぞ！」との秘めた決意を胸に、しかし、表面上は淡々として中国へ渡った。

「クラウンが陥ちた」と聞いたのは、BCでだ。一応のアタック態勢が整い、休養に降りて来た時だった。西嶋副隊長の誕生パーティで朝の4時頃まで飲みながら、過去のHAJとクラウンの拘り、志なかばで召されたり、無念の涙を飲んだ者たちに思いを馳せた。古い体質をもっている私なのか、メートルが上がるごとに、

『今回のアタは全員登頂でなければならないんだ』

との思いが一段と高揚してくる。

この隊はメンバーに恵まれた隊だ。高所登山の経験のある者も多く、また一人ひとりが日頃から「自分の歌が歌える」登山活動をしている者たちなのだ。このため、隊長として考慮したことは、「隊員間の和」と「高所順応」だった。そしてこれらは十分に満足できたと自負する。

行動単位は大きく2つに分けた。つまり、西嶋をリーダーとするルート工作を主にするA隊と、天城をリーダーとする荷上げを主にするB隊だ。どこへ出しても隊長として通用する2人だ。このリーダーを中心として登山活動は円滑に進められた。

隊員の自我を超越した協力も見逃せない。…

しかし、私個人には苦しい一語に尽きる登山だった。この時点で、全員登頂のポイントは、実は私・隊長が登れるか否かだったのだ。

14日は『よしやってやるぞ』との気概から、BCを真っ先に飛び出し、ノンストップ、短時間でC1入りした。『よしよし』と喜んだもののその付けは次の日にきた。高度差1,000m。晴天。実に暑い。昨日の疲れでだるい。苦しい。登れない。5歩登っては一休みだ。『戻ればいいじゃないの』と優しい神々、その度に『もう少し頑張れ!』と鬼面のような神が激励?する。…

山岳会で10年来同じ釜の飯を食ってきた中島に助けられてC2へ。

アタの頂上は判定の難しい所ようだ。「過去に登った何隊が真の頂上に立ったのか」と疑問視しているのは当協会の山森専務理事だ。今回は我々の数日前、北京大隊が頂上直下までテントを出して、快晴の日に登頂、時間をかけて真の頂上を確定し、標識を立ててきたのだ。

17日、ホワイトアウトに悩まされつつも、A隊はそこまで登った。そして、ブリザードの中B隊も、40mおきにA隊が立てた標識に助けられて登頂を果たした。BCでは、外国隊が『日本人は何である悪天の中アタックしているのだろう』と不思議がっていたとか。しかし、我々には十分な対策、採算があったのだ。

登山期間ギリギリの全員登頂であった。

(記・酒井 国光)

2. 庶務

庶務とはあまりはっきりとしない役務であるが、大別すると次の3点がおもな仕事といえよう。

- ① 隊長の事務的補佐
- ② 隊の雑務・会計
- ③ 諸団体との交渉

とはいえ、普通、これらの仕事は隊長自らか副隊長・秘書長が行う場合が多く、庶務係とは何をしていたのかかわからず遠征を終了してしまう場合が多いようだ。今回は、私が隊長と3度目の遠征ということもあり、次のような仕事を行った。

- ① 搭乗手続き、座席の割り振りなど、空港での雑務・交渉
- ② 都市滞在での行動日程の確認、連絡
- ③ ホテルでの部屋割り

今回は隊員数が多いこともあり、往復路共に滞在都市によって隊長以外は組み合わせを固定せず、同じメンバーと重ならないように変更した。このことは、隊員

の相互理解を深める一翼となり、好評であったようだ。

- ④ 遠征費用以外雑費の徴収、会計

BC～C1の荷上げ・荷下ろしのロバ代、答例会費用など、遠征費用に含まれていない必要経費を隊長と共に計算し、徴収、その保管、会計を行った。多少多めに徴収することで、追加徴収を押さえることができた。

- ⑤ 登山協会との決済、協議への参加

隊長について、登山協会との会計（内容の確認）、隊としての要望申し入れなどに立ち会い、副隊長と共に補佐した。

以上、不十分な点も多々あったと思うが、隊員皆さんの協力もあり、一応庶務としての最低限の役務を果たせたと考える。

(記・谷田川 武)

3. 登攀

事前の計画

- 1、ルートはノーマルな西稜とし、全員登頂をめざす。車の最終点スバシからの登山期間は24日とする。
- 2、高所が初めての隊員が多いので初期順化に注意しスバシで1日はBC往復、1日は裏山でBC以上の高度を獲得してからBCに入る。
- 3、BCを4350m C1を5350m（高度差1000m）C2を6100m（高度差750m）C3を6800m（高度差700m）とする（C3と頂上までの高度差750m）。
- 4、BC～C1間の荷上げにロバを使う。
- 5、ルート工作のA、荷上げのB、Cの3隊に分けほぼ1日ずつずらし同じパターンで行動する。ABCのメンバーは適宜入れ替える。順化に時間のかかる者はCに入れる。
- 6、行動開始は西稜の日の当たる北京時間午前9時以降とし寒気に備えオーバーシューズを持参する。

- 7、A隊はヒドンクレバスに備え、コンテニューアス用の9mmザイル、フィックス用PPロープを持つ。B、C隊はA隊の赤旗に従って行動する。
- 8、ヒドンクレバスおよびアタの広大な斜面のホワイトアウトに備え蛍光の赤旗を大量に用意する。
- 9、酸素ボンベはBCとC1に各1本、ガモウパックはC1に。C2以上にはO2パックを置く。
- 10、ゴミなどすべておろし何も残さない。

登山活動

①について 計画どおりの日程で11人全員登頂し大成功であった。

②について 初期順化では経験者の高橋、中島の二人が少し苦勞し初めての樋上が元気であった。経験だけでは安心できない高所登山の難しさを知る。中国側の輸送事情でスバシ滞在が4泊も有りスバシの裏山ハイクは高度不足だったがそれがかえって無理しないことになりよかったと思える。

3について BC、C1間の高度差1000mは初めての者には大きすぎるので中間点に休憩用のレスティングテント設置を考えたが、みんな元気でしかもC1が5200mになったのでつくらなかつた。C1を低くしたつければC1とC2間の高度差1000mとなつてはねかえり体調不十分な者にはかなりの負担になつた。ただ、もしC2も低い所につくれば次のC3建設が大変で、C3も下げればアタックに負担がかかり過ぎたであろう。北京大隊、B隊ともに6850mのC3からでさえ時間切れでビヴァークを余儀なくされたことを思えばA隊のワンデイアタックも無理で全員登頂の喜びは無かつたかもしれない。正直、キャンプは4つ欲しいところである。そうなると登山日数が増えてしまうが。

4について C1へのロバでの荷上げはメリット、デメリットがあつた。大量の物資を一気にC1に上げられたことは日数の限られた隊では魅力があり、大いに助かつた。何隊かいたBCの隊でロバを使ったのは我々だけであつた。お金の問題であろう。使つてみてお金以外にも問題があることが分かつた。C1の位置を決めそこまで運ばせるために先発がロバと競争しなければならず大変なこと、今回のように雪が下の方まであるときにはC1の位置が低く押さえられてしまうことである。その結果は上記のとおりである。

5について 順化は多少の個人差は当然として研究にあたいするほどうまく行つた。スバシでドジョウを掬いながらブラブラしていたことのおかげらしいとは既に述べたとおりである。このためC隊は必要でなく、全日程AB2隊で同時行動出来、戦力のロスがなく全員登頂を可能ならしめた。

ABのメンバー入れ替えはその時々体調と行動内容を考え、隊長、AB隊リーダーの3人で協議して決めたが、基調として全員一度はA隊になるよう心掛けた。終始Aの基軸となつた志小田、高橋などは大変だつたと思う。

隊長原案の行動計画表はなかなか合理的で大きな修正をせずに合わせることが出来た。

平均斜度が21度、上に行くほど緩やかで技術的に厳しい登攀は何もなかつたがその分、距離が長く連日の降雪でラッセルの負担は大きかつた。アタック前にC3をつくれずA隊をより強いメンバー

で構成しC3建設装備一切を持って頂上アタックに向かわざるを得なかつた。アタック時の悪天、降雪を考慮に入れば登頂成功はかなりきわどいものであつた。しかしB隊にも強いメンバーを残せるほどゆとりがあつたことも事実で全員登頂の主体的条件はそろつていた。

6について 北京時間で朝7時には行動できる明るさになるのだがアタの頂上が太陽を遮ぎって寒く午後は10時過ぎまで明るいので行動開始は朝10時になつてしまつた。それでよかつたと思うがアタックだけは7時ころから動くべきであつた。オーバーシューズは必要であつた。8月10日に高橋が足指をしびれさせ、アタック後のビヴァークで隊長がやはり足指にかなりの凍傷を負つた。いずれもオーバーシューズを付けていなかつた。

7について 相模労山隊や北京大隊の話でA隊も北京大C1でザイルをデポ、全くアンザイレンしないで行動した。片足がズボット入る場所があつた。ヒドンクレパスらしかつた。何事も無かつたが少々軽率だつたかも知れない。ルートさえ選ばば氷の急斜面は無くフィックスはいらなかつた。

8について 30cmの竹棒に付けた蛍光赤旗は軽く持ち運びやすく見やすく効果的だつた。アタック後のB隊が降雪で埋まつていて見失つたと言つていたので棒の長さは50cmくらいがいいかもしれない。ラッセルを交替する度に立てたが降雪後のトレールの探索・追従、ホワイトアウト、ギリギリのアタック後の夕暮れとなつての下山を思えばもっと小まめに立てるべきだつた。悪天での登頂の成否を決めるものであつた。

9について ベースキャンプに入つてから酸素ボンベのテストをして2本の内1本のレギュレーターの不調に気づいた。事前にカシュガルでチェックすべきだつた。ガモウパックはBCに、酸素ボンベはC1に上げたが使うことが無かつた。O2パックはB隊が何本か使用した。

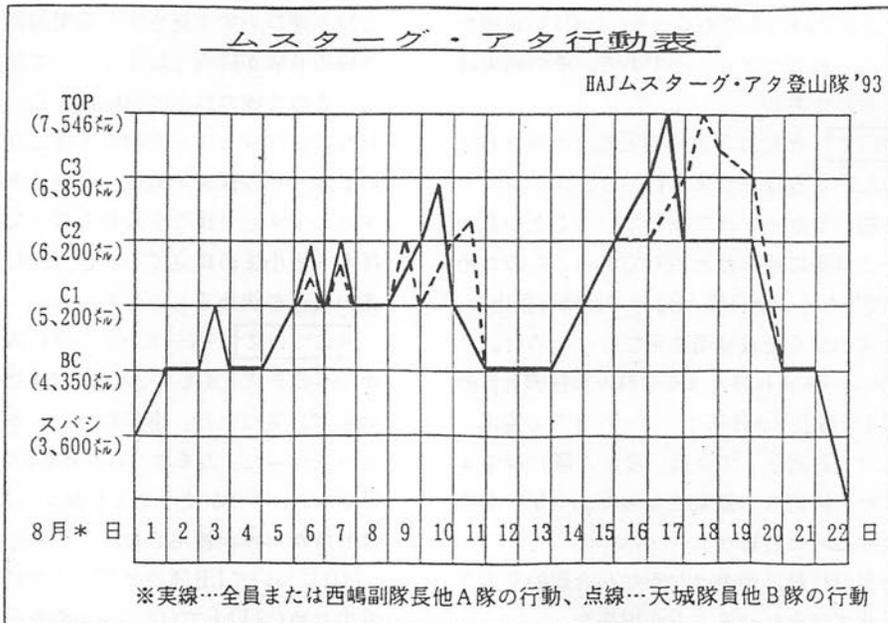
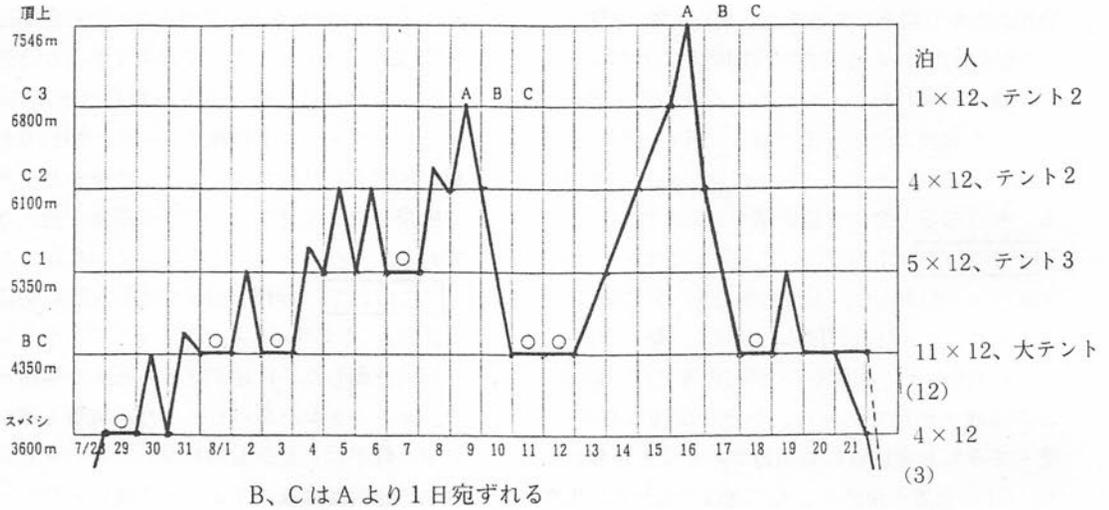
10について B隊のビヴァークによる極度の疲労のためC3以上でO2パックのカートリッジおよびルート上の赤旗を残置せざるをえなかつた。そのため残念ながらテイクインテイクアウトを完全には果たせなかつた。

終わりに よいメンバーと中国側のよいサポート、HAJの積み上げのお陰で天候に恵まれなかったにもかかわらず11人全員の登頂を果たしおおむね無事下山、帰国後も互いの友情が続いていることは何よりである。

次の機会に41度の南東稜を目指せばより価値ある登山が創られると思う。

(記・西嶋 鍊太郎)

ムスターグ・アタ行動計画表



4. 装 備

志小田隊員と個人装備及び団体装備を担当し不備な点や反省点が数多く上げられるが、隊長の指示及び経験豊富な隊員の臨機応変な対応により無事係として役目を終える事ができたことに感謝しつつ、装備及び燃料計画の実際と感想とを総括してみた。

(1) 装備リスト立案にあたって

過去の遠征リスト及びカシュガルHAJデポリストを参考にし品目を上げ、数回の集会において検討を重ね忌憚ない意見を参考にした。基本的に次の事項をもとにリスト作成を進めた。

- 1) 大陸内陸部、砂漠地帯の高温対策及び6000～7000mの高所における寒冷対策。
- 2) ルートは主に冰雪稜であることからルート工作の登攀用具は不必要とし、フィックスロープとスノーバー、赤布（標識用竹）に重点を置いた。
- 3) 火器類及び燃料についてはC2、C3の高所にEPIガス、C1、BCはガソリンコンロを利用することになった。
- 4) 個人装備は隊員個人任せにしリストを配布。リスト作成と平行して物品の調達確保も進めたが、殆どHAJデポに頼ることができ、国内準備品のうち蛍光赤布、標識用竹（約30～40cm）400本、BC用隊員テント4張り、コールマンガソリンコンロ（ピーク1）3台はアナカンで送り、トランシーバー4台（中国登録済み144MHz）、ガモウパック、医薬品、高度計は出発までに準備した。

(2) 装備の反省及び感想

それでは計画した装備が実際に使用されどうであったか、主なものについて上げてみる。

（装備一覧表は省略）

① テント

ベース以外のアタック用テントは全てカシュガル・デポ品を利用した。ベース用（ICI石井のオリジナルドーム型ファミリーテント）は新規に4張り購入した。高さがあり居住性は抜群だが、反面風に弱くポールが曲がったり入り口のファスナーや張り綱に破損したものが出た。食事用及び集合用テントとして合掌型タープを中央に設置し、両入り口をブルーシートで囲いプラポールで壁やテ-

ブルをこしらえ、一大仮設ハウスの大本営として活躍した。また、倉庫用としてツェルトを使用。BC用として大型中国製パオが現地購入可能であるとのこと、価格は不明。C1、C2はダンロップ2張り、エスパース1張り、倉庫用としてツェルト1張り、C3はエスパース2張りを使用した。高所用として日頃使い慣れたエスパースは信頼がおけ、設営のしやすさ及び居住性も良く高所で力を発揮した。破損箇所としては降雪のときの雪の重みでダンロップのフライシートの生地に破れやほころびが生じた。また、多少ポールの曲がりや折れが生じたテントもあった。

② 炊事用具と燃料

燃料用ガソリン20L及び10Lポリタンク2個はカシュガル購入。今回、新たに購入したコールマンのコンロは低温と赤ガソリン特有の鉛含有のため気化部分（ジェネレーター）の目詰まり発生。修理は困難で部品交換しか方法はない。次回使用する場合は気化部分の部品を多数用意しなければならないだろう。また余熱不要と明記されているが、高所ではプレヒートが必要である。デポ品のホエブス3台は使用可能だが、やはり粗悪燃料のため次回使用するときは気化部分のオーバーホールが必要である。

EPIのガスコンロはC2、C3の高所でも十分力を発揮した。BCはプロパンガスを使用しコンロ2台で食事を作ってもらったが、火力も充分。

プレッシャークッカーはC3まで使用、圧力釜がなければ調理に困難をきたす。BCの中国製大型クッカーは威力がある。

コッヘルセットは各キャンプに配置、食器及びホーローカップは個装とし移動時は必ず個人で持参した。BCには中国製ポットを2台置き、いつでも熱いお茶を飲めるようにしたが破損しやすい。また、スバシやBCには小川が流れブリキのバケツが重宝した。ともかく、BCにおける一般家庭用炊事道具はカシュガルで手に入ることを明記しておく。

③ 登攀用具関係

1 フィックス・ロープ

C1、C2間の懸垂氷河帯トラバースに1本(50m)使用。

2 赤布

標識用赤布はC1上部の懸垂氷河帯から山頂まで10数m間隔にべたはりした。多量の降雪に見まわれれば埋没してしまうが、蛍光布が遠方からでも確認でき、この時期には大変有効である。

3 スノバー

フィックス用として2本、その他はC2、C3のテント固定ペグとして使用。

④ 通信機材

トランシーバー(144MHz)4台を持参したが旧式で感度が悪く、第1次アタック時にC3と山頂間で連絡取れず、また、第2次アタック隊の標高約7,100mビバーク時にも相互連絡不能、C2に待機していたメンバーは不安をつのらせた。最新の小型省電力レシーバーの再考を願いたい。さらに頂上方向が定まっていることから、BCには指向性あ

る携帯用八木アンテナなどを次回から利用してみたい。

⑤ その他、次回デポ品利用者のために

- 1 背負子は荷揚げで活躍したがかなりいたんでいる。
- 2 接着剤はすべて劣化、現地調達不可能。
- 3 梱包用マーキングとして極太マジックが足りなくなっている。
- 4 ブルーシートはすべて破損し現地処分。

⑥ 個人装備

大変寒いという情報から耐寒用としてオーバーシューズは必需品であった。アタック時には各自羽毛服を着て行動することが多く、高所帽、羽毛ミトンが重宝であった。個人装備は各隊員まかせになり、シュラフやエアーマットの性能及び重量に多少の差が出た。また、テルモス一杯のお茶は何よりの御馳走であった。雪稜ルートのためヘルメット、ゼルプストは一度も利用せず。次回、同ルートをいく場合は必要なし。

(記・高橋 敏雄)

5. 食糧

1 基本計画

①スバシ、BCの食糧は現地(カシュガル)で調達し、副食、調味料、嗜好品、飲み物などを日本から持っていく。調理は中国側スタッフに協力をお願いする。

②C1以上の高所食は日本で調達し、4食分を1パックに梱包しておく。ほかに嗜好品、副食、飲み物などを、スペシャルボックスとして用意する。

③行動食は日本で準備し、1食ずつパックしておく。乾燥果物、ナッツなどをカシュガルで購入する。スバシ、BCを起点とする日の行動食は、ジャガイモ、揚げパンなど現地食とする。

④基本的にはアナカンで別送するが、漬物など日持ちのよくないものは、手持ちとする。(総重量約170kg)

高所食の基本献立とカシュガルでの購入リストを掲げておく(購入リストは別表)。

朝食

- A 和風雑炊(米、雑炊の素)、味噌汁
- B 洋風雑炊(米、シーチキン、固形スープ、FD玉葱)
- C ラーメン、餅
- D チャーハン(米、チャーハンの素)、味噌汁

夕食

- A カレーライス(米、レトルト・カレー)、スープ
- B 五目御飯(米、五目飯の素)、ポテトサラダ(ドライ・マッシュポテト)、味噌汁
- C 五目寿司(米、寿司の素)、海藻サラダ、味噌汁
- D 定食 1、鰯缶、とろろ芋(FD) 2、マーボー春雨 3、煮物(椎茸、高野豆腐)それぞれ味噌汁付き

2 結果とコメント

①カシュガルはオアシスの町、古くからの交易の地であり、人口30万人の大都市である。米、小麦粉、野菜、果物、卵等食糧は豊富であった。BCではキルギス人から羊を購入できる。したがって食事は豊かであった。

腹をこわす者はいたが、みんな順化がよかったこともあり、食欲、飲欲?ともに旺盛であった。BC食に関しては、質・量ともまず問題はなかったであろう。

②中国側スタッフもよく働いてくれて、おいしい食事を作ってくれた。ただ油で炒めた中華料理ばかりだと、いささかつらくなることもあるので、一品ぐらいは和風の物を作るようにした。切り干し大根、高野豆腐などの煮付け、ポテトサラダ、白菜、キャベツなどの一夜漬け、羊肉の味噌焼き等々。餅の磯辺焼きも好評だった。

③麴とイースト菌を持ち込み、BCで「どぶろく」を仕込んだ。ちょっと発酵が足りなかったけれどけっこう旨かったし、遊びとしても面白い。作り方は各自研究して下さい(こっそりと聞いてくだされば、お教えいたします)。

④高所食は、メニューのとおりだから、良くも悪くもない。みんなが体調がよく、食欲があったことが何よりであった。

C2まで圧力釜を担ぎ上げたため、上部でも米はおいしく炊けた。C3では米を使わず、ラーメンと餅を食べた。

⑤アルコールの管理については責任を押しつけあい、結局、隊長管理ということとなった。ウイスキーをペットボトルなどに詰め替え、大量に(たぶん10リットル以上)持ち込み、成田でブランデー等を仕入れ、カシュガルで缶ビールと白酎を購入した。日本酒も2升あったし、前述の自家製日本酒も2度仕込んだ。それでも多すぎはしなかった。いったい何をしに遠征にいったのだろう。呑ん兵衛はいやだねえ。

⑥スバシでは傍らを流れる小川でドジョウが大漁だった。ザルで簡単に掬える。柳川にしようかと思ったけれどゴボウがないので、塩と小麦粉をまぶして唐揚げにした。旨かった。

⑦野郎ばかりのパーティだったが、伊藤君がプリン、ゼリー、ホットケーキなどをせっせと作ってくれて、うるおいのある食卓となった。

(記・天城 敏彦)

カシュガル買い出しリスト

93.7.27

品名	単価	数量	金額	備考
米 (50 キログラム)	1.5 元	50 kg	75 元	
小麦粉 (25 キログラム)	1.2	25 kg	30	
粉ミルク (450 グラム)	6.8	4 袋	27.2	
缶ビール (350 ミリ)	3.8	72 本	273.6	
白酎 (500 ミリ)	18	4 本	72	
緑茶 (100 グラム)	3.8	15 袋	57	
〃 (250 グラム)	9	5 袋	45	
砂糖 (5 キログラム)	3.8	5 kg	19	
塩 (4 キログラム)	0.7	4 kg	2.8	
酢 (550 ミリ)	3.3	2 本	6.6	
醤油 (500 ミリ)	2.5	3 本	7.5	
磨香油 (400 グラム)	8.5	1 本	8.5	
調味料セット	13	1 袋	13	
山椒+しょうが	4.6	1 袋	4.6	
食用油 (15 キログラム)	4.5	15 kg	67.5	

品名	単価	数量	金額	備考
コンビーフ缶詰(豚,340グラム)	5.5	10個	55	
青豆(500グラム)	2.3	5個	11.5	
干し葡萄(1キログラム)	11	1kg	11	
あんず(種なし,2キログラム)	8	2kg	16	
あんずのたね(1キログラム)	17	1kg	17	
ザーサイ(100グラム)	0.6	20袋	12	
にんにく漬物(150グラム)	2	5袋	10	
四川泡菜(150グラム)	2	5袋	10	
麻ら味	5	2個	10	
いちごジャム(300グラム)	3.9	1個	3.9	
春雨(400グラム)	4	2袋	8	
卵(10元35個)	10/35	245個	70	
トマト	0.6	10kg	6	
茄子	0.5	15kg	7.5	
キャベツ	0.6	20kg	12	
ピーマン	1	10kg	10	日持ち悪い
じゃがいも	0.8	50kg	40	
いんげん	1	8kg	8	
うり	0.7	10kg	7	
きゅうり	1	10kg	10	
大根	1.8	5kg	9	
玉ねぎ	0.7	10kg	7	
にんにく	7	1束	7	
白菜	1	5kg	5	日持ち悪い
人参	1	7kg	7	
はみうり10個	1	50kg	50	
すいか10個	0.5	50kg	25	
りんご(20キログラム)	2.5	20kg	52	箱代2元
にがうり	1.5	3kg	4.5	
しょうが	4	1kg	4	
すもも	3	1kg	3	
ポット	27.1	2個	54.2	壊れやすい
洗剤(500グラム)	3.9	2個	7.8	
乾麺(400g*40タバ)	3	16kg	48	
プロパン	100	3本	300	
ガソリン	3.5	30kg	105	
布袋	5	5枚	25	

6. 医 療

(1) 出発にあたって

A、各隊員に下記の事を依頼する。

- ア. 健康診断の受診
- イ. 虫歯等、罹患疾患の加療、治療
- ウ. 肝炎が心配の場合は、その予防接種
- エ. 次の各項目についての調査票の提出
 - 性別・年齢・血液型・身長・体重・最高及び最低血圧値・脈拍・呼吸数・平時体温・既往症
- オ. 個人装備として次の品目を持参して貰う
 - 持病治療薬品・体温計・爪切り
- カ. 遠征中における、個人別自己健康管理表の記入（出発日から帰国まで毎日）
 - 項目……体温・脈拍・呼吸数・睡眠時間（以上数値を記入）
 - 不眠・頭痛或は頭重・発熱と寒け
 - 喉痛・咳及び喀痰・鼻水と鼻詰り
 - むくみ・耳鳴り・めまい・口渇き
 - 動悸や息苦しさ・視力減退・下痢
 - 吐気や嘔吐・胃痛及び腹痛・便秘
 - 眼痛・外傷や捻挫・疲労倦怠感
 - 排尿異常・食欲不振
 - （以上は該当時に印を記入）
- キ. 遠征中に実施する血圧値測定調査の協力

B、医療係として行った事

- ア. 個人別自己健康管理表の作成と配布
- イ. 個人別健康点検表の作成
 - これは遠征時における各隊員の健康度を観察するのが目的で、下記の項目を設け、各隊員から提出して貰った調査票の数値をこの点検表に転記して、これを基本に毎日の各隊員の健康を点検する為に作成した。
 - 月日・健康度（良・普・悪）・愁訴・症状並びに疾患名・投与薬剤及び処置 備考・血圧値（2～3回測定予定）
- ウ. 遠征携帯医療装備品のリスト作成
 - a、カシュガルにデポしてある医療関係装備品の中から必用品の選出。
 - b、不足品の国内調達とカシュガル発送

(2) 遠征中の活動

- A、個人別健康点検表に基づく健康チェック
- B、血圧値測定……2回
- C、各隊員からの訴えに基づいての投薬

(3) 遠征時における医療活動の実際

私にとって海外遠征そのものが初経験であっただけに、全てが戸惑いの連続であった。そんな中で医療係を担当させて貰った事は、日常薬種商として薬店を経営する身であったから、その分負担が軽かったと感じる。

一つ困ったのはカシュガルにデポしてあった医療関係の装備品が余りにも多く、しかも医師が使用する注射薬などが含まれていて、それらを使用出来ない者には、その中から必要品を捜し出すのは随分と時間的に苦勞であった。

今回の遠征に参加した11名は全員が体力的に優れていて、細かく言えば夫々に何らかの疾患なり、病的愁訴はあったものの、一人として脱落者は無く全員が登頂、医療係として特に心配する所が無かったのは幸いであった。

次に時間の経過に沿って遠征時の隊員の健康状態を列記する。

まず、出発当初から若いT・N隊員とH・I隊員が風邪を引き、7月末まで体調を崩していた。これは環境が変わった事で悪化したものと思われる。しかし、その後の二人は流石に若いだけに帰国するまで特別の訴えが無かったのは見事である。

北京からウルムチ、カシュガル、スバシと移動して行く内に出て来たのが下痢や胃痛などの胃腸障害。これは数名から訴えがあったが、どれも軽症で大事に至るようなものは無かった。

スバシから最初にB・C入りした時には流石に全員が頭痛や吐き気、或いは息苦しさや動悸など明らかに高度障害と思われる症状を呈した。特に強靱なT・T隊員が相当のパテを見せていたのが気に掛かった。しかし、彼もその時だけで、それ以降はすっかり順応して素晴らしい活躍ぶりを見せて呉れた。

全員の高度順応はスムーズに運び、CⅠ、CⅡと高度を上げるに従って、その都度誰がしかに何らかの障害が出てはいたが、脱落する者はもとより、特別の処置を施す必要は無かった。ただ、その高度障害の頭痛を押さえる鎮痛薬を服用する者は何名かいたが、利尿薬を飲んだのがY・S隊員と私の二名だけだったのが心残りである。結果で言えば、別段支障が無かったものの、少し変だと思ったらすぐに利尿薬を飲んでみた私の経験からすると、早目に服用する方が良い結果が得られるように思える。

頂上アタックで、B隊が下山時フォーストビパークを余儀なくされ、酒井隊長が両足に凍傷を負い、私も軽い痺れの有る傷を指先に受けた。更に先発A隊の西嶋副隊長も軽い凍傷を顔に負った。この時、西嶋副隊長や私は薬の必要は無かったが、薬の必要だった酒井隊長の治療にT・N隊員が持参の薬が使用できた事は有り難かった。しかし、医療係として、その薬の存在する知らなかった事は大いに反省するところである。

その他にあった訴えとしてはH・K隊員の湿疹やY・T隊員の膝痛であるが、これらも別段登頂には大きな障害にはならなかったと思う。

B・Cキャンプでは個人で日常の健康をチェックして貰う意味で、栄養剤のポボンSと胃腸薬の正露丸をメス TENT に常置したが、これを服用する者が多く、最終的には栄養剤が不足してしまった。この辺りは今後考えねばならない問題だろう。

(4) 健康点検表と健康自己管理表の分析から

ア. 血圧の測定は7月29日のスパシと8月4日のB・Cでの2回実施した。

スパシでの測定で平時より血圧値が高く出たのは4名で、B・Cでは3名である。その内、2度共高かったのがH・K隊員とY・H隊員で二人とも初遠征だったから、その影響があったかもしれない。しかし、他の隊員も全体的にも少し高めではあったが、分析からは高度障害との関係は結びつかなかった。

イ. 健康点検表の分析

風邪を引いた者……4名

2名はB・C入り前

下痢を起こした者……7名

膝痛を起こした者……2名

便秘を起こした者……2名

むくみの出た者……4名

凍傷を負った者……3名

隊長は帰国後入院

便秘を起こした者……2名

その他、湿疹と舌炎が各1名

※ 隊長の凍傷を除いては特に重症と言える程のものは無く、しかも殆どが平時の生活の中でも見られるもので、頂上アタックには支障なかったものと思われる。

※ 特筆すべきは、帰国後数名に、爪に横筋が入り表面が凸凹になった事。これは高度との関係が窺われるが確証は無い。

ウ. 健康自己管理表の分析

睡眠は全員が大旨、十分

例外はB隊のフォーストビパーク時
頭痛はほぼ全員が経験

高度障害と風邪の両方が有る

むくみについての自己認識が少ない

軽いものは分かりにくいようである

疲労感を訴える者が多かった

高度の影響によると思われる

(5) オーツーパックの使用について

B隊のY・H隊員が登頂後のCⅢで一本使用

これはフォーストビパーク時に風邪を引き、疲労と重なって動けなくなった為に使用した。効果は良好であったと思う。

(6) 携行医薬品と医療具

抗生物質・抗菌剤・風邪薬・解熱鎮痛剤

胃腸薬・止瀉薬・便秘薬・利尿薬・点眼剤

睡眠剤・ビタミン剤・抗ヒスタミン剤

痔疾用剤・解毒剤・消毒薬・外傷剤・口腔剤

シップ薬・包帯類・ガーゼ・テープ類

カット綿・治療用具・体温計・血圧計他数種

(記・樋上 嘉秀)

携行医薬品等使用状況リスト

No.1

[1] 医薬品

薬効	医薬品名	携行量	使用料
抗生物質	ケフラール末	250mg × 60包	未使用
	ケフラール錠	20錠 250mg	ケフレックス 使用
抗菌剤	バクタ錠	40錠 400mg	未使用
	タリビット	100mg × 20錠 6日分	未使用
風邪薬	PL顆粒	1g × 188包・47日分	25包使用
	新ノバボン咳止め	40カプセル 約10日分	未使用
	アストミン	10mg × 90錠・30日分	未使用
	パイロンL24	35カプセル 約25日分	6カプセル使用
	トローチ	30錠	30錠使用
鎮痛解熱剤	セデスG	1g × 60包・20日分	20包使用
	ロキソニン	60mg × 60錠・30回分	20錠使用
	セダール	102錠 17日分	15錠使用
	インダシン坐剤	25mg × 20個 10日分	未使用 西嶋分使用
胃腸薬	セルベックス	50mg × 38カプセル 13日分	未使用
	ブスコパン	10mg × 100錠	10錠使用
	タナベ胃腸薬	100錠 33日分	未使用
	ミヤリサン錠	360錠 40日分	約120錠使用
	タフマック	66カプセル 約22日分	2カプセル使用
	正露丸	100粒 × 4個	1瓶使用
	ガスター	20mg × 28錠 14日分	未使用
止瀉薬	ロベミン	1mg × 80カプセル 40日分	10カプセル使用
便秘薬	プルセニド	20錠 10~20日分	未使用
抗ヒスタミン剤	アバピロン錠	20錠 × 2個 20日分	10錠使用

携行医薬品等使用状況リスト

No.2

[1] 医薬品

薬効	医薬品名	携行量	使用料
利尿剤	ダイアモックス	250mg × 100錠 50日分	10錠使用
	ラシックス	40mg × 100錠 50日分	未使用
睡眠剤	ハルシオン	0.25mg × 10錠	未使用
	ソラナックス	0.4mg × 30錠	30錠使用
点眼剤	フラビタン点眼液	5ml × 2本	未使用
	ベノキシール	20ml × 2本	未使用
	バクシダール点眼液	5ml × 1本	未使用
	アスパラL目薬	11本	個人に渡す
ビタミン剤	ポボンS	180錠 90日分	180錠使用
	アスパラL	100錠 33日分	20錠使用
痔疾用剤	ヂナンコーハイ	2.5g × 20個	未使用
	プリザコーチゾン坐薬	10個	未使用
解毒剤	グルファミンC	20錠 × 2個 40日分	未使用
外用剤	イソジン	250ml × 1本	未使用
	ソルバミン	60ml × 3本	未使用
	シップ薬	30枚	未使用
	イタドリン液	20ml × 3個	1個使用
	ゲンタシン軟膏	10g × 4本	2本使用
	メモ	30g × 2個	全使用
	リンデロンV軟膏	5g × 3本	未使用
	きずテープ	3サイズ計304枚	10数枚使用
	ケナログ	2g × 4個	未使用

携行医薬品等使用状況リスト

No.3

[2] 医療用具

品名		携行量	使用量
三角巾		5枚	未使用
ネット包帯	ロール20m	1本	未使用
	手首用	1本	未使用
	足首用	1本	未使用
	肘用	1本	未使用
	指用	2本	未使用
	膝用	2本	未使用
	手甲用	2本	未使用
	その他用	2本	未使用
伸縮包帯		5本	未使用
ガーゼ包帯		2本	未使用
ガーゼ		50枚	未使用
テープ	紙製	3本	未使用
	布製	3本	未使用
	伸縮性	3本	未使用
綿棒		120本	使用・粉出含
ピンセット		2本	使用
ハサミ		2本	使用
テーピングテープ		2巻	1巻使用
体温計（電子）		1本	使用
血圧計		1台	使用
カット綿			未使用

7. 気 象

気 象 記 録 (場所・天候・気温)

日	場所・天候・気温 (8:00)	日	場所・天候・気温 (8:00)
7/27	カシュガル・晴・14° C	8/ 9	C1・晴時々曇・-5° C
28	カシュガル・晴・14° C	10	C2・雪後晴・-10° C
29	スバシ・晴後雷雨・13° C	11	C1・晴時々曇
30	スバシ・晴・10° C	12	BC・快晴
31	スバシ・曇後晴・6° C	13	BC・快晴
8/ 1	スバシ・晴	14	BC・快晴
2	BC・晴・6° C	15	C1・快晴
3	BC・曇夜雪・3° C	16	C2・快晴・-12° C
4	BC・晴・2° C	17	C3・晴・-14° C (アタック)
5	BC・小雪・1° C	18	C2・晴・-10° C
6	C1・雪後晴・-3° C	19	C2・雪
7	C1・晴時々雪・-3° C	20	C2・快晴・-20° C
8	C1・晴・0° C	21	BC・快晴・0° C

・各キャンプの標高

BC	4350m
C1	5200m
C2	6200m
C3	6850m

寒気については、前年の登山隊からの情報どおりにとっても厳しかった。尾根上は南からの風が強く特にC2より上部は一段と寒く感じた。

(記・中島 俊弥)

8. 環境

登山の目的の一つであった“テイクイン・テイクアウトの徹底”はほぼ達成できた。収集、焼却を小まめに行うことによって得られた結果である。

上部キャンプのゴミは適宜BCに降ろして処分した。BCにはゴミ捨て場らしい大きな穴があり、過去の隊はそこでゴミを燃やしたのだろう。それでもビンやカンなどの不燃物は残ってしまっていた。あれはどうするのだろうか……。

我々は前年のHAJ隊に習って、一斗缶と火ばしを用いてゴミを燃やした。火を焚いていると、隊員は勿論、現地の子供達も集まってきて談笑とな

るので、この係はまったく苦にならない。

ビンとカンは分別して箱に詰めてカシュガルへ持ち帰った。カンはペチャカンでつぶしたが、ガスカートリッジだけはきれいにつぶれなかった。今後のためにも、何か良い方法はないだろうか。

生ゴミはBC近くに穴を掘って埋めた。しかし現地で購入した羊の肉や骨などの残飯は、犬に掘り起こされてしまった。肉の処分、保存については犬に十分気をつけよう。中には、肉が遭難してしまった登山隊もあったと聞いている。

(記・中島 俊弥)

9. 記録

記録係りの仕事は大別すると次の3点である。

- ① 出発前、準備・打ち合せ事項の記録、総括、連絡
- ② 遠征期間中の全般を通じての記録、撮影
- ③ 帰国後の報告書の編集、作成

この3点を押さえ、ムスターグ・アタという遠征の性格から次のような方針を立て、了承を得た。

①については、全て係りで行き、確認及び不参加者への連絡という面から、要点を通信として全隊員に送付する。これについては特に問題なく行えたと思える(資料のムスターグ・アタ通信参照)。

②については、以下の4点を基本とした。

*メモ程度でも、全員に全日程を通じての記録をお願いする。

班別行動の際にはそれぞれに詳細な記録をお願いする。

*隊務については各係りで記録をお願いする。

*写真についてはアタック時を含めて特に規定を設けず、自由とする。全体の流れは係りで撮影する。

*ビデオ・8mmは撮影料が高いので、隊としては持参しない。

以上のことで、現地でも特に大きな問題はなかったと考えるが、次の2点が指摘できる。

○今回は、大きく体調を崩す事なく、係りと

して動け、記録をとれたが、係りが不調になった時のことなどを考え、今回のように隊員の多い隊では、最初から記録係りを複数置いていたほうが良いと考える。

○個人によって、大部時程が異なるので、報告書などに記載する時程、コースタイムをどうするかという問題が考えられる。

③については、登頂の可否に関係なく発行する。その際、隊の性格から自分たちの思い出としてという要素を重視する。

報告書については、帰国後、遅くとも1年以内には発行する予定であったが、係りの私的事情などがあり、大変遅くなってしまった。が、なかなか発行できない一因として、原稿の提出状況の悪さということが挙げられる。発行の早さということだけを考えれば、係りで一括して原稿の大半を書いてしまうということも考えられるが、そうすると、内容上の問題や、係りの負担が大きくなり過ぎてしまうという問題が出てくる。報告書については、最初からそう簡単には出来ぬ物と考えていたほうがいいのかもわからない。

(記・谷田川 武)

ムスターグ・アタ登山史への試み

酒井国光

「氷山の父」と言われるムスターグ・アタは、古来からシルクロードを往来する旅人から親しまれてきた山だ。そして、現在では、毎年多くの登山隊で賑わっている、極めてポピュラーな山に成長している。その成長過程を理解すべく、手持ちのいくつかの文献に当たっているが、ここでは登山年表として羅列したものを掲載する。

年表の作成は、当日本ヒマラヤ協会発行の『中国登山の手引(第二版)』の「中国登山の主要年譜」をベースとし、それを各種文献で補った。したがって、年表中の文献欄空白のものは、上記『手引』がほとんどである。

今後、年表の充実と所期の登山史の解明を行っていきたい。

ムスターグ・アタ登山年表

(含むコングール、チャクラギール)

年	パーティ	登山活動	文献等
1300年前	三蔵法師・玄奘	付近を通る。(ムスターグ・アタは玄奘のもっとも親しんだ山)	
700年前	マルコ・ポーロ	パミール越え	
1894年 4月	スウェン・ヘディン	ムスターグ・アタを試登。チュガタイ峠(4730m)を越え、小カラ・クリ湖から南下して西面から登攀するも6300m(OR.6270)で断念。	中国登山の手引第2版 ヒマラヤの高峰第1巻
1900年 7月	オーレル・スタイン	ムスターグ・アタ北峰北稜を6,000m(OR.6100)まで試登。及びカシュガル山脈の測量を行う。	
1902年	大谷探検隊	付近を通る。	
1913年	スタイン	コングール東部のカラタッシュ谷に入る。	
1922年 1924年	クラームント・P・スクライン	カシュガルの英国総領事任中、4回コングール山群を踏査。	
1940年～ 1942年 1946年～	E・シプトン	カシュガル総領事	
1947年 8月	E・シプトン(夫妻) H・ティルマン ギャルツェン	ムスターグ・アタをヤム・ブラク氷河南側面から試登し、7,300m(OR.7400)で断念。	ヒマラヤの高峰

1947年	E・シプトン H・ティルマン	チャクラギール (6,730m) を北面から偵察を行う。	
1948年	E・シプトン H・ティルマン	チャクラギールの南西カールから取り付くも登頂断念。(北へのびる山稜)	岳人400号
1956年	中・ソ合同隊 (エフゲニー・ベレーッキ隊長、副隊長クジミン中国側副隊長史占春)	<u>ムスターグ・アタ初登頂</u> 隊員はソ連側19名、中国側12名。7月31日に隊長、副隊長を含む31名全員登頂。	中国登山ハンドブック ヒマラヤの高峰
1956年	上記合同隊	ソ連側副隊長クジミンがリーダーとなってコンゲール・チュービェ (7,595m) にソ連側6中国側2の計8名全員が、8月16日に初登頂。	中国登山ハンドブック ヒマラヤの高峰
1959年	中国男女混成登山隊 (許競隊長ら34名)	<u>ムスターグ・アタ第2登</u> 、7月7日全員登頂、うち女子隊員8名	中国登山ハンドブック
1959年 ～ 1960年	中国	<u>ムスターグ・アタ</u> とコンゲールで大掛かりな氷河調査が行われた。	中国登山ハンドブック
1961年	中国女性登山隊 (袁揚隊長ら5名)	コンゲール・チュービェに6月17日に2名が第2登。登頂後、ピバークとなり、翌日、シーラオ隊員は吹雪にまかれて疲労凍死。	中国の高峰
1970年		【中巴公路の開通】	
1979年	陳舜臣ら	【中巴公路を車で走踏】	
1980年	NHK シルクロード取材班	【シルクロードの取材】	
1980年	京都カラコルムクラブ (塚本圭一隊長ら6名)	コンゲール (7,719m)、翌年の本番に備えて偵察に入る。	
1980年	イギリス隊 (M.ウォード隊長ら3名) 55歳	コンゲールの偵察に入り、6,200mと5,400mの無名峰に登頂した。 C.ボニントン (46)、アラン・ウス (28) 連絡官劉大義	岳人400号 山溪山岳年鑑'81
1980年	アメリカ隊 (N.ジレット隊長ら6名)	<u>ムスターグ・アタ</u> 、西面からスキーを使用して7月21日に3名が登頂し、頂上からスキー滑降を行う。登頂者ネッド・ジレット、ゲイラン・ラウエル、ジャネット・レイノルズ	山岳年鑑'81
1981年	イギリス隊 (M.ウォード隊長ら10名)	コンゲール、5月～7月にかけて南面から挑み、7月12日に4名が初登頂。北東峰も往復。ボニントン、ラウス、ボードマン、カスター	山岳年鑑'82 岩と雪89
※【7000以上の未登峰のアルパインスタイル初登頂】			

1981年	京都カラコルムクラブ (土森譲隊長ら8名)	ムスターグ・アタ、コンゲール峰隊の高所順 応登山、西面から挑み6月26日3人、29日 4人が登頂。嶋、寺西、松見の3名は頂上か らスキー滑降。	山岳年鑑'82
1981年	京都カラコルムクラブ (高田直樹隊長ら21 名)	コンゲール、7月~8月にかけて北面から東 稜と北稜に挑んだが、東稜隊は5,400mで断 念。北稜隊は3名(嶋、寺西、松見)が行方 不明となる。	岩と雪85 岳人81年11月号
1981年	防衛大学隊(川上隆 隊長ら14名)	コンゲール・チュービエ、夏に挑み8月18日 2名登頂。登頂者、山口陽一郎、古賀重行	
1981年	川崎教員隊(坂原忠 清隊長ら4名)	夏に北西稜から挑みアタ北峰(7,427m)に 登頂した。8月7日、14日にそれぞれ2名ず つ登頂。登頂者、坂原、松井公治、林田孝夫、 高橋純一郎	岳人413号 山岳77 「シルクロードの 白き神へ」
1981年	カナダ・アメリカ合 同隊(J.アマット隊 長)	ムスターグ・アタ、ポスト期(9月)にスキー を使って挑み、3隊員が16日、主峰に登頂。 登頂者、ロイド・ギャラガー、バット・モロ ステファン・ベズルッカ	
1982年	アメリカ隊(R.デ イツ隊長)	コンゲール、夏に南西面の初登ルートに挑ん だが失敗した。	山岳年鑑'83
1982年	オーストリア隊(M. シュムック隊長)	ムスターグ・アタ、7月17日に5名が登頂。	山岳年鑑'83
1982年	アメリカコロラド隊	ムスターグ・アタ、7月28日に2名が登頂。 下山時に1名遭難(ロジャー・カークパトリ ック)	山岳年鑑'83
1982年	アメリカ・マウンテ ン・トラベル隊(J.ク リア隊長ら11名) 4か国11名の混成隊	ムスターグ・アタ、8月17日5名、18日3名 の8名が登頂。 18日の1名は両足義足の登山家、ノーマン・ クラウチャー(英)	山岳年鑑'83
1982年	北沢登山クラブ隊 (矢葦敬造隊長ら5 名)	ムスターグ・アタ、ポスト期に南西稜に挑み、 10月15日に2名登頂。 登山者、鈴木章平、高木裕	山岳年鑑'83
1982年	オーストリア隊(M. シュムック隊長ら 11名)	ムスターグ・アタ、西南西面の新ルートから アルパイン・スタイルで5名登頂(7月17日) 登山者、マルクル・シュムック、ヘルムート・ ヴァグナー、エーリヒ・ホフヴィンマー	山岳年鑑'84
1983年	アメリカ隊(イア ン・ウェード隊長ら 4名)	コンゲール、北面から挑んだが断念。	
1984年	イタリア・フランス 合同隊(V.アイベル ト隊長ら20名)	ムスターグ・アタ、8月19日、20日に17名 が登頂し、スキー滑降を行った。 イタリア側(V.アルベルトら8名) フランス側(J.クロードら9名)	山岳年鑑'85 山岳年鑑'86補

1985年	アメリカ隊（マイケルジャーディンら6名、日本人笹生博夫）	<u>ムスターグ・アタ</u> 6月27日、6300mまでで断念	山岳年鑑'86
1986年	西域登山研究会隊（佐藤文明隊長ら7名）	<u>ムスターグ・アタ</u> を通常ルートから8月13日2名、16日5名（女性）が登頂した。 菅沼弘子(34)、大高珠美(28)、小林友美(27) 牧野総治郎(32)、西村信子(27)、三原洋子(45)	山岳年鑑'87 ヒマラヤ225号
1986年	アメリカ隊（ケイティ・ギール隊長ら8名の女性隊）	コンゲールにイギリス・ルートより入ったが6,400mで断念した。	
1987年	国際隊（マイケル・ジャンディン隊長ら9名） 日米英仏ベネズエラ	<u>ムスターグ・アタ</u> に8月8日、12日に全員が登頂した。スキー使用 笹生博夫。尾崎啓一	山岳年鑑'88
1988年	フランス隊（ドミニク・マルシャル隊長ら） フランス公募隊	<u>ムスターグ・アタ</u> に4月20日、23日に9名が登頂した。	山岳年鑑'89
1988年	フランス隊	<u>ムスターグ・アタ</u> に4名（男2、女2）が7月16日登頂した。	山岳年鑑'89
1987年	国際隊（エリック・ドカン隊長ら） フランスイタリヤ隊 パキスタンより入山	<u>ムスターグ・アタ</u> 、8月16日と22日に7名が登頂した。マルク・ショーヴェ、パオロ・アンリ、ピエール・ガイヨ、フランソワーズ・ヴァルテル、アンドレ・ルケーク、ドカン。 ドカン、ショーベ	山岳年鑑'89
1987年	オーストリア隊（ブルーノ・パウマン隊長ら5名）	<u>ムスターグ・アタ</u> 北峰に9月全員が登頂した。 ホルスト・シンデルバッヒャー、パウマン、ハンス・ザウゼンク、トーマス・ホイス、マンフレート・ヴィドラ	山岳年鑑'89
1988年	スコットランド隊 ジェフ・コウイン隊長	シワクテ2峰（6150m）西壁を登り8月8日登頂、コウイン、ハイミシュ・アーヴィン 他の5300m級のピーク3つに登る。	山岳年鑑'89
【スコットランド山岳会創立100周年記念】			
1988年	フランス山岳会パリ支部隊	<u>ムスターグ・アタ</u> 8月18日3名、20日4名の7名が登頂。スキー使用 J.M.ルーフィエ、C.トマン、M.トマン、F.カーレ、J-B.カーレ、G.フォーリ、J.マネス	山岳年鑑'89
1988年	明治学院大学隊（平野操隊長ら4名）	チャクラギール、南西稜から9月1日3名が初登頂に成功。5650mのCOLのC2よりアタック、8月31日6400mでビパーク 平野操(38)、蜂巢稔(21)、中山健次(19)	山岳年鑑'89 山と溪谷89年1月号
1989年	宮崎県山岳連盟隊（鳥井修一隊長ら10名）	コンゲール・チュベ、6,510mで断念した。	

1989年	京都カラコルムクラブ (安田越郎隊長ら9名)	コンゲール、北稜に挑み7月11日に9名全員が登頂し、1981年の雪辱を果たした。	
1989年	京都大学隊 (松沢哲郎隊長ら7名)	<u>ムスターグ・アタ</u> 、5月30日と31日に5名が登頂した。	
1989年	台湾隊(葵楓彬隊長ら13名)	<u>ムスターグ・アタ</u> 、7月26日に6名が登頂した。	
1989年	篠崎純一	<u>ムスターグ・アタ</u> 、地元新疆の2名とパーティを組んで8月18日単独で登頂した。	
1989年	フランス人2名	<u>ムスターグ・アタ</u> 、篠崎の後に登頂成功。	
1989年	フランスの公募隊	<u>ムスターグ・アタ</u> 、2名も8月18日登頂に成功した。	
1989年	スペインの公募隊	<u>ムスターグ・アタ</u> 、7月26日1名、27日5名、28日11名が登頂した。	
1990年	鶴岡ヒマラヤ研究会隊 (稲泉真彦隊長ら8名)	<u>ムスターグ・アタ</u> 、夏に入山したが登頂を断念した。(6200mまで) アイスフォール帯フィックス	絲綢之路の白き峰
1991年	長野県海外登山研究会帯 (隊長前沢昌弘7名)	<u>ムスターグ・アタ</u> 、8月6日1名、7日2名が登頂。松原繁(49)スキー使用 伊藤康徳(41)、伊藤正(26)	山岳年鑑'92 【国際登山祭参加】
1991年	JAC隊(相馬勉隊長ら6名)	<u>ムスターグ・アタ</u> 、8月12日2名が登頂した。 石川慶英(24)、佐々木毅彦(23) C3(6400m)発10:30~頂上17:30、スキー使用	山岳年鑑'92 山No.558
1991年	福岡県岳連隊(植松満男隊長ら19名) 諸岡久四郎総隊長	<u>ムスターグ・アタ</u> 、8月17日6名、21日6名が登頂した。 C3(6500m)発9:30~頂上19:30	山岳年鑑'92
1991年	スペイン隊(カルロス・ソリア隊長ら16名)	<u>ムスターグ・アタ</u> 、8月20日2名、22日1名、23日2名が登頂した。 自転車にてパキスタンから入る。	山岳年鑑'92
1991年	韓国隊(キム・チンギ隊長ら9名)	<u>ムスターグ・アタ</u> 、2名が登頂した。 C2(6200m)よりアタック、帰路7100mでビバーク。	山岳年鑑'92
1992年	HAIJ隊(山森欣一隊長ら11名)	<u>ムスターグ・アタ</u> 8月10日7000mまでで断念	ヒマラヤ257号 【クラウン峰の高所順応のための登山】
1993年	HAIJ隊(酒井国光隊長ら11名)	<u>ムスターグ・アタ</u> 、8月17日5名、18日6名の11名全員が登頂。18日の6名は帰路7100mでビバーク。 酒井国光、西嶋鍊太郎、樋上嘉秀、天城敏彦、谷田川武、金森博之、高橋敏雄、志小田美弘、池上邦彦、中島俊弥、伊藤英世	ヒマラヤ266号

ウイグルとカシュガルの概要

谷田川 武

*新疆ウイグル自治区について

中国最西部に位置する中国最大の自治区が新疆ウイグル自治区であり、その名は居住する最多の少数民族ウイグル族に起因する。面積160万k㎡、その広大な自治区を南北に分断するのが有名な天山山脈である。同山脈は、数列の平行した褶曲・断層山脈からなり、山間の多くは陥没してトゥルファン盆地やイリ盆地を形成し、また、旧ソ連国境上の主峰ポベータ（トムール7,439m）をはじめとして、ウルムチの東方60kmという近さに聳えるボゴタ（5,545m）などを新疆に有し、旧ソ連ではギルギス・タジク共和国などへとまたがり、全長2,400kmにも及ぶ大山脈を形成している。その山頂部には広大な山岳氷河が発達し、東方の山系には針葉樹林帯も見られる。

新疆では、同山脈の北側は北疆と呼ばれ、その中心を成すのがジュンガル盆地である。台湾の2倍もの面積の中国第2の砂漠グルバンテュンギュトや、ブルチン砂漠が広がり、乾燥に強いラクダガヤやヨモギ類が砂丘に植生している。南部にあるオアシスは解放後入植の進んだところである。

一方、同山脈の南側は南疆と呼ばれ、その中心を成すのがタリム盆地であり、中国第一の砂漠タクラマカンをもその胸中に抱く。タクラマカン砂漠は高さ50～300mにも達する流動砂丘が85%を占め、その面積は日本全土の約90%にあたる。年降水量15～40mmだが、砂漠周縁には出口を持たない内陸水系のタリム川やホータン川などが流れ、オアシスの重要な用水供給源となっている。

そして、南疆の南端、即ち自治区の南縁を成すのが崑崙山脈である。崑崙山脈は全長2,500kmに及ぶアジア最長の褶曲山脈で、その北西部はパミール高原の東端を形成し、ここにコンゲール（7,719m）やアタなどの高峰が集中している。これらの高峰は強い偏西風を遮る障壁の役割をしているため、東麓部の乾燥化の一因ともなっている。

以上が、自治区の自然概要であるが、その大半を乾燥地帯が占め、更に年々砂漠化も進んでいる。このため住民は長年にわたり、植林や独特の水利開発によって厳しい自然と対峙してきた。

次に産業について概要を見てみたい。水利で特色あるのは坎児井で、これはイランのカナートやアフガニスタンのカレーズに似た地下溝で、長いものは30kmにも及ぶ。また、解放後は、人民解放軍などの入植による大規模な開発も行われてきている。これらの取組により、農業生産面で新疆全体では春小麦、南疆ではトウモロコシ、冬小麦を中心とした生産が増加している他、特産品のハミ瓜や綿の栽培も進みつつある。しかし、土壌のアルカリ化は大きな問題で、開墾が進む一方で、年1,000k㎡のペースで砂漠化が進んでいる。

牧畜は農業生産額の20%を占め、主にカザフ、キルギスなどの少数民族がその担い手となり、天山、崑崙などの高山の草原を夏、山麓の谷地や砂漠性の草原を冬の牧場とした移牧が一般的に行われている。

工業面では、絨毯、皮革、玉などの伝統的手工業とウルムチ、カシュガルなど主要都市の農業機械、セメント工業が従来のものであったが、1955年以降、カラマイやマイタグの油田採掘が進み、化学工業の発展に力が注がれてきている。

*ウイグル族について

ウイグル族は少数民族中4番目に多く、1990年段階で約720万人を数える。トルコ語系のウイグル語を話し、ウイグルとは団結、連合の意味だそう。いうまでもなく、新疆ウイグル自治区に一番多く、人口の約3分の2を占める。しかし、ウイグルという言葉が正式（公的）に使用されるようになったのは、意外に新しく、1921年以降のことだという。ロシア革命後、少数民族の会議が西トルキスタンで開催された際、東トルキスタン出身

者が「自分らに民族名称がない」ということで、古名の中から「ウイグル」という名を選び直したのがその始まりという。それまでは単にムスリムとかチュルクとかいい、区別する場合にはカシュガルリックとかホタンリックとか、オアシスの名前と呼び分けていたという。まず、旧ソ連領で使われ出し、新疆では30年代以降使われるようになったという。

彼らの歴史は紀元前3世紀頃、旧ソ連のバイカル湖やバルハシ湖付近に居住していたトルコ系遊牧民丁零（丁靈）に始まるといわれる。匈奴に圧迫されつつも幾つかの部族に別れて存続し、唐代の745年には突厥の内紛に乗じてモンゴル高原を中心としてウイグル国（回紇汗国）を建国している。しかし、840年に国は滅び、人々は甘粛省やトルファン盆地などに分散する。トルファン盆地に居住した彼らは天山南方にも勢力を伸ばし、やがて山脈の南北にまたがる一大王国西ウイグル国を建国する。彼らは、原住民のアーリア系住民と混血し、当初はマニ教や景教、後には大乘仏教を信仰していたが、960年、新疆西部にあったトルコ系のカラハン朝がイスラム教に改宗したことを契機として、イスラム教に改信していく。いうまでもなく、現在、彼らはイスラム教を信仰している。

彼らの顔立ち、漢族とははっきりと違う。男性は子供の頃はあまり違いは感じられないが、成長するにしたがって、彫りが深く鼻が高くなってくる。中年以上になると口髭や顎髭をたくわえる。服装は人民帽に似た帽子シェプリカや、刺繍のほどこされた四角形の帽子ドッパ（ドッパー）を被り、町によってそのデザインが異なる。女性の方は子供の時から顔立ちに違いがあり、何よりカラフルなネッカチーフを被り（ドッパを被っている子もいる）、カラフルな花模様や矢がすり模様のワンピースを着ているので一目見て分かる。適齢期になると、なかなかのお洒落で、長い三ツ編みをし、必ずピアスをしている。混血化の故か、はっとさせられる美人が多い。しかし、食べ物に関係か、中年を過ぎると太り出す人が多いようだ。カシュガルなどではチャドルを被った婦人も多い。

住居は日本と似ており、玄関を入ると土間があり、ここで靴を脱いで一段高くなっている部屋（絨

毯敷き）へと上がる。

彼らが歌と踊りに秀でていることも特筆すべきことで、唐の時代、クチャから広まった「亀茲楽」は長安で一大ブームを引き起こした。現在でも、新疆は民族音楽の宝庫で、彼らの開放的で陽気な性格がその起因となっているのかもしれない。

*カシュガルについて

遠い昔、疏勒と呼ばれ、シルクロードのバザール、オアシスの町として古くから発展してきた。回教徒と漢民族とがそれぞれに城を築いており、市街は疏付（回城）と疏勒（漢城）とに別れるが、互いに雑居している地域も少なくない。かつて、玄奘もここに立寄り、マルコ・ポーロも訪れている。カシュガルとは「緑のルリ瓦の家」、「玉の市」の意味だといわれ、宋か元以降に名付けられたという。中央アジアの多くの国や都市が興亡をしてきたのに対し、カシュガルは昔から現在まで存続してきた大都市である。その間、カシュガルは中央アジアの交通の要所であり、1860年の露清北京条約によって開市されて以来ロシア商人が多く往来し、商業が発展してきた。また、英領インドに近かったことから、イギリス総領事館も置かれてきた。我々が泊まったチニアケホテル（其尼巴合賓館）は旧イギリス領事館である。

現在、カシュガルは新疆一の手工業都市であり、カスカンバザールと呼ばれる通りでは多くの職人達が素晴らしい腕と伝統技術とを披露してくれる。付近は南疆最大の農牧地帯で、カシュガルは生産物の集散地ともなっている。また、新疆最大の回教寺院であるエイティガル寺院をはじめとして史跡に富むため、「小北京」とも呼ばれる。

住民はウイグル族が最も多いが、他、様々な民族が居住し、かつてこの地を訪れた大谷探検隊の橋瑞超は「異人種の展覧会、種族の市場」と記している。正式には喀什噶爾と書くが、略して喀什と書かれることが多い。

参考文献：『週間朝日百科世界の地理・中国5』『地球の歩き方39』村松一弥『中国の少数民族』梅棹忠夫『中国の少数民族を語る』大谷探検隊『シルクロード探検』陳舜臣『シルクロードの旅』NHK『シルクロード・絲綢之道6』色川大吉『シルクロード悠遊』他

7500M 峰 一 覧

山 名	標高	国名	山群・地域	山 名	標高	国名	山群・地域
アンナプルナⅡ峰	7937m	ネ	アンナプルナ山群	ダウラギリⅡ峰	7751m	ネ	ダウラギリ山群
アンナプルナⅢ峰	7555m	〃	〃	ダウラギリⅢ峰	7715m	〃	〃
アンナプルナⅣ峰	7525m	〃	〃	ダウラギリⅣ峰	7661m	〃	〃
ガッシャーブルムⅢ峰	7925m	パ・中	ガッシャーブルム山群	ダウラギリⅤ峰	7618m	〃	〃
ガッシャーブルムⅣ峰	7980m	〃	〃	チャンツェ	7553m	中	チベット南部
ガッシャーブルム東峰	7772m	〃	〃	チョゴリザ北東峰	7654m	パ	チョゴリザ山群
カメット	7756m	イ	カメット山群	チョゴリザ南西峰	7554m	〃	〃
ガンケール・プンズムⅠ峰	7541m	ブ・中	ガンケール・プンズム山群	ディステギール・サール主峰	7885m	パ	ディステギール山群
ガンケール・プンズムⅡ峰	7532m	〃	〃	ディステギール・サール中央峰	7760m	〃	〃
ガンケール・プンズムⅢ峰	7516m	〃	〃	ディステギール・サール東峰	7696m	〃	〃
カンジュト・サール	7760m	パ	カンジュト山群	ティリチ・ミール主峰	7708m	パ	チトラル
カンチュンツェ	7640m	ネ・中	クーンブ山群	ティリチ・ミール東峰	7691m	〃	〃
カンバチェン	7903m	ネ	カンバチェン山群	トリヴォール	7728m	パ	モムヒル山群
ギャチュン・カン	7922m	ネ・中	クーンブ山群	ナムチャ・バルワ	7762m	中	チベット東部
クーラ・カンリ	7554m	中・ブ	チベット南東	ナダ・デヴィ主峰	7816m	イ	ナダ・デヴィ山群
クーラ・カンリⅡ峰	7541m	〃	〃	ヌブツェ	7879m	ネ	クーンブ山群
クーラ・カンリⅢ峰	7532m	〃	〃	ヌブツェ南東峰	7815m	〃	〃
クーラ・カンリⅣ峰	7516m	〃	〃	ヌブツェ西峰	7795m	〃	〃
グルラ・マンドーラ	7766m	中	チベット南部	ヌブツェ北西峰	7745m	〃	〃
クンヤン・チッシュ	7852m	パ	ヤスギール山群	バトゥーラⅠ峰	7785m	パ	バトゥーラ山群
クンヤン・チッシュ南峰	7620m	〃	〃	バトゥーラⅡ峰	7710m	〃	〃
ゴジュンバ・カン	7806m	ネ・中	クーンブ山群	ピーク29	7835m	ネ	マナスル山群
ゴジュンバ・カンⅡ峰	7646m	〃	〃	ピーク38	7589m	ネ・中	クーンブ山群
ゴングール	7719m	中	新疆・ゴングール山群	ヒマール・チュリ	7893m	ネ	マナスル山群
コングール・チュビエ	7595m	〃	〃	ファング	7647m	ネ	アンナプルナ山群
サーセル・カンリⅠ峰	7672m	イ	サーセル山群	ポーラ・ガンチェン	7661m	中	チベット南西
サーセル・カンリⅡ峰	7513m	〃	〃	マッシャーブルム北東群	7812m	パ	マッシャーブルム山群
サルトロ・カンリ	7742m	パ	サルトロ山群	マッシャーブルム南西群	7806m	〃	〃
サルトロ・カンリⅡ峰	7705m	〃	〃	マモストン・カンリⅠ峰	7526m	イ・パ	クムダン山群
シスパール	7611m	パ	パサー山群	ミニヤ・コンカ	7556m	中	四川・ミニヤコンカ山群
ジャヌー	7710m	ネ	カンチェンジュンガ山群	ムスターグ・アタ*	7546m	中	新疆・パミール
シャルツェ	7502m	ネ・中	クーンブ山群	ヤルン・ピーク	7535m	ネ	カンチェンジュンガ山群
スキャン・カンリ	7544m	中・パ	K2山群	ユクシン・ガルダン・サール	7530m	パ	カンジュト山群
スキャン・カンリ南西峰	7500m	〃	〃	ラカボシ	7788m	パ	ラカボシ山群
				リンチタ	7541m	ブ	ガンケール・プンズム山群

*アイウエオ順。山名と標高は『コンサイス外国山名辞典』（三省堂）によった。

アタ通信

準備日程に代えて、出発前までの通信をそのまま資料として掲載する。
遠征準備の生の姿が少しでも伝われば幸いである。

ムスターグ・アタ通信 No. 1

平成5年1月25日発行

隊長 酒井 国光

新しい年を迎えました。おめでとうございます。今年は、ムスターグ・アタに向かう年です。隊員の皆様、お元気で、山行やトレーニングに励んでいることと思います。十分な準備をして、楽しい・悔いのない遠征にしたいものだと考えています。隊員各位の、ご協力を期待しております。

隊員の意志疎通の一助として、隊の通信を発行していきたいと思い、とりあえず私が第1号を出します。以降は、係を決めたいと考えています。

1. 現在までの隊員

役	氏名	年齢	住 所
隊長	酒井 国光	53	茨城県筑波郡伊奈町谷井田1389-5
副隊長	西嶋錬太郎	50	石川県金沢市西金沢3-442-1
隊員	樋上 嘉秀	48	大阪市東成区神路2-9-16
〃	天城 敏彦	45	東京都新宿区高田馬場4-22-9
〃	金森 博之	38	神奈川県川崎市麻生区下麻生765-1、3-502
〃	大竹 尚子	35	福島県北会津郡北会津村大字宮袋甲590
〃	高橋 敏雄	34	宮城県仙台市青葉区台原1-10-2
〃	志小田美弘	34	宮城県石巻市泉町4-13-7-340
〃	池上 邦彦	31	福島県会津若松市西七日町10-27-1
〃	伊藤 英世	26	東京都練馬区石神井町6-17-35-222
考慮中	谷田川 武	39	東京都練馬区南大泉5-37-14
考慮中	中島 俊弥	28	長野県塩尻市広丘原新田174-202

2. 出発までの予定の概観

- *3月5日(土) 19時～ 『第2回合宿』 於高田馬場、詳細は後日連絡
- *3月6日(日) 10時～17時 『事故対策研修会』 別紙案内による
- *3月20日～21日 1泊 『第3回合宿』 係・会津在住隊員
- *5月2日～5日 4日以内で『第4回合宿』 係・未定
- *5月29日(土) 午後 『HAJ総会』、詳細は月報にて案内
- *5月30日(日) 終日 『HAJ中国派遣2隊合同梱包』 HAJルーム
- *7月10日(土) 15時～『家族会議』、19時～『壮行会』

3. 隊務分担確認

(第1回合宿で相談したもの、一応次回まではこの分担で動いて下さい。)

- | | |
|---------------|-------------|
| ・ 渉外 酒井 | ・ 登攀 西嶋 |
| ・ 装備 志小田、高橋 | ・ 食糧 天城、伊藤 |
| ・ 梱包 志小田、高橋 | ・ 輸送 志小田、高橋 |
| ・ 記録 池上、(谷田川) | ・ 通信 池上 |
| ・ 気象 大竹 | ・ 医療 樋上 |
| ・ 庶務 (谷田川) | ・ ゴミ 池上 |

※欠員、補充、変更などは3月5日のミーティングでしたいと思います。

4. その他

※ より楽しい山行になるように、関連地域の本を読みたいと思います。すでに、隊員各位が読んだもので、参考になるものがありましたら、リストを送って下さい。西域探検に関するものでも結構です。

推薦図書名

氏名

	書名	著者	出版社	備考
1				
2				
3				
4				
5				

ムスターグ・アタ通信 No. 2

平成5年2月23日発行
酒井 国光

ご無沙汰しております。お元気でしょうか。

さて、前回もお知らせしました、第2回合宿の要旨が決まりましたので、連絡いたします。万障繰り合わせの上、ご参加下さい。

1. 日 時 3月5日(土) 19時～6日(日) 17時

2. 場 所 5日 高田馬場・天城邸
6日 高田馬場・シチズンボウル会議室

3. 予 定 *集合 5日19時・天城邸またはヒマラヤ協会事務所

(1) 自己紹介

(2) 登山隊の概要

21時まで

(3) 役割分担

(4) 今後の予定

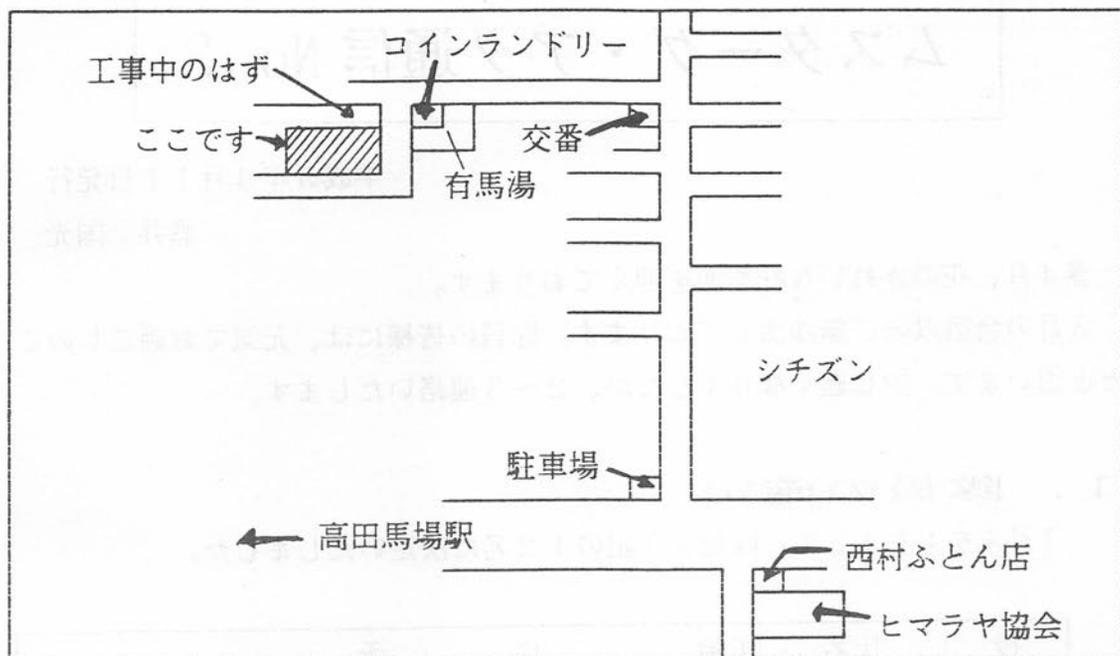
(5) 懇親会

天城さんがインド風カレー、ご飯、インド風つまみ1品を用意してくれるそうです。

その他は、当日買い出しをして準備いたします。若干の負担をしていただきます。また、さし入れは大歓迎です。つまみ、アルコール類などです。よろしく。

※寝袋は各自持参して下さい。

*6日の予定は別紙参照のこと。



天城邸へのルート図

住 所 東京都新宿区高田馬場4-22-9

☎ 03-3371-9149

現在までの隊員

役	氏名	年齢	住 所
隊 長	酒井 国光	53	茨城県筑波郡伊奈町谷井田1389-5
副隊長	西嶋錬太郎	50	石川県金沢市西金沢3-442-1
隊 員	樋上 嘉秀	48	大阪市東成区神路2-9-16
"	天城 敏彦	45	東京都新宿区高田馬場4-22-9
"	金森 博之	38	神奈川県川崎市麻生区下麻生765-1,3-502
"	大竹 尚子	35	福島県北会津郡北会津村大字宮袋甲590
"	高橋 敏雄	34	宮城県仙台市青葉区台原1-10-2
"	志小田美弘	34	宮城県石巻市泉町4-13-7-340
"	池上 邦彦	31	福島県会津若松市西七日町10-27-1
"	伊藤 英世	26	東京都練馬区石神井町6-17-35-222
考慮中	谷田川 武	39	東京都練馬区南大泉5-37-14
考慮中	柏倉 秀克	37	愛知県名古屋市長区鳴海町大将ヶ根13-196
考慮中	中島 俊弥	28	長野県塩尻市広丘原新田174-202

* 谷田川はH A J 89年チャラリ隊、92年大姑娘山隊隊員

* 柏倉はH A J 91年雪宝頂隊隊員。

ムスターグ・アタ通信 No. 3

平成5年4月11日発行

酒井 国光

春4月、花のきれいな好季節を迎えております。

3月の合宿以来ご無沙汰しております。隊員の皆様には、元気でお過ごしのことと思います。少し遅くなりましたが、2～3連絡いたします。

1. 隊員の確定

3月末をもちまして、隊員を下記の12名に決定いたしました。

役	氏名	年齢	住 所
隊長	酒井 国光	54	茨城県筑波郡伊奈町谷井田1389-5
副隊長	西嶋錬太郎	50	石川県金沢市西金沢3-442-1
隊員	樋上 嘉秀	49	大阪市東成区神路2-9-16
"	天城 敏彦	46	東京都新宿区高田馬場4-22-9
"	谷田川 武	39	東京都練馬区南大泉5-37-14
"	金森 博之	39	神奈川県川崎市麻生区下麻生765-1,3-502
"	大竹 尚子	36	福島県北会津郡北会津村大字宮袋甲590
"	高橋 敏雄	34	宮城県仙台市青葉区台原1-10-2
"	志小田美弘	34	宮城県石巻市泉町4-13-7-340
"	池上 邦彦	32	福島県会津若松市西七日町10-27-1
"	中島 俊弥	28	長野県塩尻市広丘原新田174-202
"	伊藤 英世	26	東京都練馬区石神井町6-17-35-222

※年齢は出発時

2. 第4回合宿の予告

前回の合宿時にも話しましたように、谷川岳で行いたいと思います。

概要 *5月2日～5日まで(全日参加でなくても良い)

*谷川岳東面(BCは車の入れるあたり)

*係り…東京地区の隊員 *天城、谷田川、金森、伊藤隊員が連絡を取り合って企画して下さい。

*内容…雪上技術の確認、易しい雪稜の登攀、係りの計画の確認、
盛大な懇親

*詳しい連絡は4月24日位までにしましょう。

3. お問い合わせ

隊員が確定しましたので、中国登山協会に正式な登山申請をします。パスポートの必要ページのコピー、写真をまだの隊員は早急にヒマラヤ協会事務所まで送って下さい。

4. 行動計画表

前回の行動表には疑義が出されておりました。3月29日の東京集会時に、酒井、天城で検討し別紙のようなものを作りました。

くわしくは、5月の合宿で話しますが、これを基本として食糧、装備などを計画して下さい。

補足 *○印は休養日

*29日～31日は基本的には、スバシにての高所順応活動と休養であるが、順応の程度により、可能な隊員をBCに上げる。

*8月2日にロバでC1まで荷揚げする。

*4人×3パーティを基本とするが、最大6人パーティもありうるものとして食糧、装備を配置する。

*頂上アタック前の休養はBCを基本とするが、C1休養もありうる。

*BCへの滞在リミットは8月21日までである。

5. 個人装備について

昨年隊員より、上部は非常に寒いとの伝達があります。同じ協会派遣隊の経験ですので、尊重し、防寒対策の不備で登頂出来なかったということのないようにします。

この面でも、5月の合宿で検討しましょう。

桜前線が北国へと春を運んでいく、そんな季節ですが、皆様には如何がお過ごしでしょうか？大変遅くなってしまいましたが、3月・第2回合宿の概要をまとめ、お知らせします。これからは、酒井隊長に代わり、記録係の私の方で通信を流します。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

A. 天城邸合宿

*日 時： 3月6日 19時半～

*参加者： 酒井、西嶋、樋上、天城、大竹、高橋、志小田、中島、伊藤
谷田川

*概 要： 自己紹介、係分担の確認、隊概要の確認、装備の基本確認、懇親

*ミーティング内容

◎隊の概要・登山技術について（酒井）

原則として全員登頂を目指し、そのように行動計画を組む。

アタック前は、状況により、B・Cではなく、C1スティとすることも有り得る。

登山史をまとめたが、他にもしあれば教えてほしい（プリント配布）。

登山技術については、これまでの経験などにより、各自その方法などの違いが考えられるので、無理に統一する必要はないが、共通理解をしていく必要がある。資料（アムネマチンのプリント配布）を基に確認しておいてほしい。合宿（山行）の際に共通理解を計りたい。去年の隊の報告からすると、フィックスの必要は殆ど無く、コンティニューアスで行動することになる。

#登山技術について名称は統一する必要があるとの意見が出される。

◎係分担について（酒井）

第1回合宿で話しのあった中川氏が不参加となったので、西嶋氏に副

隊長と共に、登攀係をお願いする。金森、中島は後に決定する。それ以外は第1回合宿の分担で進める。

◎個人装備について（志小田）

係よりフルにリストアップをしたので、必要のないものを削る形での検討をお願いしたいとのことで、一覧表を全員でチェックする。

往路はアナカンを使用するが、帰路はアナカン無し、各自が持って帰ってくることとなる。アナカンはひとり10～15kg。

去年の隊が上部は非常に寒かったとのことで、防寒対策、特にオーバーシューズの必要性が議論になるが、結論は出ず。

雪が深く、ラッセルが予想されるので、個装としてスキー、わかんを用意することも考えられるが、共同でワカンが6脚あれば対応できるだろうということになる。

西嶋氏より、プラスチックブーツが突然破壊する事故が少なくないので、メーカーなどによって違いがあると思うが、古いブーツは新しくしていったほうが良いとの注意がされる。大体数年で破壊するケースが多いとのこと。

一覧表の中にテントシューズ・テルモス追加、名刺・Yシャツ・ネクタイを削除する。

◎共同装備について（高橋）

カシュガルのデポ品を基に、係が作成した一覧表を全員でチェックする。しかし、デポ品の内容が不明確のところが多く、係から中川氏に細部を確認することとなる。

B・C用の大テントがデポ品に無いのでどうするか→酒井隊長が山森氏と相談する。

圧力釜、コッヘルは不足しているので、日本からの持参を考える。

B・C用ポットも持参するか、現地購入する。

トランシーバー（無線）は出発時持参する（4台必要）。

O2パックはデポ品に無いので、対応（入手の可否など）を調査、検討する。

多用することが考えられるので、赤布は多く持参する。

高度計は各自ある人が持参する（隊として3台程度）。

上部テントは3パーティーでタクテスを考え、C3までが必要。

◎梱包・輸送について（高橋）

係よりのプリントを基に簡単に確認をする。5月30日（日）、玉珠峰隊と共に作業、アナカン分の隊荷を最終梱包する。

スバシ～B・Cはラクダ、B・C～C1はヤクかロバで、B・C～C1の費用は現地で隊の負担となる。

プラパールはH A Jで用意をしてくれる。

◎食糧関係について

ルームにある物を中心に係で検討をし、不足分を購入するが、購入は隊の負担となるので、できるだけ少なくする。まずは、係りでルームにある品目を調べる。生鮮品などは現地購入する。

B・Cは現地に頼める（コックを雇える）が、費用は隊の負担となる。頼む方向で考える。

◎3月合宿について（大竹）

3月20日～21日で安達太良山で実施する。計画のプリントが配布される。

◎その他

パスポートコピー（写真のあるページ）とパスポート用写真5枚をH A Jに提出のこと。

B. 事故対策研修会

*日 時： 3月7日 10時～16時 シチズンボールにて

*参加者： A参加者+金森、玉珠隊・ヌン隊隊員

*概 要： 高所医学の知識について講演、医療機器の取扱い（実体験）、ヒマラヤの気象・雪崩について講演、ヒマラヤの事故例について、これらに関する質疑応答

*研修内容

詳細は資料参照。講演内容に関する資料集1と死亡遭難事故例をまとめた資料集2が配布。資料集全体に良く目を通してほしいとのこと。

☞ 3月山行合宿にて5月合宿は谷川岳方面に決定。

4月22日、5月合宿の計画のために東京近郊組が集まりました。その際、合宿事項以外で話に出たことをお知らせします。

日時： 4月22日 19時～ ルームにて

参加者： 酒井、天城、金森、伊藤、谷田川

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

1. 隊員の変更と係について (酒井)

残念ながら、大竹さんが、おめでたの為遠征不参加となりました。大竹さんの係であった気象係を中島さんにお願いする。

2. 行動計画の変更について (酒井)

スバシ～B・Cへはラクダの荷揚げの関係で1日で入らねばならないとのことで、当初は高度順化の状況を見て、順次何班かに別れて入る予定であったが、8月1日に全員でB・C入りする。よって、この前に全員高度順化をする必要があり、2日は全員B・C休養となり、C1への荷揚げはその後(3日)になる。この関係により、登山期間が短くなるため、下山はスバシ泊をやめて、B・Cからカシュガルまでを1日で移動することにする。以上が通信3の行動計画表と変更になります。

3. 別送品梱包について

別送に必要なプラパールの数の概算を検討する。→15～17個

個装はふたりにてプラパール(大)1個を使用する。中は撤収時燃すことを考えてダンボールを使用する。嵩および重量の目安は蜜柑箱1個、15kg程度である。品目はシュラフ、ピッケル、アイゼン、靴、登攀具など。

個装以外、大きな物は大テント、ガモウパック、O2パック、食料品など、プラパール1個30kgを目安に梱包する。

プラパール、ダンボールはHAJで用意してくれる。

5月30日・最終梱包の前に23日東京近郊組で梱包の下準備をする。

5月30日は10時、ルーム集合。出発当日、各自20kgを預けられるので、その点も考慮して別送品を考える。

4. 食糧関係について (天城)

ルームにある食糧などを係でチェックして、基本計画を立てた。米、ラーメン、ジーフイズ関係はO, K、缶詰が少ないので購入予定。まだ、寄贈品なども残っているので、最終的に品物が揃ったところで、メニューを最終決定する。

5. その他

3月6日合宿の際にも話題になりましたが、中川氏がいて、防寒の問題がまた話題になりました。その結果、でき得れば、オーバーシューズは持参した方が良いでしょう (重たい物ではないし、必要無ければ使用しなければそれでいいわけですので) との方向になりました。ただし、使用している靴などにもよって違いが考えられるでしょうし、アイゼン利用の問題もあります。5月の合宿で検討できればと思います。ちなみに、プラスチックブーツ用のオーバーシューズはカモシカ、石井で購入、注文できるそうです。

☞ コ ラ ム ☜ — ウイグル料理のフルコース —

ウルムチ、カシュガルで味わえるのがウイグル料理。シルクロードの要衝とあって、この料理はウイグルはもとより、トルコ、イスラム、スラブの特色を合せ持った独自のもので味合い深い。フルコースでいくと、まず食卓に出てくるのはハミ瓜、すいか、ぶどうなどの果物で、次に食前のロシア風クッキーが出る。そして、大皿に山と積まれてナン (パン)、ウイグル式の揚げラーメンであるサンザーが出てくる。これを主食として食べていると、串肉焼きのシシカバブー、羊の内臓料理であるエイシップ、巨大な蒸し餃子などが出、最後にソーメンに似たスイガッシ、ウイグル風ピラフのポロが出てくる。ボリューム一杯の国際色溢れる料理だ。

1993.4.25 記録係 谷田川 武

5月山行合宿について、以下のように計画しました。お知らせします。

1. 期 日： 5月2日～5月5日

参加の可否、一部参加の人はその日程を電話で酒井隊長へ30日までに連絡をしてください。

2. 集 合：

2日・12時 マチガ沢出合い新道（川沿いの下の道です）駐車場
駐車場付近に幕営

3. 行動概要：

2日午後＝テント設営、懇親 3日＝雪上訓練（場所は未定）
4日＝東尾根か西黒尾根登山、ミーティング、懇親
5日＝ミーティング、8時解散予定 *雨天の場合は変更有り

4. 装備関係：

*テント・マット関係（酒井） 鍋・コッヘル（酒井・天城）
大型コンロ（酒井・天城） E P I（伊藤）
ランタン（天城・金森） スノバー（池上）
ザイル9mm（金森・池上・伊藤・仙台組各1）
*個人装備は冬山装備一式、ゼルプスト、カラビナ3～4本、8環、
シュリング3～4本、日焼け止めクリーム、食器、雨具、その他

5. 食糧関係：

2日夜（酒井） 3日朝（伊藤） 3日昼（天城）
3日夜（金森） 4日朝（谷田川） 4日昼（行動食各自）
4日夜（天城） 5日朝（仙台組）
*2日昼は各自済ませて集合 *アルコールは適宜持参

6. その他

ミーティング内容を各係で検討し、必要があれば資料をご用意下さい。

今年の谷川岳は残雪が多いとのこと。

現在、志小田・中島・谷田川は仕事のため一部参加の予定です。

梅雨の鬱陶しい頃となりましたが、皆様にはご清栄のことと思います。去る5月30日のアナカン作成時に話された内容のまとめを中心として、今回はニュースを流します。各係りで抜け落ちている事項などがありましたら、7月の家族会のときに補足をしてください。

1. アナカン作成

日時 : 5月30日 10時～ HAJ事務所にて

参加者 : 西嶋氏を除く全員

内容 : まずは行動食の詰め合わせを作成する。その後、内容別に食料をプラパール(小)にパッキングする。

昼食後、食料、団装、個装、医薬品などを適宜組み合わせて、プラパール(大)13個を作成する。1プラパールの重量、30kg前後とする。各プラパールに内蔵物の概要を明示、リストを作成する。(6月1日に発送)

作業終了後、簡単な打ち合わせをする。

その後、残れるメンバーで懇親。

2. 打ち合わせ事項

◎食料関係

ラーメンはまだ届いてないので、嗜好品と共に出発時持参する。

日本茶、コヒーがないので、もし在れば、持参してほしい。また、各自、好みの嗜好品を持参してほしい。

果物などは現地購入する。

C3用は現地で荷造り、対応する。

缶切りを各テントに1個ずつ団装として配置する。

上部テントのメニューのパターンのプリントが配布される。

◎医療関係

医薬品のリストが配布される。

既に送付してある各自の身体状況の表を出発までに提出してほしい、また、遠征期間中は、チェック表(以前に見本を配布、後日本物を配

布)記入をお願いしたいと係りより話される。

往復路用として、風邪薬・胃腸薬・解熱剤・カットバン位を係りとして持参してほしいとの話が出される。

カシュガル～スバシ間は道があまり良くなく、土埃が考えられるので、各自マスクを持参した方が良いと隊長より指摘される。

上部キャンプの医薬品はどうするかとの質問に対し、各キャンプに用途を書いた最低限の医薬品を配置することとする。上げるものは、ビタミン剤・解熱剤・下痢止めなど。

各自持参するものとして、目薬、体温計など。

肝炎の注射は特に隊としては設定しないので、各自対応してほしいと隊長より話が出る。

◎個装関係

本日、アナカンに詰めた個装品を各自チェックしておく。

登攀道具として、ユマル、下降器、カラビナ5本、シュリンゲを持参する。

防寒対策として、高所帽、シルクのマスク (レイサーが使用する物) オーバーシューズを用意していない人はオーバーシューズを用意する。ただし、オーバーシューズが準備できない場合は、アタック時のみ、他人のを借りれば良いと隊長より指摘される。

その他、テルモス、リップクリーム、日焼け止め、カセットテープ (各自好きな音楽を2, 3本)、ヘッドランプ用の乾電池などの持参を忘れないようにと話しが出される。

自分の顔を見るため、小さな手鏡があると便利であるとの話も出る。

ライターを個装として各自3個持参する。

個人用マットは各自持参する。

◎記録関係

カメラ撮影は自由。帰国後、お互いにスナップ写真を交換する。

スライドは係りで撮影する。

◎団装関係

テント・コンロ不足分は協会として購入。ガソリンコンロは30日当日購入した。

他のものは現地デポ品で対応する。ただし、ブリキ鍋、ポットは現地

購入する。ガソリン入れも現地購入する。

無線（4台）用のアルカリ電池100本は日本から持参する。他の用途は現地デポで対応する。個人用は個人で持参する。

ガモウパックは手持ちで持参する。O2パックは協会に確認をする。B・Cメステント設営のため、ブルーシートを使用する。現地に3枚しかないので、不足分（協会にある分）を持参する。

上部テント用の銀マット8枚を持参する（酒井2、天城1、樋上1、志小田1、池上1、中島1、伊藤1、谷田川1＝9）。

☞ 3. ワッペン作成について

庶務係りから隊のワッペン作成の提案をしたいと思います。

一人2枚で、1枚1200～1600円位の費用が掛かります。形、デザインなどは係りに任せてほしいと思います。何枚作成しても、1枚の費用は変わりませんので、作成の可否、希望の枚数を20日までにご連絡ください。2枚作成していい場合は連絡の必要はありません（連絡のない場合は2枚作成希望とします）。必要なしという人が大多数の場合は作成をしません。作成希望の多い場合は、申出の枚数を作成します。

※ 4. パスポート関係連絡

パスポートそのものを20日過ぎまで書留でH A J事務所に送るか、持参するかをしてください。

コ ラ ム カシュガルの一昔（80年前のカシュガル）

カシュガルは、シナ中央アジアにおける最大の都会で、人口は約6万あり、政治、経済の中心である。地理的にはロシア領トルキスタンから、テレク・ダワンの峻嶺を越えて、シナ領トルキスタンにはいる関門にあたり、言葉をかえれば、古来東西文明の接触地で、歴史上及び国際政治上、注目すべき特長をもっている。ここはシナ領であるから、シナ官憲の役所があり、また英領インドに接近しているからイギリス総領事館が、ロシアに隣接しているからロシア総領事館が、それぞれある。・・・この様にイギリス、ロシア、シナの官憲が駐在し、たがいにならみあっている政治上、軍略上もっとも重要な地なのである。昔はここでどんなに多くの血が流されたことであろう。位置は北京からへだたること日本里数でおよそ2000里の西北隅にあたり、葱嶺から流れ出るキジルスウ（土語で赤い水という意味）川のほとりにある。

漢時代の疏勒という国は、こんにちのカシュガル付近を指すのではないかと思う。また玄奘三蔵の『大唐西域記』にある劫沙という国もこのあたりでなければならぬ。このカシュガルでは、・・何人も外国人が発掘を試みたのだが、むかしからの大都会で人口も非常に多かったにもかかわらず、めばしいものは何一つ発掘されていないのである。・・その理由は十分には解明できないが、次のように考えることができる。漢代から今日までこの都会は一度も廃滅したことはなかった。常に大都会としての形態を持続しつつある以上、・・アラビアにおこった回教徒がしだいに勢力をのぼして、中央アジアに力をもつ仏教を破壊しようとしたに違いない。彼らはいくたびか西方アラビアからテレク・ダワンの峻嶺を越えて、このカシュガルに攻め入ったので、古代仏教の遺跡もそのとき失われたのだろうか。・・これまでに・・これという発掘物を得ないのは、まことに不思議で、研究しなくてはならない余地があると思う。大局から見て、中央アジア自身が、正確な歴史を持たないので、この間に興亡した国々の沿革はもとよりこれを明らかにすることはできないが、ただこのカシュガルだけは、昔から今日まで存続した大都市であるから、かならずやこれを証明するだけの発掘物を発見することができるはずである。カシュガルに集まる人種の数是非常にたくさんで、さながら種族の市場といった観がある。まず国籍からいえば、シナ人、ロシア人があげられるが、ロシア人といってもその中には、アンディジャン人あり、サマルカンド人あり、タシュケント人あり、純粹のロシア人もあり、といった状態で、シナ人、イギリス人にしても同様であるから、各方面さまざまな人種が集合して、種族の展覧会を開いているようにみえる。ここはまた、回教徒と漢民族がそれぞれ城を築いており、その城は約八キロほどの距離を置いて、両者は画然と区別されているが、そのほかたがいに雑居している地域も少なくない。・・城の内外とも繁華をきわめている。また、城の東北四キロあまりへだたった、うっそうと老樹の繁る森の中には、回教徒のメシッドという広大な寺院があって、そこはトルファンに次ぐ霊場として、回教徒の巡礼で年中・・賑わっている。物産は鉄器その他の加工物で、羊毛獣皮等は中央アジアの各地からいったんここに集まって、また各方面に輸出分配されている。このようにこの町は中央アジアにおける政治、商業上の中心点であるから、今日まで中央アジアに旅行したもので、カシュガルを紹介しない人は一人もいない。（橋瑞超 「中亜探検」・・大谷探検隊『シルクロード探検』）

出発の日がいよいよ近付いてきましたが、体調の方はいかがでしょうか。何かと慌ただしい時ですので、お互いに体調には気を付けましょう。今回は、去る家族会の後のミーティングで話された点と出発に向けての連絡事項とをお知らせします。何か不明な点がありましたら、時間がないので、直接酒井隊長の方へ連絡をして下さい。

A. 合同家族会

日時 : 7月10日(土) 15時～ シチズンボール会議室

内容 : 全体会(ヒマラヤ協会より諸説明)

隊員および家族の紹介

隊ごとの打ち合わせ

隊打ち合わせ内容

隊長 : 出発は24日、CA926便・成田14時55分発
前23日夜ルームに集合し、24日箱崎からまとまっていく。

食料 : 不足分は当日持参する。各自余り物などがあれば適宜持参。

装備 : トランシーバーは協会に登録をしたので、その分5台を金森
が持参する。

ツェルトが抜けていたので、仙台組で2体持参する。

個装として個人用マット、テルモスを忘れないように。

医療 : 目薬は数があるので、個人では持参しなくとも良い。

庶務 : ワッペンを頼んだ。できるのが20日前なので、出発間際に
送る。

登攀 : BC～C1間は標高差が大きいので、仮スティ(ABC)を
設置することも考えておいて方がいいのではないか。

下山の荷下げにおいても、アタック後の体力の消耗、荷物料
などから考え、C1～BC間はロバを使用した方がいいのでは
ないか。この2点が問題点として提起される。

B. 合同壮行会

日時 : 7月10日(土) 19時~ 東方会館
多数の参加で盛り上がる。

C. 出発に向けて

集合 : 23日 19時~ HAJルーム
23日にどうしても来られない方は24日8時半までに来るよう
にして下さい。23日来られない方は夜ルームにご連絡下さい。
24日早目に箱崎より成田に向かいます。

荷物 : 預けられる荷物は一人20キロまでです。これと別に機内持ち
込みも相当量可能です。しかし、隊の荷物、帰りの荷物のことな
ども考え(帰りはアナカンはありません)、持参してください。
なお、個装関係のことなどが先の通信7号に載っていますので、
変更点を除き、もう一度確認をして下さい。

庶務 : 89年シャラリ隊、92年大姑娘隊の大久保博氏よりフィルム
20本(コダックASA100・ポジ=スライド用)を頂きました。
また、私が富士フィルムより貰った分の余り20本(ベルビ
アASA50・ポジ用)があります。23日に分けたいと思いま
す。

ワッペン2枚を同封で送付します。出発直前で申し訳ありませ
んが、適宜利用してください。費用は1枚 円です。23
日徴収したいと思いますので、宜しく。

成田から北京までは飛行時間4時間です。中国時間は日本時間
より1時間前の時間、即ち日本時間17時は中国時間では16時
となります。

飛行機の座席割振り、ホテルの部屋の割振りなどは庶務の方で
やりますので、協力をお願いします。

*ワッペン送付の件があり、このニュースも出発直前の連絡となってしま
いました。申し訳ありません。

36日間の楽しい山旅を願って、それでは23日夜に。

♣ 編集後記 ♣

中国登山協会の登頂証明書には、崑崙山脈・慕士塔格峰と書かれている。ムスターグ・アタを崑崙（コンロン）に入れるか葱嶺（パミール）に入れるか、ムズターグと濁るかについては種々の見解があるが、この報告書では日本で一般的に使用されているパミールのムスターグ・アタとした。

ムスターグ・アタとは「氷の山の父」の意という。カラクリ湖あるいはスバシから見上げるそのどっしりとした山容は正にその感があるが、その美しい山容は、コングールと比べると、母を感じさせるものもあるように思う。父にしろ、母にしろ、その白き奥深い懐に赤子が如き11名が楽しく集い、ほんの一瞬その頭頂にちょこんと触らせていただいた。登山口のスバシが3600m、頭頂部が7546m、ちょうど伊豆の海岸から富士山山頂を、空気の半分以下の中で、ただトボトボと蟻の如く歩を進めた——そんな登山であった。これは、そんな地味な、しかし大いに楽しんだ隊の記録である。

隊の性格から、隊員の思い出ということをも一つの基軸として編集した。また、帰国後、西嶋副隊長より読み物として面白いものにとという指摘を受けていたので、その点にも留意して編集したつもりであるが、出来はどうであろうか？係りとしては、報告書としての内容をおさえながら、報告書という枠から抜け出すことの難しさを感じている。

本来ならば、帰国後1年以内に発刊する予定であったが、原稿の集まり具合ということも一因としてあったが、大因として係りの私的理（父親の入院と死去、その後の様々な事項）により大幅に発刊が遅れてしまった。ここにこの点について深くお詫びしたい。

先日、久しぶりにバスに揺られて釜トンネルを抜け、早朝の上高地を見、高校時代、初めて見た穂高への熱い思いを何とはなしに思い出した。カラコルムハイウェイを上り詰め、美しい草原の向こうにぱっと現れたアタの姿は神々しいほどで、熱き思いを感じた。マイクロバスの11人の表情には同じような思いが現れていたと思う。そんな思いが少しでも伝われば幸いと思う。

（記・谷田川 武）

葱嶺の白き父なる山

93 ムスターグ・アタ隊報告書

発行日 1995年4月
発行人 HAJ'93 ムスターグ・アタ登山隊
発行所 日本ヒマラヤ協会 (HAJ)
〒170 東京都豊島区東池袋4-2-7
萬栄ビル501号
☎03-3988-8474
編集者 谷田川 武
